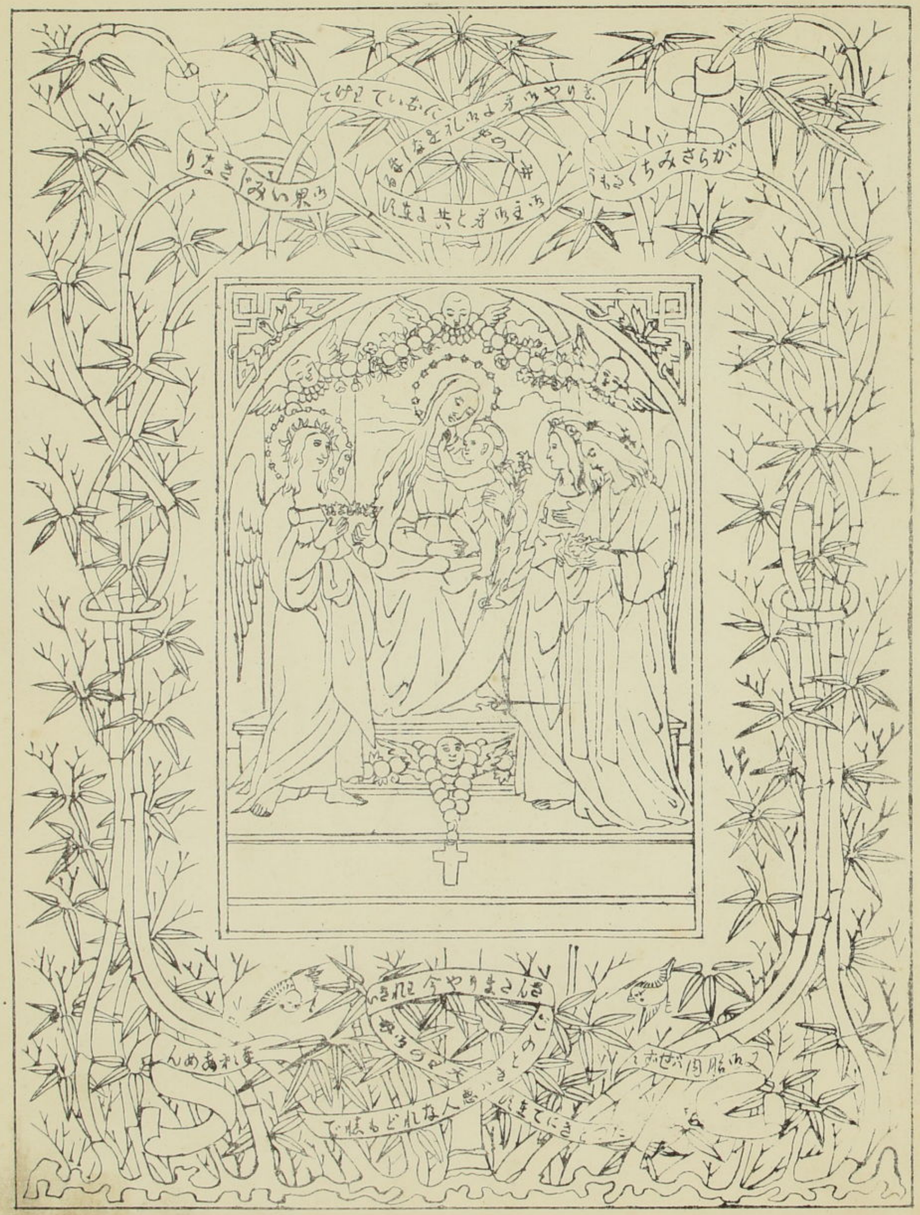
聖玫瑰花君記録

特別
ハ 7
3256

ハ7
3256

小杉藏書

<17530>



# 例言

# 玫瑰花冠記録

童貞聖瑪利亞の聖さるぎりよの花園に喩る事　どろんでるへた翻譯お影をなりよく兒しをゑりまにらにおいて校に開くらのなり

淨土世よりく六百廿三年
どろんでるへたいをぱにやと生まれ世
琉球よおいて天主に對して首を剃られ海に沉められ給ふものなり
此度我天主ご淨榮福と淨母さんたまりやご帰參をご為又日本切支丹
ごあにまの扶りを得させんが為に今再び梓に摺めるへ
淨土世以来ご八百六十九年日本明治二巳の月廿又日まにらにおいて筆を紀し

日本　司教　屋敷を敬なる敬ぐ

聖玫瑰花冠記録巻第一

ろぎりよ〻あ〻〻よ〻元集り根元之事

第一　諸〻の善人〻ご淨配合せハ天主ご淨前において大成便りと成ご童貞聖瑪利亞の淨配合ハ猶勝ごて天主ご淨前にて大成便りと成ご童貞聖瑪利

切支丹の敵人〻為小中小も肝要なる敵後為〻あ〻〻よハ難儀辛労を凌き誘惑を寛易く汚〻べき為ご強き力ご成天狗色貪の仇なる浮世小勝けべき為神力の〻強さ兵具なり又喩へ日早暁温氣に雨の潤ひが如く邪念ご私欲の熖を消して灵魂乃乾燥を潤〻吾乃菓實を結べるなり初程あ〻〻よ〻専要なる敵を教へ給ふんが為ご人為〻淨師範ご崇め奉敬ふをぜずすきりと〻ふ亦ハ天主の中小て久〻〻淨あ〻〻よをまにやく云亦称の中小て久〻〻淨あ〻〻よをなのさ給ふ為ご達ふもやよべ〻ごと度く働の給ふ

ものなり古への敵人達のよふも見へたる如くぐ〻ぢ〻ふ其内の内小容易く勝利を得ん事を欲さあ〻〻よの淨力を以二時ご雖ご利運開〻れ給ふりとく又もいぜず合戦の時いすら為るく軍兵ご為ご為ふ〻〻よ有ご為ふ小其勢利運を得さるもの為にあ〻〻よをなさ〻れ給ふ二年ご三月ご間淨ざるご其外淨土淨出世以来ご善人達〻よ小もおふ〻〻よく淨功徳ご證據ごて救へ給ふ〻先聖為ごろいた給ふ為ご女人の犯〻ふ為小ご淨給ふ為ごて淨土ごと宣ひ給れ給ふ為ご淨給ふ〻よをなさ〻れて玉ごと宣ひ給れ給ふ為ご淨給ふ〻よ

第二童身聖瑪利亞汚名に顕れ都鄙に称讃せらるゝ事 一十五

第二童身聖瑪利亞汚名に顕れ都鄙に称讃せらるゝ事 一十五

聖き天の御皇后ふて在ス童身聖瑪利亞ハ一切人間ノ救ひて御力洪大ふまし〳〵ス断天まし

ゆふと信中に信心を以ろぎりよ〳〵あふ〳〵よをゆ人〳〵に満大切添くをえ〳〵其故ハ淨刃直小告知せゆふ
け修行を專と致し聖會の信仰あ数中の勝まてる玄義をけあふ〳〵よを以て観〳〵專ら〳〵此如此〳〵を
取別淨大切小思召淨加護を加へゆふと云俊をけ巻〳〵に記を置き教〳〵淨奇特を以能ゆべ〳〵
猶又惜成證據小多〳〵の人組に入らず玫瑰花冠のおふ〳〵よを勤めざる以ゆハ醜悪ま洗みゆふと
いへ〳〵け修行よ募りてゆまあふ〳〵よし淨功徳を以越方の科を顧み後悔をいたして退悪修善の
身と成ゆの也是に付ゐ或学匠の記し置まてる一ツ〳〵奇特を爰に録をべ〳〵或人懇慕の道小
長下て進退改事なく告解にも其科隠し勝ぐら聖体の秘跡をも度〳〵受六年〳〵間重犯よ
會へ着して居ゆと淨或時淨慈悲の源小て在ス淨主彼罪人真實の告解の有ま以起ゐ赦に憐ゐゆふ
依て則神父〳〵淨前に条り科を遣さ〻顕〳〵ゆるものこ後ハ相應の淨教化者て科の償ごそ
一年〳〵間毎日玫瑰花冠のおふ〳〵よを勤むべ〳〵と定めゆふところ彼なり彼人最初小ハ如何小も大儀
よ思ひゆれ共天主の淨力を以一年〳〵間のゆへ云よ乃至ハ〻存生〳〵間勤め届ゐ致ゆの也是に不思
議成事とゆふ彼人右科送を詫び神父の前を立わた〳〵よを早始めゆる日ゆ所作小も言ふまも掛念
小も以おふ〳〵科を犯もゆなりゆりとこ如此の功徳小是のみにおらず後代にも亦多〳〵件の理りを以て
童身聖瑪利亜の玫瑰花冠〳〵あふ〳〵よを信仰を以勤むる数人〳〵を終中守護〳〵給ふ事明ゆ也

第三　玫瑰花冠ま二ツのおふ〳〵よ小極ま数と天小在ス〳〵あふ〳〵よ小ゐも淨主
玫瑰花冠ハ天に在ス〳〵と聖寵充満〳〵とけ小ツ〳〵あふ〳〵よ小ゐも淨主
せずすゆり〳〵と淨直小教へゆふ〳〵なりけおふ〳〵よを以て淨主天主の淨名誉を称ひ我等が



罪魂色身乃為に肝西安成程の事〳〵をもひなり悪事小が遁〳〵ゆへと彩み奉ゆふ
みちく〳〵あふ〳〵よハ天主ゆ人間を淨深度〳〵為小人界を請給んと思召ゆ節童身聖まりや
をば淨母と定め給ふん為にをんがぶり在る天勅こして天降給ひ玉ふ童身聖瑪利亜小勅りを
なす給ふ其淨詞と又聖婦いざくりなる淨詞と聖會小淨母をんさ淨ゆるやう淨隣こ淨取合を
もひなおべき為に又詞を加へゆふおふ〳〵よこ然ゆべけ二ツのおふ〳〵よハ鳥の両翼小異ふ異なるべ義ふい
け也形こ羽其を以一切人間を損却せんと欲く毒蛇なる天魔を遁るゆへ乃みなるべ天主の尊前近
ゆべ淨〳〵奉ゆふこの也又おふ〳〵よハ罪魂の如何なる誘惑をも防く兵具なり又往昔なそり至るか
ふやこゆ淨告を以見給ふ彼階小も喩ゆ数こ右二ツのおふ〳〵よ小両〳〵梯小に同〳〵十ゑの玄義ハ
十ゑ〳〵梯ゆに依ゆる〻ゆの友に罪魂を清め信心を以けおふ〳〵よを申上ば天神受取給ひて則
け梯ゆ天主乃尊前に運ひ給ひ我等が訴訟を叶へゆふ〳〵と淨母聖まりやこ淨下け給其淨死去なを已思ひ出
なゆべ靈魂色身と共小深き敬ひを以口にハけ小ツ〳〵あふ〳〵よを唱へ心にハ十ゑの玄義を観念をべ
き事最肝要なり

第四　童身聖瑪利亜ゆ尊ゆ玫瑰花冠の由緒〳〵よ残可申上時観念可致玄義之事

淨母聖瑪利亜ゆ玫瑰花冠こ就〳〵て天小在ス十五遍聖寵充満百五十遍を奉申上時観念可致玄義ハ
十ゑの内ゆ祝ゆハ淨歓ひ中の初ハ淨悲み終ゆハ栄福〳〵玄義是なり

御歓五箇條の玄義之事

第一章身聖瑪利亞ハさんの御母ゑるさん大天神を以て告を蒙り終ひ於御胎内天主子人界を請給ふ事
第二尊允童身聖瑪利亞ハ御親類なるえりさべとを尋ね玉ふ為に彼宿所に為御見舞に赴き給ふ事
第三尊允童身聖瑪利亞ハ御子耶蘇基利斯督を御誕生ー給ふ事
第四御子耶蘇此御誕生より四十日目小御堂小詣り天主父を捧け給ふ事
第五御母聖まりや御子十二歳の小時見失給ふをせるさんし於御堂学ひ居給ふを

三日目小見付奉らせ給ふ事

御悪み五箇條之玄義之事

此中の五ケ條を御悪みの玄義と申ハ御主せずすきりすと詰忍うへの御苦患を忘なさんたまりやハ為あにまにて後きの御小傷てなり

第一御主耶蘇基利斯督ぜすまりや森の中小て御あぶにを成し給ひ汗血の汗を流し給ふ事
第二石柱挂小搦め給ふ小及び数々の折檻を受給ふ事
第三御頭小茨の冠を押込まるる事
第四重りの御十字架を擔ぎ給ひかるとりうし山小到着ある事
第五十字架小掛り死ー給ふ事

栄福五箇條之玄義之事

此末の五條を栄福の玄義と申ハ御主御穏生の後ハ御色身にも栄福を受ひ同く御母さんまりや御上天を遂ある事を観ー奉む為に修てなり





第一御主耶蘇基利斯督死ー給ふより三日目小復活給ふ事
第二御主耶蘇基利斯督ゑまうすより四十日目小御上天ー給ふ事
第三御主耶蘇基利斯督御上天の後十日目小聖神ハ御母聖瑪利亞并御弟子達の上に天降ー給ふ事
第四御母聖瑪利亞於天上栄福の冠を戴き給ふ事
第五童身聖瑪利亞於天上栄福の冠を戴き給ふ事

以上十ヶ條玄義観を尽き候ぬより

第四 御母聖瑪利亞を讃ー奉る事

此玫瑰とゐふ妙なる名ハ香を含みて澄りを薫ぜる花の名なり故小其告知せあるよ称じよを添ぬるよと聖を以事誠に相當の名なりさるぎさ白き西音玫瑰花の事。ろさりよとい玫瑰花程さふことなり分別を尽ー給ふ是を題と用ひ童身聖瑪利やし御名誉とゐふおぶき事を後ぶ巻に記し尽き

第一之五

第一 玫瑰 又十ヶ 玄義の百五十遍のあるこよをろざりよと

なりさ称ば萬乃花ハ都て國土の飾りと成野邊の草木小も此玫瑰と申花ハ童身聖瑪利亞を此花に喩へろざりよとゐふ名を御授花ハ自余に混ぜさる異香薫ーて萬の花小優り妙なるが如ー天主の天よ小も小異小て色品小御作給成ぬる分荘厳の中に他小殊小ーて猶勝ーる御徳を添ふなりかるの故よ下界乃者ハ勿論小超過ーぬるの上ハ上に及だる天小備ろる二光小も強ー勝を添ふ事なりかるの故よ下界乃者ハ勿論小超過ーぬるの上ハ上に及だる天小備ろる二光小も強ー勝を添ふ事なり故いのんとなる事ハ先帰きて日輪を見よ昼夜の隔なく更に照ー事なー月星も夜を弾ー

や淨普司日中の便こゝなるべし童男聖瑪利亜ハ三光小遥小異りやふ也晝夜の隔なく常住不斷歓給ふと
ぞして諸善の光を以國土の人民を照し給ふ也天上天堂の城闕も於てハ諸くの天神諸宗徒諸致命聖人
諸聖師諸童貞其外善人達くの章の花の如く淨筋りと成やふと雖中にもゝ童貞をんさまりやハ他り
勝まされて天堂妙なる荘嚴となり給ふ也又玫瑰ゟく人くを多折て玉花に饗〳〵内裡仙洞の亂ひ
樓伽藍の飾りし具ゝも成如く玫瑰小花ゟく奉献し童貞聖瑪利亜ハ淨母をんさまのなく〳〵尊き花園
ある淨胎内小まり給ひし二ツの淨藏に淨堂小殿をゝれ給ひて如何成金銀珠玉綾羅錦繍にも
遥かに勝まされ〳〵淨善徳を以假淨堂の荘嚴と成給ふ抑也扨夫より十五の淨歳に小過去現在
未来の善女人達小勝まやふ淨善徳小依て玆くも菜賓小壁言〳〵奉献第二位天主子を生〳〵やふこと
同く花を祝儀の印〳〵と成又遊覧の基とも成とのこかるの故小嚴冬〳〵素雪の冬〳〵氣も色そり
青陽〳〵朝となまバ色香を爭ふ千草萬木も緑りの梢紅ひの花を詠めて八誠に折に觸さ歳並び
人共心も催され勇み悦ぶ習ひなるが故に古〳〵より今に至迄教化皇羅馬小於て毎年悪節四番の
主日に淨歓ひの證として彼ろぎを以ひ給ふ是則淨まぜずすきり〳〵こゝ淨出世ハ天上においても
下界小於ても歓ひ樂と成ある如く今の世迄も一切人間祝ひ歓び奉献〳〵こゝ淨催の印〳〵
なりかるが故に其日以ひやふ淨賜撒の最初の淨辞にでるまぜるぎ後んと始めやふこと也いかのよ
ぜるぎれん歓喜踊躍を爲〳〵こゝ意なり又ハ花を大名高家の淨祝言の時に八教化皇より
贈り給ふこきをまバ聖會八ハ祝儀の花の童身聖まりや淨誕生の時を請やふ事明白也喩へバ
冬の時節にハ草木も霜枯まてお淋〳〵く人の心も憂愛の氣色を含み寒苦を凌く光景こと強



新玉花果立帰青陽小移替まぜば千草萬木花咲色めきて自ひも四方に薫〳〵遠近の山岳
遊覧の便りと成賑ふるぬく淨出世前にハ皆人心の氷よ閉られて天主し淨奉公にハ冷凍て
善道進まざれハ善人と雖も善き人稀之猶もとも聖き童貞をんさまりや淨出生成給ハバ
一斉開けて四方の春と成ごとく聖き菜賓ハにて在ばせずすきり〳〵この淨出世も近付古への舊教の
霜雪ハ消失せ聖寵の深き淨恵み長閑成天の淨法の日影を得奉献物之又天性人の習ひ小ハ憂の
思ひ深き時にも色香妙なる花を見てハ思ひの苦みも晴て心を慰めるが如く世界の難儀辛労小遇
迫〳〵て愁る人ハ聖花玫瑰とある瑪利亜の淨哀憐深く在ばやゑ我親〳〵まさよおいてハ速に男み喜ぶき
事疑なく猶又玄に花の盛徳を顯ばに花にハ匂を發もの威徳ありかるの故小座中に迫ハ甚ハ歴よ
異香薫ぶる如く玫瑰に在ば聖まりや世界よ淨出世ありし給ハバ淨善徳の清香を發〳〵給ひ國土を
薫〳〵沙らせやふこ叓又花ハ不犯の善の印〳〵と成物こゝろぎの故小聖童貞達保ち給ふ一生不犯の淨寢
姜ごして天堂にて請奉らるゝ榮福の格別の淨位を知らせん為に八童貞達の淨影のまに花を
持やふ淨姜を書く習也淨母聖瑪利亜ハ諸の童貞達に勝まされ一生不犯の淨願を保ち給ひ淨産の
前後共ハに一生不犯の淨身にて在ばに依て玫瑰と号〳〵事叓ハ彼是の謂まに依て何まの
道を以ても相當の淨名なりと心得ぬべし
十ゑ〳〵玄義 西音みてて えあら〳〵よの名ハ数多あり古〳〵の叓ハ計ばしよをぷるてりよと云り
訳まて其故ハだびどぼろめてるこ聖詠の救百五十小て又小善人達が連称給ふあら〳〵よも十ゑ〳〵が
故小是に擬〳〵て十ゑのみをてりよがぐさ元滿百ゑ十遍天小在ば十ゑ遍を申よふ格に童貞

聖瑪利亞告知せるなどに依て昔ハぶだうりてるよと云ひしをはじめんあずしなりしよき云也なんどをこの小物し救を取粒の事也すめの玄義のおよしよを以て為百五十遍の数取なればなんにをこと云也又人に寄ては病なおるなどいふ名こそ名ハ佛朗西と云國小流行こそあるなれ玄義と内證ハ十分一もとハすめし玄義し内證ハ佛母をんさまりやの徳つれなひ栄福の寶冠を戴き給ふ佛事を観念救をを以浄土せずすきりしこ浄妙聖すりやの法門證小叶ひ事ふよ固て則玫瑰の浄冠を成就して獻し奉るに満る二故小ころなしなりしよとも事なりけ證據小ハ或人の申よしがさ充満と天に至ふしあふしよを浄母をんさまりや花の形よ受取給ひて浄き耶穌よ捧げ給へバ浄母よ則ち戴き給ふせ第二ハ玫瑰と云事ハ浄奇特あり給ふハけれ〳〵よ小分数多〳〵名のりと給中小も相當〳〵もハうをと一之五 りよ也其故ハ浄母をんさまりや数多の人に面見へ給ふけれ〳〵ことに備を徳義を玫瑰よ喩給ふが故小ろぎりよと云事ハ彼花よ三りの事ハ寔小なり先きの二ハ花英の附ふ処に青き庭ふとの二其青葉の庭に八浄獻りのみまてりよを表し事ふ二りに二性のよに赤き英に八又天主の尊前に異香薫ふる浄悪みし五箇條の玄義を表し同く聖き玉具を小赤の血汐小染給ふを喩へ事也なり三りに八花の心ハ黄小して房の如しけ心ハ天主子浄穢生ありて浄土天なされた玄事と浄母をんさまりや浄き給ふ事共小浄土天を逍遥し不退栄福の浄冠を戴き給ふ事を観し事ふ末五箇條の玄義を以て聖き冠を献ずる也二ハ玫瑰と云事ハ花園の色名花或ハ妙成句の名花を集て



生け恵ハ必ハ其ふ身に薫ふが如くけ玄義を観じ奉らば萬花の匂ひに勝ふる小諸善乃香ぶしき自を薫り奉ふ給ふきのなり又花園に分け入て真愛を忘ふき心を慰むるが如く何ふる事に付愁い悲むと雖又ハ假令如何成悪比潤小況ふ再び浮ぶ間敷との頼母ふ心を失ひ給ふりとりすきけおりしよを酒ふ天主ハ科有と云科も皆都而浄大切浄慈悲心を以憐ふ給ふ事を玄我し内に観し奉ふよ於てハ良藥の半死半生の者小も其益ハ多小して病の苦悩を退け善に向ひ給ふ事疑なし

第一之五

巻

聖ヨゼフ聖告知せるなどに依て昔ハぶだうりてるよと云ひしをはじめんあずしなりしよき云也なんどをこの小物し救を取粒の事也すめの玄義のおよしよを以て為百五十遍の数取なればなんにをこと云也又人に寄ては病なおるなどいふ名こそ名ハ佛朗西と云國小流行こそあるなれ玄義と内證ハ十分一もとハすめし玄義し内證ハ佛母をんさまりや浄土天に感て諸ふれ天神聖人の位小超ふ高位と俗ふれ給ひ栄福の寶冠を戴き給ふ佛事を観念救をを以浄土せずすきりしこ浄妙聖すりやの法門證小叶ひ事ふよ固て則玫瑰の浄冠を成就して獻し奉るに満る二故小ころなしなりしよとも事なりけ證據小ハ或人の申よしがさ充満と天に至ふしあふしよを浄母をんさまりや花の形よ受取給ひて浄き耶穌よ捧げ給へバ浄母よ則ち戴き給ふせ第二ハ玫瑰と云事ハ浄奇特あり給ふハけれ〳〵よ小分数多〳〵名のりと給中小も相當〳〵もハうをと一之五 りよ也其故ハ浄母をんさまりや数多の人に面見へ給ふけれ〳〵ことに備を徳義を玫瑰よ喩給ふが故小ろぎりよと云事ハ彼花よ三りの事ハ寔小なり先きの二ハ花英の附ふ処に青き庭ふとの二其青葉の庭に八浄獻りのみまてりよを表し事ふ二りに二性のよに赤き英に八又天主の尊前に異香薫ふる浄悪みし五箇條の玄義を表し同く聖き玉具を小赤の血汐小染給ふを喩へ事也なり三りに八花の心ハ黄小して房の如しけ心ハ天主子浄穢生ありて浄土天なされた玄事と浄母をんさまりや浄き給ふ事共小浄土天を逍遥し不退栄福の浄冠を戴き給ふ事を観し事ふ末五箇條の玄義を以て聖き冠を献ずる也二ハ玫瑰と云事ハ花園の色名花或ハ妙成句の名花を集て



通し妙ふる名花の如く頼の甘と成物也同く萬の花に優り給ふ玄義のおよしよ八童貞聖瑪利亞を始め奉り諸ふれ天神聖人達芸浄悦と成三位一体の浄門證小深く相叶ふなり孫に付御ふ有ル所ハ花を飾りたる如く賤に見へ何ふも歓喜踊躍をふ弥也是小相変りろぎりよく集なき而ハ物淋く憂愛浮ふ玄我体ふて神業の事に不足ふ多し又花を携ふ玄時其手賤ろにて早く人の目ふも遠るが如くろぎふよを掛ふる処或ハ瓦繰時ハ金玉を連給ふよりも尚花やかやと心浮べし比真して云小花の色香に愛でふる者ハ賤も貴きも老ふるも若きも世よ稀なる如くけれ共猶よハ誠よ花のねじよなれバ上下萬民の為に歓ふ甚さなりけ、教化皇を始め大名高家れ人〳〵其外下輩の者に至ろぎりよしねじよを勤め付御人救なる事ものなり猶又彼さ浄詞童多もんさまりや他よ殊よ田心呂ふく修行なれバけれじよをうよる人に邪悪の花の形より変さ仕天に在いぐさ充満のねじよを更ぬいあいさ浄冠を造り其人に着せあふ浄奇特度くなるハ童多をんたまりやをろざと号し又聖き浄胎内よ

實のり給ふ淸方ハ耶穌ふて在ますを礼ハ此両君小奉申上玄義乃ホ注しよを玫瑰花冠と歸とるか
事急ぐ道理至極せり

第六 汚ぎりまよしなしよ勤むるを以て頼母數心出來ずと云事

天主新程やそ御納受汝成やのなしよ我信心を以勤ゐ玄義に篤ふ畏深の淸哀憐を観念我ぢ
於てハ淸大切と頼母數心我求むるべし古へし洪水の以後頻雨乃ゐ天主の淸内證小可い祭を捧げ
ゐれる色ハ洪水を以て重て世界を滅亡させゐふ間ゐとし淸約束なり右し淸約束の證小て
して空小虹を立給ひ天主と人間とし間し無事を見せ給ふ也童身まりやし汝ぢりよいろいろ
祭と虹小勝まて天まと人間とし間の齟成淸無事の證ぢより其故ハ我等が科に因て淸勤氣
をば蒙らんとも數時虹とあるごぢりよを天主又し淸前に掛奉りゐる耶穌し淸在世中し
數られ淸辛苦流一ゐ聖き淸血を我等が科し償として捧けなれに於てハ淸四副の杖を退け
給ふべきの疑なし又虹小象を青黄赤の三色有ゐが如く聖玫瑰花冠小も三色あり淸數し
玄義を青き色に譬へ淸悲の玄義を赤き色栄福のみをてりよを黄色小喩へ奉ゐ都而
淸主世ぞすきりし と淸在世の間顯し給ふ奇妙成事共を思ゐて此おじよ小篤ゐとの也
譬へバ軍の大将利運を聞き名を後代よ遺をべき為小陣を張戰場小於て鋼を割笹像を
割り或ハ城郭を乘取武器ゐ多術其外今取高名し有様迫をも皆繪圖小寫し遺をが
如く我ぢも我等し淸大将淸主耶穌基利斯督怨敵を平ぎ給ふて我等を救抱し給ふん
為に尊体に人界を請合せぬひて既に淸死去ぢ成ぢりと淸三日目小穢生給ひ淸上天ぬりて





淸利運を聞き淸小新程の淸名誉と淸大徳を末世小至迄尊重崇敬さ世給ふん為に思合し寫しる
繪圖と成童身聖瑪利亜北玫瑰花冠のおしよを勤め玄義を思を奉敬間數爲小懶怠なくおむじよを勤め玄義を可奉観事專一なり

第七 聖やをみんご淸母聖瑪利亜の淸告を以後をするよを與行し給ふ事

意太利亜佛朗西と云両國小淸ぬびぬんぜすといふ教異説家ぬり彼等が一統教すおにも及ぢり其教旨
種ごの迷ある中の一つとりふハ聖き御母をんさまりやを信ぜず其清浄潔白成御善徳を申穢ちんと
せ一事なり然る小其折節聖やをみんご彼両國へ赴き給ひ彼異説家共聖き天の淸皇后小てますまし
童身瑪利亜小對し奉りて奉悪無道礼狼籍なし奉敬事と彼等が後生を扶のふ頼母數の細切景
ゐ教有様を淸覧し御心中小深く痛み給ふよ依て如何にをして迷の闇路を晴し誠乃道の光よ
導給ふんとう思召を以或時ハ勇猛正心の神力を以淸談後なされ或時ハ妙成善の明光を以
照し給ふて退悪修善の淸勧に不一方精ぐを尽し給ふとも鉄石小勝りて堅き異説家共の心中に
淸教化を施し給ふ矢も立事を得ず然と淸聖やをみんごを淸幼少の淸時より萬事に於而淸母
聖瑪利亜小深く淸頼を掛給ふ淸習なるまごば彼異説家の上を不絶聖すりやよ頼ゐ給ひし給なり
然まば淸出世以来十二百十六年の頃小當りて十六聖人佛朗西の内河ぴと云在所小於て神心然立ち
淸不浄ゐよ我等成願くハ迷へる者共那を翻して正に歸を爲き道を教へ給へと多くの淸涙と共に
童貞聖瑪利亜我頼み給へバ憐の淸母ゐ面見給ひて如何小寵愛のをみんご御子耶穌基利斯督
御出世ご時ハ世界小罪科滿盈るに依て人を教へ導き給ふん為に無二し御苦労を淸き給ひ終に

清命を惜み汚穢を捨ざる事なれば悪に長ずる説家共なりとの共諫め導く事
等よ止め教ざるべからと宣ふ是のみならず清母聖瑪利亜聖き玫瑰花冠のおしよと組の理りを教へ
給ひ則聖ごみんごを以て修行し弘めを談後者と定め給ひて宣ふ観念の如く悪人を善道へ引入るべき
勿論小切支丹たる人々を以て組に勧め入ろぎりよ一花しよと號へてがくを充満百五十遍天に在ます十
五遍ヲ十五のみもそりよを観ぜよ組に教訓せざるべし然るに於ては人々速に進退を改め天主し
清大切小燃立修行に果しなき寿命の港小着くべしと依をば聖ごみんごの清母聖瑪利亜の御懇切
深き御告を承り給ひ勇み歓び其肯小任せ給ひ清存生の間ハ清主耶蘇基利斯督の福音と
清母もんさまりあの告知らせの通りよし修行を専ら御指南有給ハば此を進しよし功徳を以
十萬餘りの異説家正路に立帰り則佛朗西意太利亜の両國小於て異説の迷退轉したる勿論なり
元清ぎりよしおしよと組の真行の根元斯の如一をれバ聖ごみんごの花しよし勤め様を教へ給ふ間ふ
天主救多の清奇特を顕し給ふなり是外の巻小記ス

## 第八　代々の教化皇玫瑰經の組を御領掌なされ弥固め玉ふと云事

聖き玫瑰經とりざりよのおらしよ勤め様と組の真行を代々の教化皇御領掌ましますのみならず其旨を
御感悦なり給ひ組の仕法として数々の恩赦を賜ハりし事ハ
より授け給ふ恩赦の畧別の書にあり

## 第九　玫瑰經の組の御定之事

第一員數貧富老若男女に依らず都て此組に入るべき御免し有り其故ハ玫瑰經の組ハ高下の





差別なく萬民に清大切深く在ス尊き童身聖瑪利亜小對し奉りそし事なれば代々の教化皇績有
の ふ恩赦と莫大の功徳の賜ものを悉く切支丹為可奉請也此組の清人数中にハ多くの善人覚悟の真ば
其御功徳の善き配分小可預事誠小浅のふ覚候後なりと分別まべし
第二此組小可加入人ハ組賬に可記附事等一なり如此の人賬に附るるに於てハ玫瑰經の組に入べし
とゐふとも組の人数と成事曾而不可ゐの也但組ハ入るべき人々ハ金銀其外何ふともの也組の為
寄進せずして不叶儀と思ふ勿れ若其志有るにおゐてハ各自由也ふべし
但組ハ一度此組に入るに於ては其ハ後何國に在宅ともと云共重而賬に附に不及夫小依て仮令外教の
國小居ふとゐふるもよしなりしよを勧むるに於てハ組の功徳いんどるぜんぢや等を悉く教へさ勧
第三組に入る人々ハ一七日の間小玫瑰經百五十遍の おしよを勧むるに於てハ一世界小居ながら
此組ニ加勧めらるべき處の祈禱大齋等を苦め慈悲悪其外善作の功徳何事も通用まべしや
第四組之衆天に在ス十五遍ずゝ充満百五十遍一七日の中ニ勤むるべき也但一度に勤のんにも分て
度ゝにも申ふんの自由に任せ給ふと教化皇達の御教書に見へたり是又分別をべき事にハあらず右之
おしよを勤めずとゐふ共科にハのがれ但申さざる其一七日ハ組の功徳を悉くうしなふ也
にて而已里に限らず何ほの所小ても勤むる事叶ふべし其上勝を以ハ又居ても又旅なりとも
歩く道をゐるとも又病人枕小床に付なりとも勤むる事皆是自由に任せるとの
第又組に入ぶる死人有るに於てハ其人名を組賬に貨て其一七日の間ハぶるがとりよの為にハんどるせんぢや
其一七日の間ハぶるがとりよの為にハんどるせんぢやの通用をべきとの也

第六組の死人の天魂弥組の功徳を請ふ為に汚毋聖瑪利亞の身潔禮御告汚日幷天汚見舞七四ツの汚祝ひ日の翌日吊いの汚弥撒法事を執行ふべきなり同く組の衆ハ其弥撒を拝み法事に逢ひ組中の死人の霊魂の為にわらしよを申す天主を頼み奉ふ為ニ又組の人死去ハ組中江觸知らせ為に百五十遍のわらしよを申為ニ其為に組親ハ死人あん時ハ組中江觸知らせ為のこと

第七汚ぶりよ〳〵但弘まりする在所小於てハ毎年いつ迫も西暦第十月初〳〵主日を玫瑰花冠の汚祝日と定め親式を以汚毋聖瑪利亞の御法事を執行ひ奉ふ為ニと如此の汚祝日を定め給ふ事ハ耶蘇の誘出世以来千五百七十一年目に當りて十月初めく主日の事なれハ海上に於て船軍行りし時一切聖會中の汚ぶりよの組の衆ハ其ぶりよの組の法事を執行ひて則歌を平らぬ勝利を可得様よ討らぬ給へと頼み奉まつるに其時節に當りてつるかまと云歌ハ

第一之九

おたく不思議よ利運を切支丹宗開けさする為なり人うるの故小玫瑰經のおしよ〳〵汚功徳を以て童身聖瑪利亞汚取合せおされ天主斯討らぬ給ふと萬民不思議の思ひをなして個程乃新さ成深き汚恩を忘ぶ其御禮を末世までも可申上為め組の人ニハ此主日を祝ひ奉ふ為ニ

其の汚定めなり

第八組御守護ふて在ル童身聖瑪利亞に對く奉り毎月最初の主日小ハ童身聖瑪利亞の御影を持参り行道可致事同く組の衆ハ玫瑰花冠を手に持汚供をいたす為ニ但組〳〵第一〳〵汚祝日ハ汚告さうべく〳〵自然彼汚祝ひ日悲節の聖さ七日の中に當らばなるべく次〳〵主日迄なく〳〵何ぞ成共相應の日を祝ひ申為ニ儀なり





第十玫瑰花冠の組を真行可致為めに於て保ル為ニ汚定めく條〳〵

第一組を真行せうべき神父ハ第一ろざりよ〳〵ねうらぬ為ニ其次に切支丹中より組を真ル為ニ〳〵と祝望りうべく〳〵筆寫して真行せうべき年号月日附を記一同くいんどるぜんじやを蒙ル為ニ組を真行せ〳〵ル汚堂にろざりよ〳〵香壇を相定めらぬ為ニ又組の為裁判の法度を定め置うべく〳〵是組に入ル人〳〵を賬に付うざりよ〳〵ぢるぜんじやを弘めらぬ為ニ為なり但如此役を勤めうべと雖何ぞ礼物を取うべく〳〵同く毎年組ハ入らぬ人〳〵の名を神父ハ賬（附置べく〳〵是則組の人数となるべき為なり又組を真行あるべき第二組に入るべき人数〳〵中より神父ハ組の衆より信心ぶかく人を撰び親と定めるべく又其上に人数の多少ニ應じて惣親の外に助人ニ人乃三人乃又其上にも親ハ少くべきなり同く女人乃中にも主人の母親と合力人を以人相定めらぬ為ニ是をんたまりや御影の燈火束但の蝋燭又ハ行道の時町小路の香壇飾り等の心掛御奉公いたす為ニ又役者に定りた人〳〵ハ真行ル日より汚告の祝日迄其役を何ぞも勤めらぬ為ニ汚祝日の晩にハ何ぞも役者ハ裁判の神父と一緒に取り次の年の役に然ル為ニと種〳〵多分の分別あらん人を撰び出〳〵未ル汚告の日迫の役を相渡ル為ニ又過〳〵役者ハ八日之間に組の為受取遣ひた取あ事の雑用を改め有うべく〳〵女人ニも右同然の役者立代あるべし毎年如此惣の世なるべく役者の改め是あるべき為ニとく定めも若又組始りそより汚告汚祝日近日なるべハ未ル年の汚告迫ハ最初の役者を改めず其侭置のる為ニ〳〵

# 聖玫瑰花冠記録巻第二

此段りしよ〻高上なる教事之同く其勤め係〻事

第一聖さうぴりよし祢の三ゐ御主耶蘇基利斯督の御出世の無量の御恩を感ど奉敬ー紀

為に勝まてある道なりと云事

天主諸善萬徳之源小て在せば一切人間多頼り奉敬御恩乃御礼を成ー奉らびー て不叶儀なりかる
の故に往昔乃人〻ハ天主より格別の御恩を受奉り為御礼有ー とも也もぬせず大将多ぱ〻を帝王の御せ
香壇を構へて祭り天主小捧け物を致し御礼有ー とも也もぬせず大将多ぱ〻を帝王の御せ
なるまいを啓示敬し民を詰返ー給らん為に天主之勅命に應ー てぱ〻をし前に杖を以奇特成事を
巻 数多顕ら給れ又或時ハ紅海之水お民荒野に於て飢に及び時多ごまんなと云天の食を降
第 らせ給ねて久敷育みの御恩なり同く十箇條の御掟を石板小彫付萬民に與へ給へば此数多乃
貳 人数を先として其子ご末孫に至迄数〻之御恩を感ど奉敬間敷為に彼まんなご御扶持と
之 御掟之石板とをあ敬か迎一ッの櫃小納め給ふ乃なり又弓箭之時ハ勝利を得て ハ是天主乃御力を
壹 以てご事なりと云へ其御恩を末代迄も忘ご奉敬間敷為打取之敵類を一寺を建立ー て
寺内小掛置戦場之有様までをも載てもんー りよ納め置ー その也如此御恩を忘ご奉ー ごく
人〻に弥増に御恩を重承給ふ也と心得ごー 然と雖御恩を蒙り
奉り帝柝檻を請奉敬外有間の次天主数萬の天神を美麗清浄なる体に御作り給て
数多の御恩を施ー給ひ其中にもるー へるご云司を餘に超て荘厳ー給へども彼るー へば



高慢を起ー乃敬に依て彼に同意ー ける数多之天神御恩を忘ご奉りたる帝罰ごー そるー へる
同罪に永苦獄小墮ー ぬふるのなり元祖阿ぶんも天分不の御作之物に勝まて萬物乃長小造り
給ひ剤隷白の位小て多くの御恩を蒙へども曽て夫を不見知天主に同位に成度ごー 叛逆の科よ
因て阿ぶんの事小云よ及ばず一門不残末葉に至迄御罰を蒙り罪業深紀ゐと生まれもの
然まごばあぶんも犯科故小天狗の属とぬりける一 切人間を天主御慈悲乃上より更迄ー 給ふん
ら免人界を詰ぬひて数〻の御苦労を凌給ひ終に十字架を掛り給ひけ多ば人間ハ個程の深き
御恩を忘ごをぶご忠勤を抽てをぶごー ても不叶儀也ご雖世界の具もなき事に乃ご貪着て
光陰を送ふやの也かごの故に御憐の御母聖瑪利亜一切人間の後生の扶助を深く歎き給ハ
御主耶蘇ー御出世の御恩を感ごをぶ歎為に右小記ー たる如く度〻御勿聖すりやより御告を以
多くの善人乃ぬりよ勤を指南の為ごー ごく御せを蒙られ給ふもの也其故ハ御扶手の玄義の
観念ひろぬりよ〻ねじよ小筆をばなり然をばは切支丹宗ハ御主せずすー 御出世乃御恩をば
忘被奉ら敬小於てハ弥御慈恩に頼り奉敬為き物なり依之日〻此ねじよ勤めを以泰き
御扶けー 御恩を観ー奉らん人〻ハ又日〻に新き御慈悲に頼りをー ん事疑なー 然ご雖
ひ観念懈怠乃ー うに於てハ御慈恩の御配當も有為き功力なー ご分別をべー
然まごばは出世の量りなのき御恩を繁く思ひ出ー なー ん為の便に玄義の御影を拝み其
理りを書ひ敬書籍等を讀ー 誦ー 談儀を聞ー 給ひよを勤む為き事肝
要なり尊き童身聖瑪利亜ハ行住立座臥共ふ御出世の玄義の観念ご頻ー 給ひて御失念ご

廿一

御理りを観念いたし暮には科の糺明して本心を穿鑿して此玄義の御功徳を以科を赦し給へと頼み奉るべし扨又あさに六番の玄義へ入る時は七番の玄義何れも如此次第提當に十五日ま積りて観念すべし夫れに就ては悪僻を捨身持を改め弥増に善道に立入る覚悟也加之此玄義の観念は萌したる妄念妄慮を防ぎ拂はん爲めの強き力と成物也夫に因て悪念の發らん時はろざりよし内にも御悲の五箇條を観念すべし心中の思案を以御主の五つの聖き御疵に逃籠り御疵に對して此誘惑を逃し給へと頼み奉るべし然るに於ては如何成悪念も利欲も逃去べし畢竟此ろざりよは靈魂の爲には毎日の御養となれ天食と心得靈魂を育ん爲に深き信心を以可勤事肝要也

第三　天主の童貞聖瑪利亜に与へ給ふ御善徳の勝れたる事をろざりよし観念を以て
明白に与へ奉る事

天主尊き童貞聖瑪利亜の御靈魂を莊嚴し給ふ御善徳は諸々の天神諸聖に与へ給ふ御善徳よりも尚勝れ給ふ御事なり故に御主の御上天以後一切切支丹宗は孤子と成りたるに付而御跡の頼母敷便りとなし給はん爲に世にすて御名代と定め置れ給ふ物也然れば萬民は此尊き童貞聖瑪利亜より靈魂の御慈悲を請奉らん爲ぜるざれんへ赴く物也或時さんりよにどよは聖母まりやの奇妙不思議なれる御善徳を聞及び申され其御見舞として遠國よりぜるざれんへ赴き給ひ勝れたる御善徳と大光明輝きなふを御覧しられば驚轉なされ地上に倒れ伏なふ物なりまに依て聖瑪利亜の御逝去し砌は御弟子達其外有合申されたる人々別れを奉る事を深く悲み歎き申されたる然ればろざりよしおらしよし内御母聖瑪利亜の勝れたる御謙御堪



忍大切貞節数々の御善徳を観し奉るを以五明を挑げ猶信仰し奉る也如此なれば玫瑰花冠のおらしよは自余のおらしよに勝れて御内證に叶ひたりと分別すべし扨も忝き頼母敷うな御在世の時も又御上天以後ても人の爲に御合力なし給ふ御方なれば此界の涙の谷に居る人々を御子にて見捨ずし御前に思召出し給ひて御身の尊きろざりよし御功徳にて御慈悲垂給ふ様に頼み給へ

第四　尊き御母聖瑪利亜の御名の数多き中に天主の御母と称し給ふ事は餘に超て勝れ給ふ
御名なる事ば此聖き御名を以ろざりよの中に弥尊み信仰し奉ると云事

去程に尊き御母聖まりや天主より与へ給ふ勝れたる御善徳に随て又勝れたる数多の御名を呼れ給ふなり先其御名の中に僅記し奉るは或は天の架橋或は上天の門或は海の星或は月の如く美麗な在は御方或は日輪の如く撰び出され給ふ御方と奉申終に諸々の天神聖人の皇后と称呼給ふ物之さもあれば個程数々の御名の中に天地遥かに優り給ひたる御名は天主の御母と称唱給ふ御名なり其故は何れの御名も際限ある御作の物に比らへ尊び奉るの也と雖天主の御母と呼び奉る事は量りなりもなき御主の御母の位の尊號なれば是なり御母の位に随て頼母敷敬ひも有如く童貞まりや帝王の上の帝王にて在す天地の御主の御母にて在せば天主の御母の御位に随て尊重崇敬するなりて叶はざる儀也然ればろざりよしおらしよし内天主の御母になり給ふ御事を観し奉る玄義我等悉奉る而已ならず凡百五十遍のがらさ充満のおらしよには百五十度天主の御母と奉申上事なれば此おらしよは童貞聖瑪利亜を崇敬し奉り御内證にも深く叶ひたるといふ事明白なり爰に又尋常の親と子の間を見よ他人になさる也し大切猶深きなればは道に洩ざる事なれに於ては更に而留

いあれば程しく事を叶へお取事なくもてまつれば童身をんさまりやと御主ぜすさりすとしく御主の御大切く
深く在ば御事は常の親子の大切に異れば甚深の御大切なれば假令我等悪人なりとも無信心を以ながきりよの
あればよをや聖き御母と共に生を取心地して御母の御取合せを以頼みをなさば哭視の為に肝要成程の
事をらへ給べしと分別まべし

第貳 聖きろざりよしなしよを勤むる人は御母をんさまりやと格別御大切小思召又弥増み天主の
之 御事

御奉公と其御大切く道へ立入と云事

伍 諸この善人達天主を深く御大切に思召程他人のよをも大切小思召さるべし御童身
をんさまりやは諸聖人天神に勝もて天主を深く御大切に思召せば何ごとも優りて御大切を以人をも
思召其故ありを見みるべき也功支丹宗くし内にも就中御身を信仰いさ〳〵信心を以ろざりよくし
しよを勤め御方の貞節御大切く御孝順と学びありんとく心掛をべき人に猶
御大切深くをく〳〵御合力をたまへ給ふべき事うな誠に御威光
赫々たる御進退なり給ふべかし天まし御大切を増御奉公く道に立入を勤給ふべき
事は喩へば主君の御前に取合せをいる人は頼む人くをて寵に調ふ如く人多くし御取合せをして
在ば御母をんさまりやもろざりよくしおらしよを以信仰いさ〳〵御合力をもいをまく人〳〵をを天まの
御前に御取合せを以成御内證小叶ひまりて格別の御慈悲を蒙りを以勤まし給ふ御也

第六 心の中に共に聖まりやを崇め奉らびして不叶儀なりと云事

功支丹宗は尊き童身をんさまりやに弥増に信心を催しまく〳〵んために先首すき童身天まの御母と



## 第貳之陸

撰び出され給ひ諸この善人達に抽て給ひ格別の御善徳の御配分を請給ひ天上にても諸この天神に超へ
高上の御位に進られ給ふを観〳〵なりて是等の御善徳を心中に深く歓ひをまく〳〵又個程凛〳〵敷
御恩を与へ給ふをもに就事彼我等に与へ給ふ如くに忝く思ひまり天主に真誠礼を可申上なり真
外一切人間迄も此聖き御方〳〵最上の御位を見知り奉り悪き身持を改め忠孝を抽てまれがしと
可願事なり其為功支丹宗はろざりよくし給ふべかし

弁中のをんさまりやし御祝日毎にと月の最初の主日毎にをんぴやをんを捧
奉れ人〳〵に数多のいんどるせんどやをなへ給へば如此の教化皇の帝志に随て繁〳〵をんぴさんを以
心根を清めをがまのんとを捧り奉れべき事肝要なり同く外の所作を以ても敬ひをまべき為よ
善人達は御行蹟を学びをまれ給ふ〳〵聖ばれごりよとや善人はほんざりやと云國の功支丹宗に
聖母まりやし名を唱へ奉れべき時はいのにも慎ん頭を傾け礼給ふ〳〵と御指南ありを礼との也
御名は聖き御名を餘人の唱へ奉れを聞給ふ時尊き御心は御信心よ燃立敬善の御涙を流〳〵
給ふことなり又尊き御名に對〳〵慈悲物或は何色ぶても所望をしおなをくはまを叶へ給ふとぞる
とゆふ事なり〳〵あさましやをんとますの幼少より御成人の時には童貞聖まりやよ御信心深く在ば
ろざき事を策ん頭〳〵給ふべなり或時彼善人御幼少〳〵時御乳母より衣裳を召させ給ひ礼ば
御手には少の紙切を持給ふを取落し給れば殊の外に泣せ給ふ乳母を取返し給ふとざる間は心み給
ふ〳〵迄は取返し給ひてより御歓ひ〳〵御氣色にて則其を喰剋呑込給ふとの也是何ごと
いふには彼にはがら〳〵をみちく〳〵しおりよをば聖き御母と共に聖人達幼少より御在世の間

御母をんさまりや汝別而御信仰ありなさに八御取合せを以学に長け大善人と成ゐふものなりせえのさんたかさりなさま汝幼ゐ〳〵時よりをんさまりやを御信心深く在〳〵るゆえが五つの御歳に二階の梯の昇り下りに要一段宛ゐて八ゞとさみちゝ〳〵わじよ一遍宛ゐゐふとなりまよ固て勝まさる善人となりゐふものこ是を鑑にさ〳〵子を持さる人八雑さ時よりわじとよを習ゐせ尊さ御母をんたまりやに信心の教ゐふに教へ習ゐをぜき事専一なり善人達八何ごも如此厳へゐふこ然まば何ごも切支丹宗八諸善人の御鑑みを学び童貞聖瑪利亜の御影を信心を以敬ひまりまをんさ〳〵又聖さ御名を唱へ奉るにも唱へ奉る教を聞時にも頭中を取頭を傾け心こ及び信心敬ひを以てわじよを致〳〵御祝日を保ち扨又彼御方に対〳〵まりて八貧人に慈悲を施次第〳〵同く病人を見舞其善の勤をいたしてせぜん大斎と同日に我分をも貴ぜまこ善作をなす次第さなり然るに於てハ其取合せを以格別の御慈悲を受奉ぜべきの疑なし

第七　ろざりよこ堆く勝まさる道理こゐふ日

まりや御告を以知らせ給ひ代、の教皇も其御門流に相続ありに依て勿まなり喻へバ教化皇より異國の帝王に大事なる御文を遣さる時ハ其使者を立給ふん時ハ必ず其題目浅のふぎら敷なきものなり其故八下輩の者小ハ大事なる教理を任せ次唯其輩の位に依て相当の仰せこ旨あれハ常の習なるまバこ是を以能知れ給〳〵聖ごみんごこ勝また教御善徳を施幼少より御死去迄天主教こ御奇特を以て顕〳〵ゐふのみなのふぎ聖人ハあらんぜりよ福音と訳也





ゐとなせんが為に談儀者の門流御真行ありた教とのなり然まば尊た童貞聖瑪利亜ろざりよこ御指南を個程勝また教善人小命じ給ふを以猶堆た事ハ能知をもより殊更是に付て〳〵御告ハ一度に不限度こ此わじよ〳〵御勧を門流の出家達に授け給ふなりをんごみんごこ御死去こ以後ハ御門流の寺の大神父御まろとやせ〳〵聖人小仰付られ給ふものこ其以後又ころにやとこ在所〳〵門或ハ門流の寺の大善人となる住持小仰付られゐふなりゐめきこ小於てハさふますれさんどもんとや同門の善者の神父小御告ありこかるが故に此聖き御指南と組の弘めハ則をんどみんごこ門流の代くに童貞さんさまりやより善種となる〳〵をふれさる価高き珠宝の御譲りなり同く代くの教皇も御母聖瑪利亜こ御証に任せろざりよこ師範と組の真行を聖ごみんごこ門流ハ相続さ世給ふなり如此次第を以てわじよこ堆く最上なの教事能分別を以さ〳〵聖さろざりよこわじよをゲ〳〵さ勧さ給なり

第八　聖さろざりよこわじよをゲ〳〵さ道を教ゆる事

如何なるか学者大方の人なりこゐふる貴人の前に法談を遂ん為にハ先其覚悟をさ次如くあしよを申事ハ我等が為に肝要成事を天主の御前に申上教事なれバ能御納受給ふん為其道を繕て祈べき事肝要なり諸〳〵の天神をこ天主の広大無辺の尊体小逆〳〵て讃歎給ふ事を及び給ふぎる小於てハ況や愚悪愚痴の人間ハ如何ほくんや併なが〳〵天主ハ御慈悲深く其源にて在せバ御大切の志を寸時懈怠なく面々に当へ給ふ時分に随て神魂を砕き申上教において其わじよを御納受の給べき事疑なし〳〵然まばろざりよこわじよをゲよん時相応の地盤を居へ覚悟をなし徳を取できるめ〳〵合力なる教後を左に縦記もべし〳〵きれバ他生一遍に無障無碍にわじよを勤ん

為相應の時節を以夜半なりともどれなりともどれにおゐてハ其ハ時分申べし無病なる人ハ膝を立て慎而申べきなり又時に依てハ量り在さぬ天主を背き奉りたる事おらしよを申内に工夫いたして悔悲しみ平伏て御赦しを可奉乞事肝要なり然とも右の教の如く懈におらしよを勤る事不可人病者抔ハ寝ながらも可申事も叶ふべし又歩く人ハ道中までも同く道連衆あらバ行延て先後れて兎に角行住座臥共少しの隙を窺ひ可申事肝要なり船中の者共ハ少し間を隔て乗合之人より退き勤むる事も然るべし又おらしよ中に假令妄念起来るとも夫に拘らず十字架を唱へ一心不乱に届くべきなり専ら也猶又おらしよ間小御敬ひを催し奉らん為にハ先始めざる前に天主量りなき御威光を観じ奉る其御前にてハ天地に備られ程の物ハ皆螻蟻五穀の一粒よりも猶少く数ならん事なるとバ我等ハ御作の物の中に賤く殊に極罪人なれバ如何程の御敬ひを以天主の尊前にてハ謙り謹ておらしよを申べき哉と思ひ信心を催しべし其上おらしよと申事ハ大事の上の極大事なれバ御許諾し事を奉頼て天主のがらさを蒙り奉らん為し事也と観じ世界の寶もなき事に心を移さず後世し事に而已貪もれ様に精を入て申べし弥又進み信心に催されん為にろざりよおらしよを申さん時道俗に因らず國土の人々男女共に我と同時御理りのみすてりよを観じ同じおらしよを申まる人々の中にも数多信心深く涙を流し恭く身を節し称歎せられん事を思ひ合せ我も又其衆のおらしよし同行をいたし雑に続くべし若まさ不精にしておらしよ届き難き時ハ我おらしよを申時分に数多く人同じおらしよを一心不乱す通申届らもん事を想像て我身の不精千萬の事を顧み其誤りを乞奉りて猶信心を



以て届くよふにがらさを与へ給へと可奉頼事肝要なり

第九　おらしよを可申時みすてりよの玄義の讀物をいたし其観念を可致事

ろざりよおらしよを可申上と思もん時ハ先咸においてハ観念を可致みすてりよし讀物を讀ん左なくバ可聞事可然なり是猶々観念の題目を求めんが為なり自然讀事も又聞事もなるならざるにおゐてハ其我々の知分の観念に任せ観じ奉るべし又観念をいたさん時ハ夫々し玄義の御有様を直に目おて拝み奉る心地にて観じ奉るべし同じく御歓びの玄義小分にても取別御悲のみすてりよ小分ても四ツし事を工夫致すべきなり一ツにハ玄義に観じ奉る御難儀御苦労を凌さ給ふ御方ハ誰にて在スぞや是則無量無辺の御方にて在スなりと知二ツにハ誰に對し其ハ御苦労を凌き給ふぞ誠に御恩を見知らず度々御身を背き奉る者に對し給いてし御事なりと観念可致事三ツにハ個程の御苦痛を凌き給く思召て御内證の御極めハ如何なる御心ぞ是又曾而御身し為にあらず唯無量御大切御慈悲し上より極罪人の我等が為なりと四ツにハ其清辛苦を深き清柔輕に謙りを以請忍らへ給ふを観し奉り御善行を誠に及ざる事ながら学び奉らんと思ひ定むべし　如斯四ツの儀を思案いたし以我等と對し給ひてし天主し御大切の深き御事ハ明白なれバ又我等が背き奉る深き科の量りなき事をも顕るくものなり

第十　天主より蒙り奉る御恩恵をろざりよし内に申上報じ奉るべき為に我身を省る事共に
持事奉るべき事

去程に夫々のみすてりよし題目に随て御主の甚深なる御大切御恩の事を観念いたし頼ハ其御礼を申上

此おしよを天主納受し給ふ様に申上ん為に遠りて法主のがらさ聖體と〳〵御力を可頼事肝要なり
おしよを勤る事ハ我為めならずよ非ず他人の為にも可奉頼物なり其ハ故ハ天主天地萬像の法主にて在ます
一切人間法衣度の為ハ法出生ハりなまぼ善民法主ハ我等見知て後生を扶のうん事を歎きなまふ御ざる
大切れ善ハ當ぜんなり夫に因て世界ハ法と一生の程の者ハ皆切支丹に成て法主を見知奉る様に計ね
給へと頼みなまふべき物なり其次に一切切支丹宗の為頼みなまふ御ざる〳〵中にも先をんたる御ぜや聖會と訳也
し法司教皇の為に可奉頼事專なり同く教皇の下に於て或聖會の司の為のおしよを可申ハ也
遠土に立入られさる衆のたの申さん時ハ未近届き弥増に善行に募をれんすよに頼みなまふべき也又悪人
の為にやとん時ハ科の御赦を蒙りて退悪終善の者と成様ま頼み奉まふべし煉獄のあにまさ為にハ
其苦患を逃〳〵ぬく天堂の躍老不退の悦樂ハ急き召上げ給へと申上ぐる〳〵此おしよの中にも天の
法内證に叶ひなまふ物なり同く父母親類親〳〵さ人く又布施恩賞をふへられさる人く為にも
頼みなまふべし不可依なりと分別をぐる〳〵其外病人又ハ牢舎となりさる人く都て難儀迫怕らせん
かさなる身と成たる人の為にも祈りおしよをなさ〳〵天主を頼みなまふべきなり是又慈悲憐矜の勤
なり中にも玫瑰花冠の組の衆の為小儀急なく祈りおしよをやて
より我為にハ先其時迫の科のゆ赦〳〵をもひをもりなり中にも犯し別をさる我好さの道の科の法赦を
もりなり重ね犯を間數〳〵思い定め又自今以後法捷を違背不致様にがらさをもひなりて大切
諫り堪忍節操等の諸善をふへ給へと頼み奉まふべき〳〵如此の念願を其ハ時観念致したる玄義
を御功徳と尊ミ御聖慮利亜の御取合せ法以て叶へ給へと可奉頼ものなり





聖人達を頼みまふべきにハ如何に九種の天神先知者宗徒教會鐸徳立重負者何ぼも此玄義の御恩の法れを
なされ不斷天主を尊重崇敬〳〵給へと可申上とのなり如此玄義の法恩を謝〳〵奉りて次にハ報〳〵奉り
んが為に我身を先とせたる人為さ程の所作凌ぐべき程の辛苦辛労を悉く皆法主に捧げをれ
給〳〵躍へバ錢取の下人一時自由を叶へんぐ〳〵朝さより夕べまでく辛労ハ皆是主人の為になれバ況
なり衣食の為へバ小時の養生迄も主人の為に法る事たり〳〵サイの價の代りにやうへむや懈怠なく
奉公を尽ぐよ於てハまして況や天主より実魂色身共にふへ下をれ其上一命をも御加護なされ
手足を働らをれ事迄も皆是天主の法力なのれに其上に恭くも我等悪人小對〳〵救くの法苦労を
凌さ給ひ聖さ法益の價を以我等を天魔のくらより請返〳〵給ふ個程乃法恩を奉請屓なく
爭況法奉公に忠勤を抽でなまふべきんや是に依て是等の御禮ごとくやうにいう法主
個程數多の法恩を能見知りまりて恭く奉存今日より我身を滅く不退の法諸代者に捧け
奉り一命の限り心詞仕業飲食痛病等に至迄皆不殘御奉公に捧げまりてゆ内證に叶ひ
奉まふ報にがらさをふへ給へと頼みなまふべし〳〵同じく法をぜずさまりと御在世の間凌さ給ふ御苦
労の法功力ふまりよく玄義に籠り給ひて天主又の法内證に叶ひ給ふ勝また教弟け捧けるのにて
在せば是を皆蒙りまり数法恩の法禮ごとくて悪く捧けなまふべし〳〵右の勤の便りの為左の巻第
三ふ十五の玄義に對〳〵て記をす十五のおしよを申上ぐる〳〵

第十一 ろざりよしおしよをやべき時他人の為にも祈みなまふべきと云事

第十二　玫瑰花冠のおらしよを申べき時深き謙りを以天主へ可奉頼事

おらしよを勤めん時天主の御慈悲を蒙り奉らん為にハ我淺間敷進退と多くの科を見知り天主へ頼み奉り深き謙りを以御憐みを乞奉るべき事肝要なり其ハ故ハ人間ハ性得物事に不足の身也其上科に好き悪に傾き易き身を持なれバ天主の御力を添給はずバ御内證に叶ひ奉る事あるべき一念を起す事も一言を吐事も曾て叶べからず癩人ハ慈悲物を受ん為にハ悪瘡の汚れを顧ず人目を恥ざるものなり又病人ハ療養の為にハ病の容躰を医者に包まざるが如く人ハ天主の御慈悲を蒙りて科の疵を平癒させ給ふ御救しを請奉らん為にハ祈禱の内にハ深く謙り是魂の不足と科を残らず天主の御前に顕し奉り御慈悲を乞ひ奉るべき事専らなり

第十三　玫瑰花冠の御功德を以おらしよを御納受有べきと頼母敷思ひ奉るべき事

右に云ひし如く人間ハ善作にハ不足にして度々天主を背き奉る悪行をなすのみなれバ我等がおらしよを御納受有べき事としし地盤少しもなしと雖ども又に頼母敷心を起すべき題目あり先一ツにハ天主ハ廣大の御慈悲御憐みの源にて在すなり喩へバ日輪ハ國土を照し火ハ物を煖め雪ハ冷すを採用ゐ夫々己れの性得のる如く天主諸善諸徳充満し給ふ白ひ満足の源にて在せども量りなき御善徳御慈悲の御内證天上より御恩徳を人間に与へ度思召ものなり故に御善徳御慈悲の有様を工夫するに於てハ深き頼母敷心起るべきもの也又にハ御主耶穌基利斯督の御在世の間量りなき御功力の御事なり又譬をいふに主人に忠勤を抽て奉公の道にて骸を曝したる人々子ハ其忠節を主人に披露いたしして親の知行御扶持に預るべしとし許訟するごとく御主ぜずすきりしと御出世なされて



御在世の間様々の御苦労凌き給ばりしよ御苦痛し給いて十字架に掛り給ふ御功力ハ御身の為にあらず尊き童身さんたまりやの御胎内に宿り給ふ端的より御是魂も聖寵と栄福と充満し給へバ御身の為に此御功力を入り給ふ事にあらずと雖唯我等が為に譲り与へ給はん為なりきんあるな然るに御臨終の時天狗後生の頼母敷を失はせ申さんため天主の御前に種々様々許へ妨けなせバ此聖人ハ栄福の歓びを以受奉るべき功力なきといふ共御主耶穌基利斯督我に遺し置給ふ御諸功力をし御功力を第一し便りとして天の歓びを遂げ奉るべきと頼母敷思ふなりと宣ふなり然ばおらしよし内御主耶穌基利斯督し御出世と御ばつしよの御功力を詳らかに天主に言上いたし科の償ひとして是を捧げ奉りて御功德の御返報を頼み奉るべきなれハ此おらしよ無足なる事有るまじきと分別すべし

第十四　天主ろざりよのおらしよを御納受有べき為にせざんをいたし慈悲の所化を勤め取別我敵のために頼み奉る事ハ大きなる便りとなる事

去程に御主天主おらしよを御納受有らん為にハ先行儀を正しく身持を改め力の及び慈悲の所作をなし致すべき事肝要なり福音經に憐みあるものハ憐まるべしと是に依て憐愍の心あるものハ天主の御慈悲にも預るべき功力なるものと分別すべし同しくせざんを致すも是又おらしよし便りとなるものなり其故ハ大齋もえハ飲食の中庸を守り又是魂の敵と成色身を節する事に依ておらしよを御納受なされん為の相當の地盤なり就中おらしよを申人ハ天主の御子なりと言バ此御主ぜずすきりしと宣ふく天に在す汝等の御親の御子となり

ゟうんさめに障碍をなし一扁言をも云難敷ことなり
見つゟり鳴呼恭き量りなき淨大切なる天主の誡
ゟめ天主を頼み奉りハ淨主の淨まと成奉ることなし
放てハよへ後もぶ事ゟべうぶ是に付句數多の學者書記され一事を繙にいとゞ一弐時ゟん
ぐりやとゝみ國の帝主の姫君いぎりなとゝ云ハ天主に對そ大切に惣立て難儀をさせ障碍をなし
人のゟにわらしよ於成救之氣をい一つの代りに彼者ハ却て恩德を一つ死之氣をひの數よ隨てゟへ
後ゟて天主を頼みやさゝれゟるゝバ其時の淨告にハ御主耶蘇基利斯督淨ゟを十字架に掛奉り
ゟ敷者共の爲天主又を頼み後ゟ事を學び奉り仇をなす後者に對一今ゟうゟれおゝしよ祖我内
證に叶ふわゝしよハ汝今迄ゟざるく夫に因て汝が科を赦し後ゟとゝ淨告を聖られゟ敷物なり
又是に似さる天主之の淨奇特あり福有成後家さ人子を持々敷なり敵其子を害して其村よ
隱をけ敷を守護聞付則憲法の成敗に行ゟんさめ早爺させ敷之の也然ゟに彼後家ゟ
彼切害人隱をけ敷ゟを聞付ゟれ共聊も遺恨なく天主の淨大切にゟみ奉ゟされ奉り彼を忍き
通さんが爲馬さ疋に路錢を添て使を遣り斯そと告て逃をゟなり彼切害人是を聞盛國へ
逃け免さ命を遁をゟれおなり後家ハ夫より拜みおさに引籠り我子の哭魂の爲にあら
一よをや明に光明赫耀さして子面見へ云ゟれゟるゝ敵の赦し我爲にわゝしよをゟされ一ゟ
我を懷胎せゟれゟる恩賞よりゟ猶深さ恩なり其故ハ斯程の天主の淨大切に燃立ゟされ
ゟおゝしよ御功德故にぶるがこゝろよ小て我受ゟき苦みを天主頂一ゟゟんとゝ云畢りて上天



せゟるゝをゟめなり是を以て科の淨赦一さ淨恩賞を蒙り後思ふ人ハ人より掛りよさゟる耶蘇を敬ひ
參さ事肝要なり

第十五　玫瑰花冠のわゝしよを以訴訟を叶へさせ後ゟん事
なりとゝ云事

わ後ゟよゝ門に天主に奉頼事を叶へ後ゟバ又女へ後ゟん事も差延後ゟ事度ゝ是の敷事なり其
謂を數多ゟりと雖先爰にハ四ツの事を顯バ爲一さりにハ頼母敷と堪忍のりや召を試し
後ゟんが爲なり此ゟりにハ量り左さぬ淨知註志を以人ゝ願ひを叶へ後ゟん相應の時節を能知り後ゟバ
其時分を待後ゟふ物なり其上此願ハ後生の爲若障りと成敷に於てハ曾て淨配當に頼るま
じくと分別を爲一是淨大切淨慈悲心深く在まバよ依てこなたへバ
熱ゟ氣の病に犯さゟれゟる人渇を敷ゟが故に水を望めどゟも熱ゟ氣去ぎゟ間にハ医者是を控て醒て後に
与敷ゟが如くなり同く病者ハ自のゟ病の禁物ゟ成物を好むゟのなりをゟとゟも彼ゟが願を達せぎる
さて醫者の不粉骨にゟバ却て病人の得ゟと成事明かな敷ゟが如一三ツにハ時に寄て災難の時
天主を頼み奉ゟを共速に其難を免ゟさせ後ゟバ難儀逼迫詮方なき死に臨みて既に死ゟ時分
通し後ゟふハ萬事に叶ひ後ゟやゟを顯し後ゟん
四ツにハ難儀殃災を暫時に通し後ゟをゟ敷事ゟ
を改め弥心持を清くなゟバ道なゟに依りてなり
絶へ諫りを以心根より天主に詫びをりてわゝしよを申上敷に依てなりかゟる故に淨ゟ天主ハ

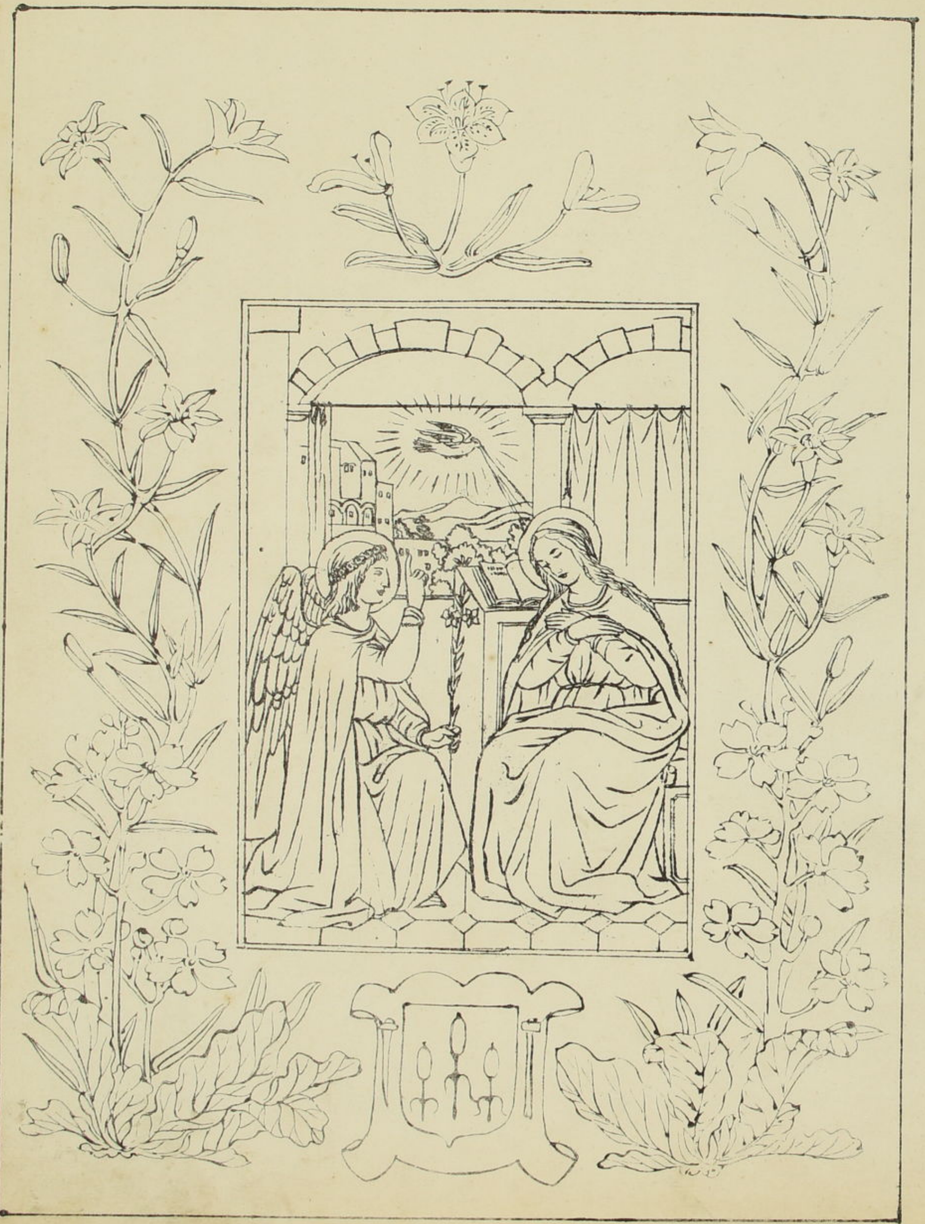
我等の清父ふて在せば猶ほ功力を重ねて善に本づかせ給ふん為に淨火切の上より暫く難儀に逢ふるをみそ分別もなく然まばおわしよを以奉頼事を即時に叶へ給ふとぞもかを落して懈怠を数事勿弥頼母敷心を以量りなき御慈悲に頼を掛けおわしよをわりしよう時心の耳露く徳を受又給き為に六根の及び永く罪事を思ひ出し信心消くと雖久く留まり申に於ては未だに聖籠の潤ひを濺ぎ給ふ事一諭へ八生本より始めに燃ざれ共火の中に久くらべ迚に於ては必ず燃立が如くなり





十玄義に付而観を為ざき題目は歌同く玄義に當ればおわしよし事

童貞聖瑪利亜ろおりよしおわしよ淨告為し淨極めて淨ませずすきりしとしく淨下為を観念をる事なり我まず龍鑑に備へまらん為なるべおわしよを申上れ時為く淨扶を我等に賜し給ふ淨前作を淺さめ淨辛苦逐一に観じまりて淨大切を催して仕へまり淨捉を保ちびして不叶事なりと分別を為し又越方天主を蔑にいるし事を背る事成顧みて悪を退け善に進まんりを歎く為し然まば其便りとなるん為に玄義に分ち観念のやう一招を知らせ夫に當ればおわしよを書得歌とみなり先おわしよし勤め根とい主をいく玄義に對し天に在ス一遍がさみちく十遍宛申まりて観念の終に記ばおわしよを申為さねなり又ば玄義を観を為き次第をさにせんざく日にハ始め淨歓びしき為の條を観しがらき完満五十遍天に在ス五遍勤むるべしてるをハ淨悲のお為條ごとるふハ栄福の為ヶ條ごおわし為し如此次第提當に一七日し間ろおりよく定りたる百五十遍しおわしよを勤む為ざまり其上にも心掛のふん人ハ猶おわしよをも勤に於てハ弥増ふ功徳を重祢ん人ハ必ずおんとやを蒙らんと心得為し同くさんたせすたさばとふも次第の如くなり統申す日ハおわしよし為く日なの為ハ都て十為の玄義を観念ゆるして百五十遍を申上れ為ま為のさハ三分二にも信心に随てや為し若又ば玄義を観じ為き暇なの為ハ或ひみをとりよく條ゝを覚へ難き人ハ一日ふ観せ為といみろいろおりよく定りるおわしよをも申におゐくハ但し功徳いんごるぜんじやく配分に於ては為さとのまり





童身聖瑪利亞の聖さ玫瑰花冠を中上ん時觀じ奉れ靈さ玄義之事

御母をんこまりやしろぞりよと號して天に在ゐ十五遍がらさ充滿百五十遍のおらしよを

奉申上時觀を靈き玄義ハ十五なり始め五ツハ御歡び次の五ツハ御悲み末の五ツ無

栄福のみをてりよなり

御歡五箇條之事

第三ニ留し玄義ハ童身聖瑪利亞ハをんがぶり忌れ大天神を以御告を蒙り續ひ於御胎内

天主子人界を請給ふ事

御主天主量り在さぬ御慈悲し上より人間を御濟度ゐ給ふ爲さ時節到來しゝまゝバがりれやの國の内
なざれとゝ云在所に於てだびどし末葉にじよぜふとゆ人し御妻にて在ゐ童貞へがぶりゑ給ふと云大大神を
をし給ふ之童貞の御名ハ瑪利亞とゆなり彼聖さ童貞のをますすやへ聖がぶりゑる見へ來りあべまりや
云ゝ則がらをゝ充滿賜ふ瑪利亞御身に御禮をなし奉給御主ハ御身と共に在ゐ女人の中に於てゝ爲て
御果報いみじさんと申上られゝれバ童貞まりや是を聞給ひ大に驚きぬふなり又天神いのに瑪利亞
天主の御前に於てがらさ城見付給へバ恐ましぬふ事なのを則御懷胎となりぬひ御子を設けぬふ
爲し其御名をぜずすと呼給ふ爲し是又極上し御位成御方し御子と呼ばれ給ふもんと申上らまし
ゝまゝバ其時童貞まりや天神に宣ふハ我夫し道を知らざれハ其儀いのでゑ叶ふべきぞ天神答て申さく
聖神御身に下り給ひて高上し御力御身ゑし御蔭と成給ふ爲しか給が故に御誕生なさる爲さ
聖さ御方ハ天主の御子と呼ばれぬふ爲し又御身し御親類いざべりなハ石女とゆ殊更老女の御身な
がら六月以前懷胎し給ふなり是天主の御前に何事も叶ひ給ひぬ事なき故に因給事之とゆさるゝ也
聖瑪利亞我御主の御下女なるまゝバ御詞に隨て我上小天主計らいぬふべしと御領掌あるとともに
天主子童身さんさまりやの御胎内に宿り給ひ人界を請給ふなり

此玄義に付て觀を爲き條々

第一天主元祖阿ぶんを御作なされざる以前に先住所のため樂みし天堂を作り給ふ如く人間を
御濟度の爲に天主子御出世ゐ爲き爲の御皇居として聖さ天堂にて在ゐ童貞聖まりやを
御作りなされ勝ましたる御善德を以莊嚴し給ふ事を觀念いたゐ爲し

第二聖がぶり名乗しきんさまりやよ汚告なされ給時深き敬ひを以汚れ給ひ給ふ事を観て我等ハ童貞聖まりやよ對し奉りて今迄の不信心と不礼をなし奉りた数事を汲悔いさし今よりハ信心を堅く汚祝日を用い前日にハざんをいさし又汚影等にも慎て敬いをなし奉ぢ給へ

第三深く謙りの心故に天主より汚母の位に挙げらるゝ事を聞き給ひて驚き給ふ事を観て我等ハ是に代りて人よりたげ賤めらるゝ事を深い喜ぶべき事を教へ給はれんと高ぶる心を悔み改め給へ

第四 同く尊き童貞聖まりやハ人間より特に大切なる御使天神を遣し殊更よりあふ題目も奇妙不可思議の御恩の理りなるに共大きに驚き給ふ事を観て是を鑑にいさし不犯を保ち給ふ事を深く慎み善念朋さば暫時も閑のび拂捨て科の便りと成給ふ事を速に退く給ふ事肝要なり

第五 汚告の時の汚歓びに狂をうまいさし給へ尊き童貞きんさまりやハ人間より對し給ひて汚大切なる燃立給ふ汚方なれバ常住不断人間を助け給ふ御為の御ハ弥心中に燃立給ひ汚願ひいさし汚出世の汚事を急さ頼み給はんと観念し給へ然ればハ如此の汚念願の中に御吉相を申上らるゝを聞給ひては如何程の御歓びたの給べきや猶又御親念なき給ふ事を観て是を鑑にいさし不犯を保ち給ふ事を深く慎み善念朋さば女人の諸〻の中小拙も景報いみじきうたの其尊き女人に宮仕へ奉れ給ふ人迄も景報なり願くバ其下女にならんにもと思召まん折節御扶手いさし御母に成給ふハ汚身ながら立ばくいさし汚告を請給ふ時の汚歓びハ如何在ば給きやとうまもてべし其時ハ個程御歓喜と御謙りとを以天恩を御さ汚礼を申上給ふべきや故に為給ひしならん



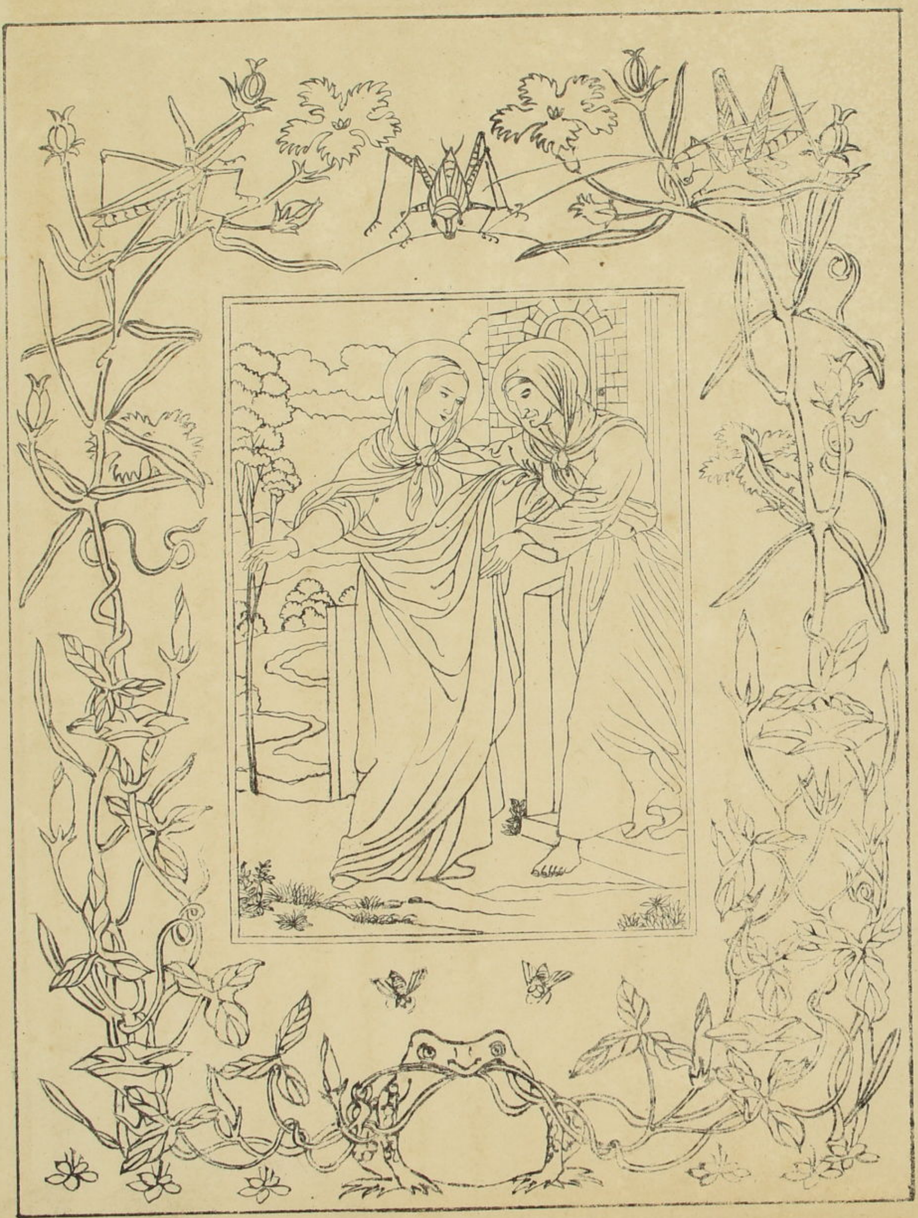


ちくとて我汚主の汚下女なるまバ汚詞の如く討の為給へと宣ひなり

第六古〻より善人達数千年天を望さ汚出世を願ひ待悪給ふ事を観て我等ハ此高大さ御恩を蒙り奉りた事を忝く思ひなり其汚礼を申上んさめに御主耶蘇基利斯督汚母聖瑪利亜小天小在ス一切人為に御勤をなし給ふ程に頼み給へ

第七汚子耶蘇ハ人間を救け給はん為に天降り給ふ御恩を我等ハ蒙り奉るべき為功力なさのみならず御為に御内證を背き奉れ罪科に依て量りなき苦みを受給て叶ひざる事ハ無ふと雖も汚慈悲心汚底深きのより我等が扶のりし為人界を請給ふ御礼を奉申上又我が霊魂を御休所と定め給ひ御善徳をよへ給ひ宿一奉りていつ迄も離をぬるざる様に奉頼ぬのん

第八御の汚歓び一云ふ義ハ尊き童貞聖まりやハ汚親類成をんさいざりなし汚宿所汚親類



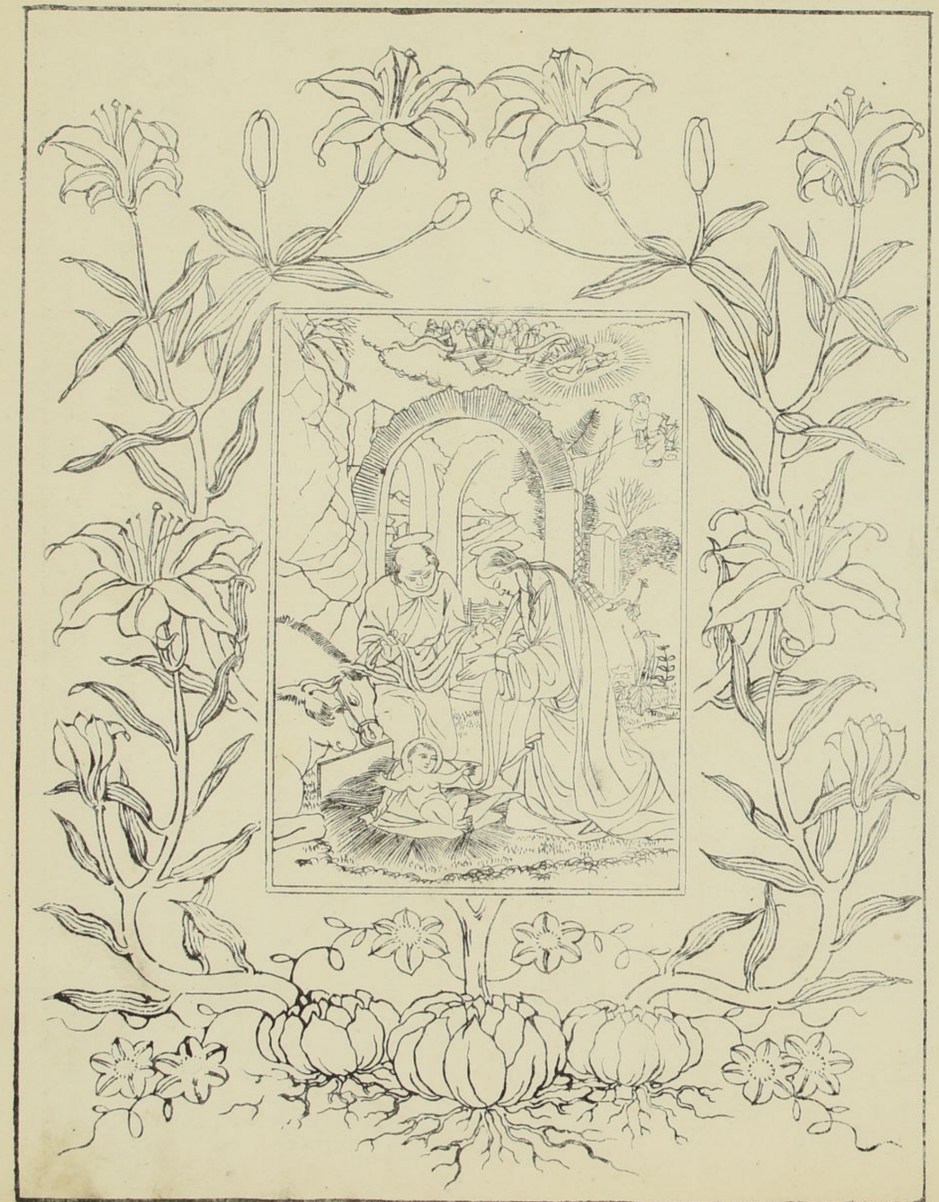


天神の御告の時御従弟女聖婦いざべりなを六月おほ懐胎と成給ふ事を聖まりや聞給ねて
御在所を急さじゆであし國の或山中へ赴きざがりやし宿所に着きぬひていざべりなへ御礼をなし給ひ
今まではいざべりな其御祠をゆうのると共にをんじるん歓喜踊躍して動きいざべりなもを知りとをん
としがらさを充満せられて高聲を申上らるゝは御身は女人し中に於てうけて御果報いみじきなり
又御胎内し御實は聖さふてをはしこ我御主の御母是にはいのでゐ御幸なるや誠に御身の
御礼し詞をゆうをあれと共は我胎内の子は歓喜踊躍いふなり御身の上に御主天主より宣ひ
ある御事を誠に信じ給ふに因て御身は御果報者なり其御事を御身に達して御成就
あるべきものなり其時をんさまりやは深き御信心御歓喜を以我あにま御主を崇めなり又
すぴりとは我自心にてをまはす天主に男みなをあとありてまにひかとうくと聖咏を奏し
給ふなり

此玄義に付ふ観を爲さ條く

第一童身聖まりや天主し御母し位に挙げらまし給ふと申給ひ弥謙り給ひ御大切に燃立
天主の御臣下をんじるんばぷちすこし御母聖婦いざべりなを御見舞ふ御幸ありて其宿所
三ヶ月し間御滞留し給ひ宮仕されし給ふ事を観しなりて誰にても何ま天主より重く御恩を家
なり又は高位に上れ祖孫謙り下賤の者にも大切の心を忘まじ皆我兄弟成事を思ひまを訪ふ
事を嫌まず却ふ支等の用を達せ給事を喜び別空病氣或は難儀ありと申ば親類友達は申に
及ばず我召使ひより共行てみ抱を爲し

第六天神の御告を蒙り給ひて則隠谷の中にて斯程勝れし天恩の観念に貪じ給ひて忙然として
居給ふ面さ折節なれども御ゆゑいぶべりなし御懐胎なる事を聞給へば其御用叶へ給ひたため
忽ち御観念の御座を立給ひ御ゆゑいぶべりなし御宿所に赴き給ふ事ハ我等も他人に對し慈
悲の所作を勤めん為にハ時に寄ておらしよ観念執行を止む面しとし御鑑と云ふ面し
第三をんたいぶ面りなし御在所に赴き給ふ時の道すがら御心中にハ善念に燃立給ふく
野山の氣色木々の梢千草の花の色を争ひ咲乱れて鳥も囀りの声々又滝より落ける谷の
水迄も皆是御胎内の御子を崇め尊び給ふ御観念此題となし給ひて我
等も歩く時ハ乃ぎりよを持同行にあるよにいてハ少し後にて行延び十五のみをとりよを観じ
おしよをかべし又草木の花落葉五穀等を見る時ハ御自天主を尊びたる題目
なる面さものなり同じく聖きおしよを以てハ道すがらも夫を讀み若又貪人に行逢に於
てハ志をいふ面き為面々の分限に随て少しの慈悲物を携ゆる事も宜しう候面し
第四聖婦いぶべりなし御宿所に着き給ひて三箇月程御逗留なされ其間御おらしよ
ぜんん聖き御物語乃みなて数々の御善行の明鏡を照し給ふなり又をんたいぶべりな
御産の時ハ御用あれ面き程の事を皆御調へ可然成等の御心掛の事を観じ我等も途
中にて或ハ一夜の宿の滞留の間にもおしよをかし聖き御物語をいとし善作の鏡を見
我分際に従て他人の用を叶ゆ面き事可なるべし
第五　をんたいぶべりな御懐胎なりしが御母をんたまりやの御見舞に依てをんじまんなて





原罪を除き潔白と成給ひきんこいぎ爲りなく聖神を充滿ありし事を觀念いたし我等も憂ひ氣
きひし時ハ御母聖瑪利亞の御合力御取合せし御見舞を頼み奉れよ於てハ御慈悲を可蒙事疑なし
其ため信心を以天に在ハ一遍がらさみちく十遍を捧げ左に記ハ於じよをすべし

なぐさしよ

いのよ尊き童身きんさまりや天神の御告の時御親類なりきんこいぎべりなる六ヶ月以前の懐胎と
成給ふ事をゆゑひ御大切を以遥の難所を凌き給ゐて御見舞あらせられ三ヶ月く間御逗留ありて
さんこいぎ爲りなにをもれ給ひ御合力をなし給へバ則其御見舞として御幸ありし故にさんじもん
ばぷちすとこハきんこいぎべりなし御胎内にて原罪を除き逗留をもれがらを請給ひ御身も尊き天主の
御母と見知らせゐふ御事なり其時の御悦びに對しがらさみちく十遍天に在ハ一遍謹て捧げ奉れ他
人に對し御大切し者と靈魂の潔き事を求め奉れよふに御合力をなし給へ
御身耶穌ハ御母の御胎内に宿り給へバ無程御謙りを以御母と共にきんこいぎべりなを見舞給ひもん
とし御内證なれバ天地し御主ゆゑ在ハ御身ハ共に御臣下なるゆゑ聖ごもんを見舞給ふ御内證に御礼
可申上又我等も御奉公と可成事を勤むべきため直實の謙りの善を与へ給へと奉頼あめん

第二番の御歓びし玄義ハ尊き童身聖瑪利亞ハ御子耶穌基利斯督を御誕生し給ふ事

聖よぜふ童身聖まりやと共にさせろおくもとし勅諚に應してなぶれよ爲とれるんし在所に赴き給へバ
夫に於て御産の時節到来して常の女人の如くに御痛みを覺へ給ふ御歡びを以清淨成不犯の御身より
障碍なく御子耶穌を御産なされ産絹に纏ひ給ふ之又此聖き若君を宿し給ふ爲き聊なければ
厩に置奉らせらるゝ之然るば其近邊に羊飼共羊を守り夜番して居る所に天神一体彼等が側に
近付給ゐて天し光明彼等を取圍み給ひ恐れ給ひの之其時天神是等に宣ふには恐るゝ事勿れ
其故ハ萬民の為に大歡喜成吉相を汝等に告知らせ給なり爲とれるんし在所に忝くも御主
きりしとなる御扶手今日汝等の為に御誕生なされたり其證しハ御産絹に纏れ馬船に宿
され給ふ若君を拜みなれ爲しと宣へバ其時数こし天神天降り給ひてごろりやうこ天に於てハ
天主ハ榮福地においてハ善き願ひ何る人に無事なりと吟し天主を誉め揚げ給ふなり給れバ
羊飼共天神の御告の如く爲とれるんし急き赴き聖き童身をんさまりやと聖よぜふ同く
馬船に宿させ給ふ御幼君を見付奉れバ大歡喜を以奉拜勇み恍て歸りたるゝ

此玄義小付ゐ觀れ爲き條こ

第壹御誕生ありたる御幼君ハ過去現在未来の人々に超へ給ゐて美麗に在ひ事と一切人間こ
御扶手早御出世ありしを童身聖まりや拜し給ふ時の御信心の御歡び如何程ましまひべき
やと工夫れ爲し

第弐御子耶穌を御誕生なされて御歡び淺のぶび内に天地の御主地上に御祿にて寒苦を
凌き泣給ふを見給ひてハ御母し御信心の御歎き又如何程の御事なるしんやと觀れ爲し

這程哀と成体れ浄水を清涼と共小桶さ取り浄ひ浄めぼのち整へ御を奉て御座絹よ纏ひ支に有る馬艸枕岩上へ置奉ふ御を乞ひ幼き浄み天地森羅萬像の御主にて在ス事を観じ終れば又如何程尊深き御信心御敬ひにて拝し浄ふ事きや偖又此御主ハ浄き乙の浄胎内より生を浄ふと見給ば如何にの御膝〳〵く抱き上げ御顔を吸ひ浄ひ浄乳房を含めまゐらせられて色〳〵に愛し浄大切の浄子と尽し浄ふ事を信心を催し観念いる〳〵

第二浄誕生ありし浄まし浄貧苦浄難後の有極を立支を為〳〵先尊き浄母童身聖まり や急く貧く在ス成り浄誕生の家いのにも見苦く荒ら〳〵敷ともてうやおハ馬船なり 浄誕生し時公会久く素雲なりられバ凍へ泣給ふんを抱を観じ終り我望ハ世母の安貴もなた 楽み財寶の欲に貪着して花麗を好み色身の撫育をのみ本とも給事を顧みる向後 此浄鑑の個程勝まる浄明鏡を目前に備へ終り世を厭ひ身を即して不如意心貧賤なる 事を喜ぶ道を習ひ奉らんとし催しにて拝ら〳〵ませをひべし

拝礼しよ

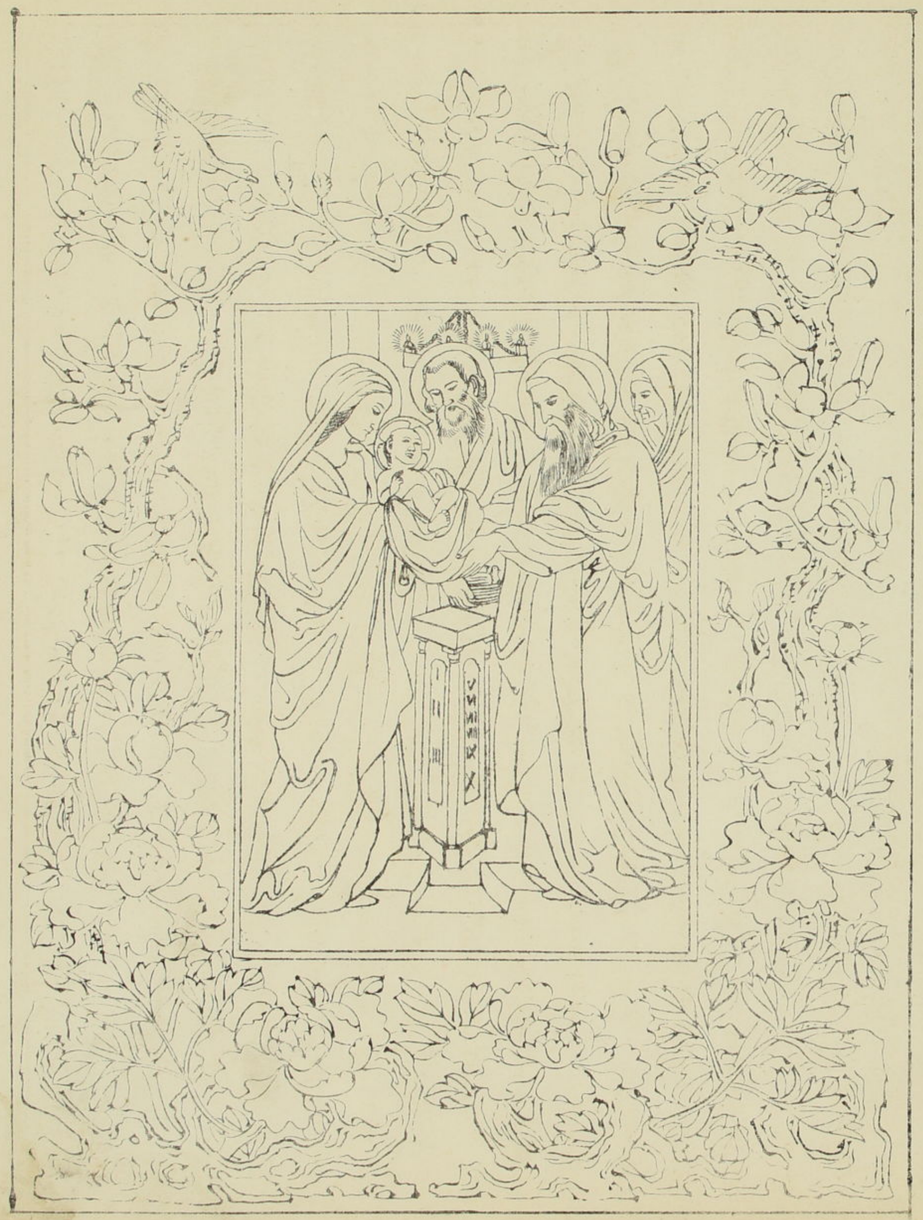
如何に尊き花童貞聖瑪利亜人間成扶為給ふんを為に浄身の清浄潔白なる敷浄胎内より生まれ 天主の浄子を浄悦びて深き浄敬ひを以初衣にをしみ馬船を置奉らせられて生き番に拝し給へば 天神もごろりやちくとそ天主の栄福地に於ては好き願ひのるへハ必事とのるかとの 音樂を奏して羊を飼ふ人に至迄拝し奉れを浄覧じ給ふ時の御歓喜に對しまりて今 がくさみちく十遍天に在ス一遍捧げ奉れば又實もなき世界ハ宮位俸禄ハ望を離を彼尊ひ



一厩の貧賤成門に立入貧の善に心を移を給に御子耶蘇の浄前に浄取合せをなし給へと奉頼 いのに其味深く在ス耶蘇浄母御立度の紐を解ね給ふ時聊の障りもなく容易く生を給ねて尊とき 玉体を馬船に休め給ふに對し浄礼をなし奉かる又我が妻現にも生を給ん為に好き身持ま 生を乙ゑられあによる色身共に不断潔き善行に励のんよふに計らね給へと奉頼めん

第四番ハ御歓びの玄義ハ浄子耶蘇ハ御誕生より四十日目ハ浄母聖瑪利亜ハ浄堂に詣り

天主父ハ捧げ給ふ事





御誕生より四十日目に御母聖瑪利亜さんよふぜふと共に御掟の如く耶穌を天主又に獻げ給ふ為にせるぎれんへ登りゐふなり同く尊き御進物成御子耶穌と共に捧ぎ給ふ為に鳥を一隻御持参なされたるなり然るは其ぜぜ給ふ為にしめおんとも善人有るが数年以前に聖神より存生之間に御扶手耶穌基利斯督を拝し申せ給ふ事をこゝ御告を蒙らせ給ふなりをもしめおん其時聖神よりこゝ御導きにて御堂へ系詣ありて御若君耶穌を御父に獻ぎ給ふを受取奉り抱きまつされてのんくりみちすとことていのに御主此眼ハ御扶手を見奉るゝ今ハ早無事に此世を去ぬ事とまつ

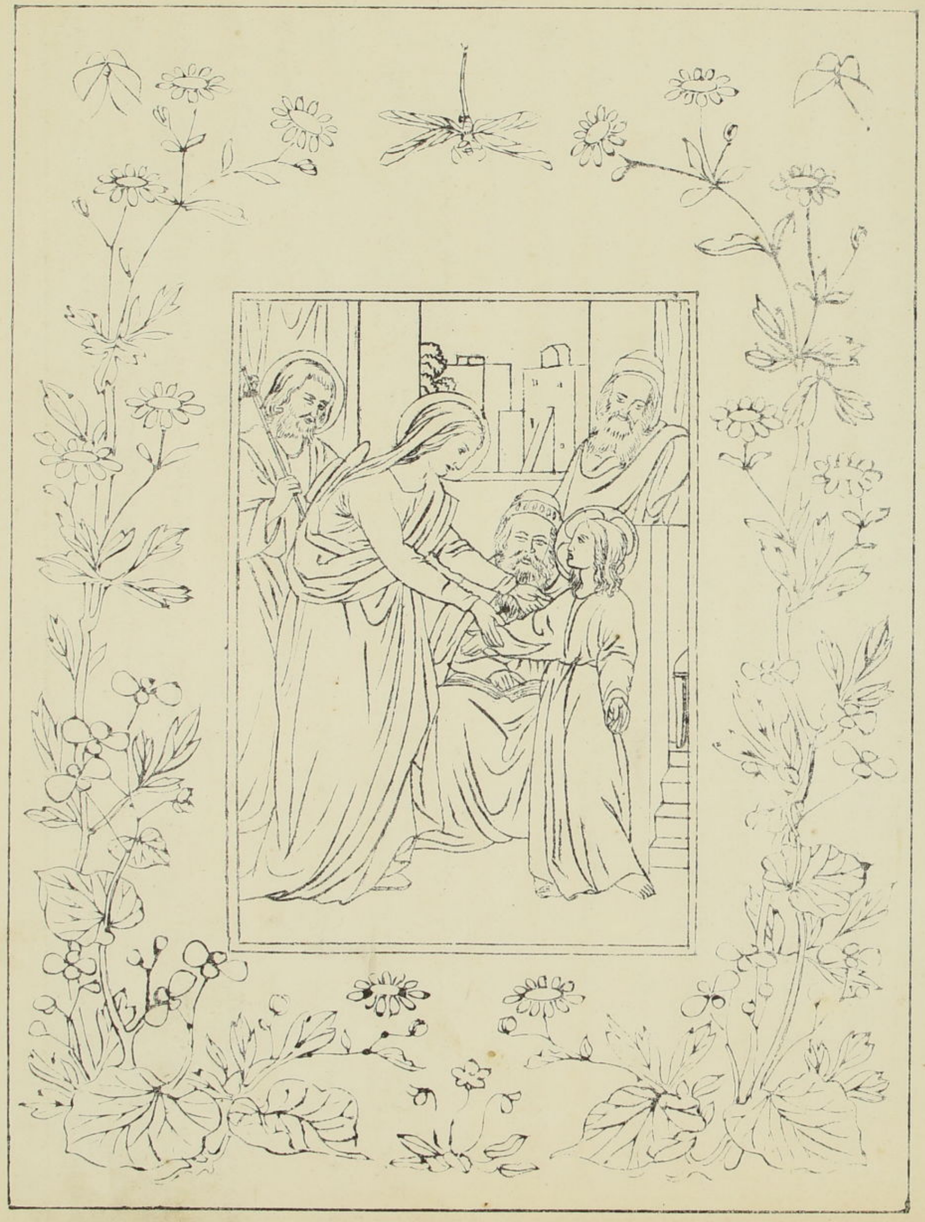
此玄義に付ゐ観せ給ふ條々

第一童貞さんさまりや此御掟を保ち給ふ御謙りと達しさる御従ひの善を思案ぬ事し身潔禮ハ常の女の産の時乃不浄を清めん為く事なり童貞さんさまりや御子を設け給ふ事ハ聖神の御力なれバ御産の前後共に一点の曇なるさ御身にて在ぬなり聖神是を指て微かしもなく皆悉く清浄潔白なりと宣ふなり然るは何とて身潔の礼し御掟を保ち給ふぞと云に是則御為に御ぶび唯我等に謙りと従ひし善を見せ給ふ為の御事なり童貞聖まりやハ保ち給ふべき共あるしき成ま其御掟を保ち給ふ事なれバ我等ハ天主の御掟と聖會の尊き御定を保ち給ふ事猶専要の儀なり又御主天主ハ美麗清浄の御体ゆゑ在せば清き灵魂なるべでハ天上に於て拝みまつる事曾て不可叶と観せべしかるが故に科に垢附ぬ灵魂を清め又ハ弥増と潔くなさんためにこんぴさんを繁く申尊さゆかりしちやを授りまつりおぶしよぜぐん等し善

行をなして心詞仕業の科を止め数多の教皇より此組に授け給ふいんじるぜんじやを蒙給ふに歎く
而し懈怠あらばぶるがこふりよに於て清めらるべし
第二御母御寵愛し給ふ御子耶穌と共に鳥一隻御堂へ捧ぎ給ふ事をユまして我等が善作の功力
少き善行をも耶穌の御功力と共に捧げなきば天主則御納受可給べきなりと観ぜ而し
第三きんしめおんし御歓喜の程を観察せ而し彼尊き老人は世界に罪過溢まて日々に数多
し灵魂いん而れの事は堕落せる事を歎き朝暮共に御扶手し御出世を頼み侍りされる数年
し御念願を達せらるゝ殊に御出世なされる御扶手し本顔を添くも拝し抱き申されるれば歓喜
し涙と共に不浅恭敬禮拝ありて此廣大の御恩此御礼重祢く重畳なるゝん事を観じ我等も
又他人の後生を願ひ助の事を悦ぶべき事本意なり同く尊きゆかりしちやを授りなる所べき
時は此しめおんし腕上に抱き申されるる御主を我等も直に灵魂色身に奉請と観して勇み悦び
信心に燃立て深き謙りを以崇敬いたし量りなき御恩の御禮を可申上ものなり

おらしよ

如何に清淨潔白に在ひ童身聖瑪利亜御子の御誕生より四十日目にぜるざれんへ登り給ひ
御信心御大切を以御子耶穌を御堂に捧げ給へば御老狩の志めおん聖さ若君を抱き給ひ
数年の間此御扶手を拝みなりなとし念願を遂ぶらき同くおらしよぜん等の善行を専ら
とし不断御堂に入らせる老女しあんなもいのにも御敬ひを以拝み申されるる事を見給ふ
時し御悦びに對し奉りがらき充満十遍天に在ひ一遍謹而捧げなる





又御産れ御おほせに潔く在ほ御身我等が鏡として尋常の女人の如く不淨を清む御身潔礼し御掟に隨ひ猶又我等の悪人ハ聖會へ系りこんぴさんを申灵魂の不淨と成科を清め天堂に於て天主の尊前に潔よく捧げられ奉れ爲きがうさを御子方も請給へと頼みなされいのに尊さにて在ほ耶穌基利斯督我等が科の償ひとして價高き捧げ物と成給ふ御身に御礼をなし奉れ我等も又御身の御奉公とし爲灵魂色身共に捧げなされよふに計らゐ給へと奉頼なのめん

第五番の御歓びの玄義ハ御母さんさまりやハ御子の十二歳の御時見失ひ給ひぜるされんし御堂に おいて学匠等の爲に御講釈して居給ふを三日目に見付給ふせ給ふ事

ぜずす十二し沛歳に童身をんさまりやとをんよぶぶふ御祝日に常の如く具し申されぜおぎれんへ登り給ひて沛堂へ沛参詣ありたれバ沛祝ひ日過て帰り給ふに沛双親ハ知り給ひてぜずすハ残り留り給ふ也然まば沛両人の沛親無ぜずすハ余人と共に沛両宅何ぞしと思召されて沛親類沛知音の中を尋ね給へ共見出し給ひざれバ又ぜおぎれんへ沛尋ね に立帰らまし給ひて三日目於沛堂学匠し中に沛教て付沛問答なされ人々分別に及ばざ給沛理りを述給ふ也其時沛母宣ふにハいのに子何とて斯計らゐ給ふ哉我等此人無歎き悲みて尋ね給ひしとあらんれバ沛主答て宣く何迚我を尋ね給ふれ今ぞ我沛親天主父し沛用あるまゝ居ぬ聖き事専らしと知まじやと宣ひて沛親と共になぎれへ来り給ひ此人の沛親に従ひ天主し沛前と人間に沛年齢聖寵に募り給ふなり

此玄義に付而観ぜ聖き條々

第一童身をんさまりやをんよぶぜ沛子ぜずすと共に沛祝ひ日小ハ深き沛信心を以ぜおぎれんし沛堂へ沛参詣なされたる沛鏡を見奉り我等もをんさゑけまじやか定め給ふ沛祝日を保川聖き事専らしさんさゑけまじやか沛祝日を保川聖しとし極めといふハ沛堂を参詣をいふ常よりもおもしよを中重ね聖き書を讀病人を見舞本心を糺して進退を改めんとし思ひ定めをいふ事等し善作を勧めん為なれバ博変其外色身の實もなき邪楽に光陰を送ぬ事なきにあらずと観ぬ聖し

第二沛子を見奉ひ参らせら給ひ時の沛愁歎を工夫いふ聖し過去現在未来の人り

勝を得ひ諸善諸徳備そり給ふ汚を人のうにて在せば聖さ汚母し忠召汚大切し程を誰乞奉ふべ
奉敬奉さ聖さ汚幼君を拝覧なされ肝要れ汚詞を聞給ふば其時の汚歓悦ハ如何在ひぐや汚恢ひ
余りにハ只忙然し給ねて呆を給ふの外有奉ふの汚ひ数多し善人汚扶ま〻多奉廣大の汚善徳を以
汚観念に貪らまて八地を離さ宙に上りまれバ諸善人に誠給ねて汚大切甚深に生ひ汚母汚も
汚母に消滅給へバ其汚歓楽も又如何程なるらんや定而同座に汚食物をも聞召又汚寝なさ
給ふ仰なごを汚境に給ふらん時ハ汚母ハ飲食を用ひ給ふひ唯汚観念のみにく呆を給ふべき
なり我等も聖さ汚子耶蘇北王顔を直に拝し心地して観念うさば深さ悦ひを受け
奉敬奉さまり然もば母なき汚大切に思召汚ふし尊顔を拝し給ふを以汚歓乞莫を之
し一程見失ひ給ひし時の汚歓さも甚さ深うべし〻と観を奉し
どび奉を〻妻我子の歸宅定めし日限よりも遅うる給事を深く歎うれ給ふ汚母聖瑪利亜
天地し汚主を見失ひ給ねく〻汚歓さハ又如何程あらんやと立まさ奉し拠又見逢奉せ玉れ
ぞ給ふハ汚歓さ〻余りに萬に満思案あれバ何國に在して何事を成給ふべいの成宿にて何
さ給供御を聞召され又如何なる歎宿にて起卧を本し給ふらんや拠と思召余りし事にハ又日
輪に向ひ給ふく宣ふべさにハ汝國土を照せば我無碍の宝珠隠をくまし給ませば照し現せ又
星に汝遠國より三人の帝王を導さ汚誕生の耶蘇を拝ませ玉せ如く今ハ我を導く
奉〻と宣ふ奉さ事も是あれ奉〻と観念を催し奉〻
第二汚慈歓深さ汚心く内に種〻口説さ給ねて彼方此方と汚親類汚知音し中を号ね



給ふても見遣給ひぬ又汚堂へ汚来詣ありて見給ふ
汚歓悦如何程の汚事なるんや汚見失ひ給ひし時の如く見遣ひ奉ふ
ふ附し汚恨し程を云まさべし汚悪の波ハ汚感涙に変りぬべし〻ふけをやすねこし給ふ
天主の汚憐し汚善徳ハ炎天し本蔭夏の清水旱魃に雨を降らし給ふ云常闇の後の光に譬へ給ふ事
是を以那んさんまりやし汚母の雲晴て汚歓喜の晴天白日と成給ふ如くにあらびや又
奉ふんせりよ 即ナ福に見〻ち給ふ如くに或女人明珠を失ひて又見付さたにも〻恨びの余りに近邑の人〻
を呼集めの奉を我と共に歓ぶべ〻といひうれバ汚母び歓んハ上臈下男の無碍の宝珠にて在ひ耶蘇を
見付奉ふせ一時の汚悦びを誰乞推察し奉敬奉ふ汚ひや其時こそ天神に向ひ奉て我と共に
喜ひ敬奉〻と宣ふんと云まして我等も天神に向ひ歓喜踊躍ふ〻天に在ひ一遍がき
ふ汚母をてりよし観念より猶もあにまし深さ徳を取らんために汚母をんさまりやとをん
よふぜふ汚慈歓に沉み給ふて汚子耶蘇を尋称給ふ事を云まいらす奉〻汚主ハ汚母の
双びなき汚大切に思召汚母の恒程迎歓さ給ふんよふに知り玉ふべき事なりと随
則討に給ふ事ハ汚親ふ汚不孝し道と見へうれ共曾て其後にあらび弥汚大切と
思召ハ依て〻汚事なり其故ハ堪忍の勝を立功徳を汚存生の間ふ汚母に尚へ
ふいまいらせ玉まふ此世にて汚母に對し奉り最上成汚返報を
ふいまいらせ玉ふん為なり観念を汝存命の間の難儀辛労を不可嫌

又曰天主の御勤労給ひしなりと思ひ取り心能凌ぐべき事

肝要なり

爰ぬ御親類御知音の中にて、見逢給ひし唯御堂にて学匠達の中に御問答なさるゝにばん逢ふまうせられしも一事、我等も後生の道を尋ね神んと思ふば知音親類衆の中を尋ぬべくもあらず我身の依怙を獲ひて御堂へ参詣いたし談義をも其御指南を保ちて深後悔を以こんぴをんを可申とこゝ御事なりと観を参らせ給ひしなり

をんよふぜふと御母をんさまりやに孝行を尽し給ふ事をつゝまを参らせ我等も御親に従ひ後生の導きに好き異見を加ふる人々に従ふ為の気をまをといふ心なり

## 第二

いのに尊き童貞をんたまりやをんよぜふと共にまします御住家に、見失ひ給へば其間御詮方なのさ深さ御歎きを尋ね給へば、漸く三日目小御堂に於て学匠等と御問答なるを見出し給ひしなり

かくに見逢ひ給ふ時の御歓ひよ對しがたもす遍天に在ます一遍捧げまゐらせ

いのに童貞我御主斯なる時は急さ後悔を以尋ね奉り給ひしなり

失ひにおがくさを遂し給へ天主にまして直に御子を顔を拝しまゐらせ給ひしなり

## 第三

## 御悲みの玄義之事

御悲みの玄義を観じ参らさ心得べき條々

此御悲みの玄義の中何も観じ奉りても其徳多けれども中にも六つの徳義あり則如左

第一には尊き玄義の題目に随て御主耶蘇基利斯督の受給ふ苦みの深さ事をは能観じ奉りて御主と共に痛みを歎事なり

捨ひろと給ひし時多くの御弟子達より

まをの人もなく却而皆我先にと逃去給ひしなり

其上御大切深くをんて御母其御苦痛を共に御心中よ察べき事なり

## 第四

第一には尊き玄義の題目に随て御主耶蘇基利斯督の受給ふ苦みの深さ事

をは能観じ奉りて御主と共に痛みを歎事なり

捨ひろと給ひし時多くの御弟子達より

まをの人もなく却而皆我先にと逃去給ひしなり

其上御大切深くをんて御母其御苦痛を共に御心中よ察べき事なり



いのに聖き耶蘇御身を欲さまよせられさる御為し頼て御歓びにかのくせ給ふを御礼を申上参らせ

我等にも憂ひし時ハ心の御宿めを与へ給ひて又我等を助け給ふん為に御身の御大切の御母と

聖よよせぶと三日共間離まし給へば夫を御やのりを歎き天堂小て我等も価高さ御譲りを請ひ

ん為に今現在の世に於て骨肉の大切を離れ参らさ報に御力を添給へと頼みを歎あめん

## 御悲みの玄義之事

御悲みの玄義を観じ参らさ心得べき條々

此御悲みの玄義の中何も観じ奉りても其徳多けれども中にも六つの徳義あり則如左

第一には尊き玄義の題目に随て御主耶蘇基利斯督の受給ふ苦みの深さ事

をは能観じ奉りて御主と共に痛みを歎事なり

捨ひろと給ひし時多くの御弟子達より

まをの人もなく却而皆我先にと逃去給ひしなり

其上御大切深くをんて御母其御苦痛を共に御心中よ察べき事なり

## 第四

第一には尊き玄義の題目に随て御主耶蘇基利斯督の受給ふ苦みの深さ事

をは能観じ奉りて御主と共に痛みを歎事なり

捨ひろと給ひし時多くの御弟子達より

まをの人もなく却而皆我先にと逃去給ひしなり

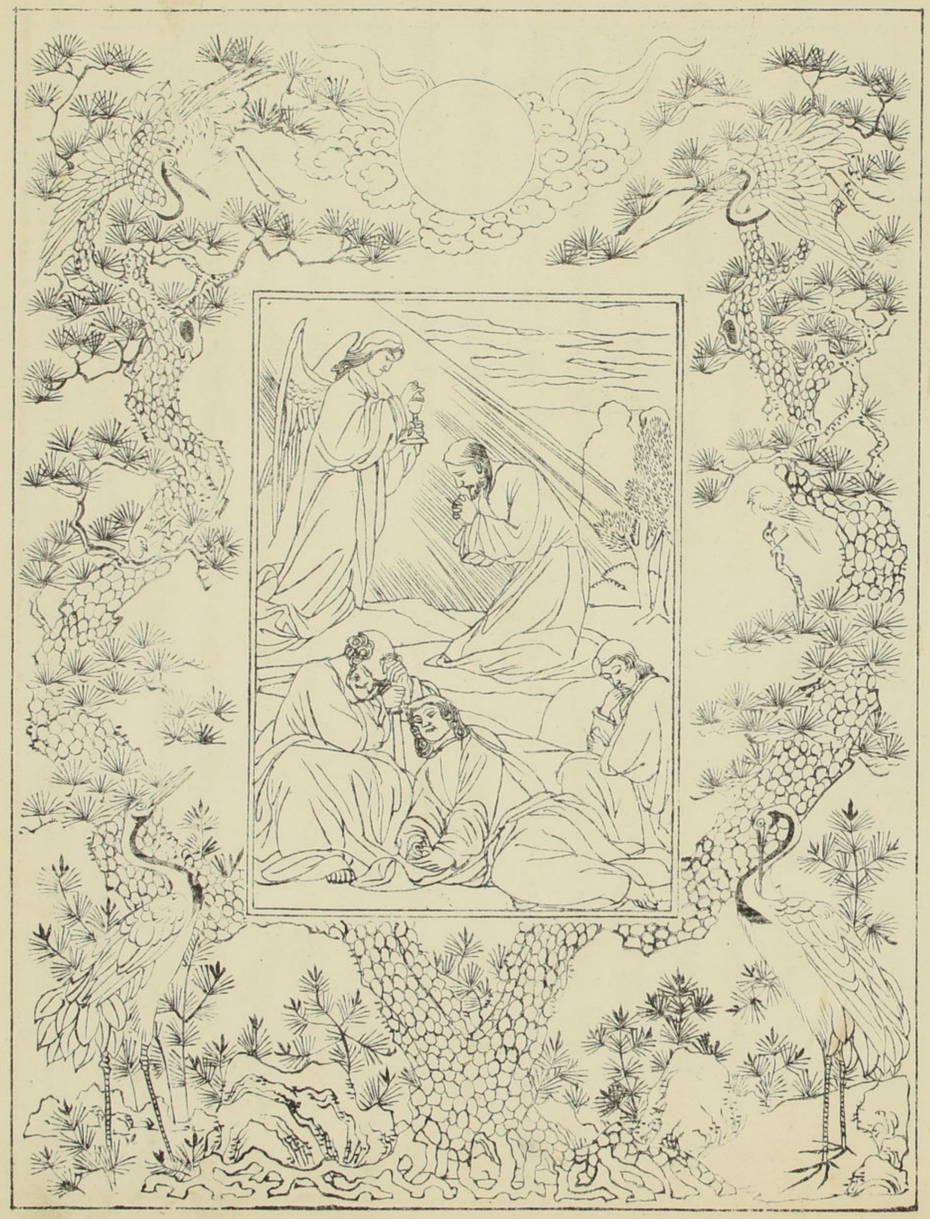
其上御大切深くをんて御母其御苦痛を共に御心中よ察べき事なり

第八個程佛苦みを深さ佛ふ因緣ハ一切人間の科なき心我望ます科の品々則佛主を苦しめ奉り
擲め取打擲いさして其の時を着せまり十字架より釋放事を思ひ出し自今以後佛主を背
き奉ぢる事と堅く思ひ定む爲ー
第三に佛ぱつーよし觀念をやさらん時天主の佛憲法を立夫を爲ー佛科女ー也さ如佛大
切し佛實ゑ人間し科を請掛り給ふよ依て天主又個程嚴く當り給へバ我と犯を救の科な
對ーてし佛憲法の佛允明ハ又如何程嚴重なる事爲さで同く我等をいん罰のより逃し給て
上天の快樂を享へ給ふん爲に個程佛辛苦を忍ふへ給ふを觀ド奉り扨復天堂の樂しみ
いん爲るの（永苦地獄と訳す）し苦しみ何ぞも果しなき事を能く立夫を爲ー
第四に佛悲みし玄義を觀ぜん時佛の慈悲佛哀憐の程を觀ド奉り佛大切に燃立爲さ事
專らなり其故ハ一切人間の嘗西訶ハ天主の佛爲の佛得失にあらず唯一遍に佛慈悲の上
より人間の受爲さ苦愚を更給ふ事ハ扨も難有佛恩なりと奉へ扨に於て佛大切に於催
きり報ぬ爲心出來ず爲さ者なり同く佛痛みを請畫ー給ふ聖さ佛血の高大の
佛價を以天狗し奴となりー一切人間を更返し給ふ事を立夫いさしー其德の位ある事を見知
再び天狗に身を得ざるよにせん爲ー是專要し緣なり
第五人間ハ我身の極云目をなさしー世界の富貴もなを栄花を重さと欲く彼傷称さる生涯を
療治し給ふん爲に其良藥となり扨復りし道を擇び給ひ聖さ佛全方に救ふの佛告を
更給ふ事を觀ドなりて無量し佛智恵を發ろさ佛さ有難爲ー



第六ぱ玄義に明鏡を見せ給ふが如く深さ佛謙り佛堪忍佛順ひ佛柔輭等し萬善德を都く
立夫さして受ひ奉ぢる爲ー譬へバ君ハ步みを運ぶるに馬よ乘ぢ爲さ臣下あれ爲さや又戰場ぶて
軍の大將ハ汗馬の功をなし防戰の苦勞を凌さ給ふに旗本の兵共飲食のさあよ自由を貪ぢ於てハ
誠に忠道の形為ともえに絶ぬ爲ー我等の佛大將佛主耶穌基利斯督佛ばつーよし戰場ぶて
赴さ給ひ安要のどのでいより樣くに誹謗せらるれ種々の屈言を申掛られ百千難を凌さ終りハ
佛一命を棄給ふに却而我等ハ慢氣懈怠を以色身の安樂に而已心掛て日を送らんを扨
事ハいのたも暴惡無道の心底ぶて恥の一ぢ事なりと觀ド爲ー

第七番ハ佛悲みし玄義ハ佛主耶穌基利斯督佛ぱにやの森の中にてわらん
よを成し給ひ佛血の汗を流し給ふ事





御主耶穌基利斯督御ばつしよし時節近付ゐりと知り給へバ其御覚悟をなし給はんために
御弟子達を召連御おじよの為に節く出別を給ふぜひまにやし森に趣き給ひ御弟子達に仰せ
ゐれハおじよをも置く為ゑて此所に聢と居置しと宣ひて置ところじやこぼじらん祢をも森の
中へ召連御心中にハ早御恐をと御悲み出来始りて我が灵魂死を給迄悲さ也と宣ふこ汝等ハ
是に番して居れ置しと宣ひて御きて人礫おけ奥に行延給ぬく宣ふにハいのに御父御身ハ
何事も叶ひ給へバ我より此爵を遁し給へ然れ共我が望を遂け給はんに唯思召侭にあらせ
給へと宣ひて御弟子達の居らるゝ所に歸り給ひ眠られゐれを御覧じ誘惑に陥れ
まじき為に寝ぜしておじよをきらるべしと宣へり又えし所に行給ゐて始の如く御おじよを
なさるゝに天神一体天降給ゐて御力を添ゆさるゝなり又ぜずすハ深き御悲みにて御おじよを
なされゐるゝバ御血の汗を地上まで流し給ふなり其後御おじよし衆を立せ給ひ御弟子
達し居らるゝ所に行給ゐて宣ふハ今我悪人の手に渡さるべき時節来れり立上りて我と
共に出て迎ふべしとし御言ふの下よりじゆだす（山名）（即如徳亜之一黨）じゆでおを案内者と
して巨松を燒し戈兵杖を帯し来れ之謀叛人しじゆだすハ兼面の約束にハ我御顔を吸
なれ置き人躰を搦め取て無油断石辺洩らせなとゝ云捨てじゆでおをが来れべき道へ
出迎ひ給ふ耶穌に近付なり御顔を吸なりゐるゝバ兵卒共取込奉り暴けなく搦め
奉れなり御弟子達ハ是を見ゐるを散こになゐれるものなり

此玄義に付観を置き條く

第一御主耶穌基利斯督天狗此擒と成る人々を請返し給ひん為に御ばかりしよく戰場に出給
ひんと思召時刻到来しければ其御覚悟し為に兼日御おもひしよく為に出馴まゐらせつまにやの森へ
赴き給ひ御おもひしよなされる事を思惟いたして我等も肝要なる事を企ん時ハ先おもひしよを申天主し
御合力を頼みまゐらん事専要なりと教へ給ふと観ずる事しされバ御おもひしよをなされし時御悲み
深く御血し汗を流し給ふ事ハ程なくまゐ給ふ事ハ御苦痛の数を御思案ありて一ゝ悉し
給へバ早森の内にて御おもひしよなされ数中に御節々に至迄まゐ給ふべき御痛みを覚へ給ふ
と観念せ給ひし先御全身に請給ひん数千のお擲御頭にハ茨の冠の御痛十字架を擔ず
給ひん時の路次の御辛苦聖き御手足ハ尤も暴き鉄釘にて情けなく打付られ給ひん御苦痛
皆是森の中にておもひしよし中に早覚へ給ひんと観じまゐ給ひし個程迫兼る御心中に痛み
給へバ御ばつしよし御苦みを再び凌き給ふと観念いたして又御恩の事も重ゐて成事を示く
なしまゐ給ひし又御ばつしよし場に出給ひぬおに御思案を以試み給ふるのハ勇猛の御心
を以以後凌き給ひん為し御覚悟なりと分別せ給ひし猶又更に御悲みし基と成
事ハ其時一切人間し科を残らず思召集め給ふるの之其故ハ人間の科送りし為し御出
世なれバ科し償ひなき御ばつしよ前に過去現在未来の人間の科を御思案なさるゝを以御愁
歎し基と成る事又科ハ心仕業し二根なれバ御心中にハ御悲み御所作にハ御血し汗を流し
給ふなりだびど帝王ハ天主の御大切と御参まゐし願に依る人し科故に悲み寝ると宣ふ
我等が御扶ませずすハ古今未来し人間の量りなき罪科と慳貪放逸狼籍を御あら

ーよし中に汚土覧るそし汚恕欺ハ如何程を仄爾こさや取別汚方を汲ーまだ仄爾こさ悪業
とみだ仰でたを等が宮ーをれ爾こさ悪迷を汚思案ありて汚悲みし余りに未聞不見し汚血を
流し給ふん為し基と成り然もば仏聖こさ明鏡を見を取我等も大まし汚大切汚業会まり
額を以我科を始こて一切人間の科を悲しみ感涙に流まん事を教へ給ふやと観を爾こ
第二汚悲み時汚松ぶしよを以成大まを又を軒みを給ふやく我等も雑俄悪みし時ハ大まの汚哀
憐を軒みを取爾こ又汚松ぶしよ円に汚悲欺給ふ間に汚方を逢ハ眠られ
ざる程ぶ仏ーぬよやく我等も憐ぐさき事を松ぶしよをいさても遁し給まじと云を松ぶしよを以む
爾こうじ乳者ひ独彼堂なるん程ぶ仏精を励まー汚慈悲を軒みを取べき事ー肝要
なりと観念をいこ爾こ

## 第三之六

第三汚をずすきりしと我等が科を個程を汚悲欺給ふ事を観ぐさ取爾こ同極大事の
きりと福音経に見へたり是を以人こ後生一大事を勤ー我等が扶りを汚主耶蘇
基利斯督汚大切深き汚重を以個程欲さ給ふ事を観ぐさ取爾こ同極大事の
後生の事に我等ハ眠りて不精を掛へ懈怠の方にも仏事を顧みて聊むべきなり又
喩へバ童子の我身の得を糸へざれハ昼ハ遊山翫水をーて夕べになれバ早く寝後に光
陰を送をこ共親ハ其子を育てん為に経営の心掛をなをぞ如く汚主耶蘇基利斯督ハ
汚方ら達の睡眠ー給ふ中にも汚松ぶしよを以成一切人間の後生ー経営に汚心をそー
給ふ事を観爾こ



## 第三之六

第四汚悲みーねぶしよし中天主又ハ天神一体を並ー給ふて汚力を添給ふと福音経に見へり
我等も難儀悲みし時ねぶしよをりにおゐく給ふん事疑ひなべくバ同く天神も信心なき者のねぶしよを
といへども不信心にて敬ひなき人こねぶしよを取次給ふぬるみなべくバ其側を遠ざりまふ爾こと
心得爾こ

### ねぶしよ

いのよ童身をんさまりや汚大切ー汚子ぜずすぜ仏まにやし森の中にて汚ねぶしよをなされ一切
人間の為に諸忍らく給ふ時に依て其難を遁ー給ふ爾ことり共悲みを者的
糸へなべく莫大ー汚功徳を科に依て無足になー奉りて終りなき苦患に墮落をべき事
同くべ仏だすよりべ仏でおを等ーまに汲され給ふべきと思召給へバ汚悲みし余りに汚血の汗を
地上まで流ー給ふ汚方も共に深く其汚痛みを心に覚へ給へバ汚女人ー汚悲みを歎ーまりて
がくさみらく十遍天に至八一遍棒げをれ又磁俄よ遠い悲ーみの時ハねぶしよに届き其難を遁ー
給ふんも頓ーて給ふまじくも只痛りそ給ふ汚方ら計らいよ仮せをれよふり汚頂合をなー
さまへと松みをぬ

九童ーあんじよす天神とし汚歓ふくまーまびぜずすきりしと汚血ー汗を流ーくりふ
訳す
汚方を汚礼をなー奉爾我等が科ハ其基なれバ越方の多ー科を悔悲ーみ向後犯を
ざるよふにがくさをなへ給へ仏めん

第八番し沛悲みくしみをてりよハ沛主せずすきりと石れ柱に搦め付らまし数ゝ乃
寺擲を更給ふ事

兵卒共耶穌を搦め奉り先あんなし許へ曳まりてあんな名人し郎等共耶穌を見ると共に御顔を
おまはせ共御案和の御返答をなし給ふより外なし又夫より搦めまりなのゞかねふまいへ引まれ
なり夫にてじゆでおは等の宿老相集り耶穌を死罪に行ねまらん為に讒言虚説を巧みゆ
掛せ共御返答をなし給はざるなりまはばじゆでおは等御主を侮りまれるため御顔に唾を
吐掛御両眼を包みまりて聖き容顔をおまれなり又かねふますくえゝ（かいふますも人の名）搦らめ
ゆなのゞ（ぴらとすも人の名）とすし館に（ぴらとすも人の名）引まれなり夜にてもおゆでい等ぜずすを害し
ゆさん為に虚説をゆ掛まれ共（ぴらとす）とは御科ましまさぬ事を見又彼御方ハ忍ろですの
進退なれがりれや（地名）人ふくさまいと聞うるれバ忍ろです（如徳亜の王の名）へ渡しまれなり忍ろ
でまハ耶穌を下げ賤めまり侮りゆさんため白き衣裳を着せまれ又（ぴらとす）へ曳のせ
まれなり其時じゆでい等（ぴらとす）といし前にて耶穌を弥種々の虚説を以訴へまはども
御返辞なるれバ（ぴらとす）とは是を驚きおゆでおは等耶穌を悪みまり讒訴まれと心得
免しゆ度思ましまは共じゆでおは等ハ弥大音をあげてくるす（十字架也）に掛られよくと
叫ぶに依て其憤りを宥めんが為に兵卒共に下知して耶穌をお擲させまれ之

此玄義に付観ぬ慈き條々

第一　じゆでおは等御主を召捕御頭小縄を掛け引まれ道まゞのゞ横々罵詈誹謗し
尊き御鬢髪をかなぐり悪口雑言をゆ掛先あんなれし許に引まりて傍若無人
なるか奴原さん人進み出耶穌の御顔をおまはせバ美麗なる御容顔ハ如何ましべきや

と観じを為給へ。其時佛主ハいつたも佛乗轉に佛道会なされ猶も打奉敬ひ旅て八今一方を也向け給ちんとし佛覚悟あらん佛諒りと佛堪忍し程を観念をも給へ。みんなく体より又かゐふすく諧へ給りて諸くの天神諸くの聖人尊重崇敬ひ歓喜踊躍ひやる。聖き佛顔を唾を吐掛奉り其夜の月醒しに佛をさる布の切を以佛両眼を面覆ひをりて御顔をおそれ有拍を観念ひられ給へ。然して其夜も明られバ世尊ハいつもの如くに佛堂へ出座ひまより又ものでず八耶輸を蔑にいつ給へ。ぴつとも佛ひまより我等ハ気を相似りをりてたゞ猶壮人の為に定りたれ白さ衣裳を着せをられ給へ。其後ろでずより我等ハ賤められ給へ。と事を堪忍を為さ道を習ひをれ給へ。とをいう世をもとバぴつとも打捐いう世とも知をれなりぶでおゐる男み妖び耶輸の佛衣裳を剥取をり石の柱に搦め付打擲いう世とも痕数りともなく腫上より杖数重なる程佛皮肉も破をれ為て佛全身赤の血汐より深み流ふ如くなりをる。バ個程若干の佛疵なるも共取別佛骨ハ猶深く痛み給へん佛有様を観ーをれ給へ。嗚呼叔も情も知り抛傷若無人の奴原うな昔の佛教へり科人も呵責を為さ時杖数四十のよを越をぐうぐバとし戒めを給へ。ぴつとも事之かるゞの故にさんぱら四十のよに打擲いつよ為て八皮肉破をて溺くよ血流ふ為へ八為とも打擲せいを給へどもぴつとも例に随ふ一方に二十九ゝ教のよを又給へバとりく猛もよ憲法をも情をも知らぬ悪愚放逸なる武士ゆゑでおを等佛称在さぬ



佛をぜずをを打擲いつ杖数四十に余りたり叔もねゝ衰とを罵めう事うな杖数四十のよに為うざる事ハ其科人を労りて死なざる為ゝ事なれに佛ぜずをを佛堪忍ひ給へバ佛全身ハ如何をバべきや況佛ある限をを見をうん人ハ事でも悲みゝ涙に咽ぶまでさや又打擲ひ給へバ羅馬の住人なる程ゝ者ハ仮令重罪ありとも雖此成敗を免をさる事究めありに天地廣大ゝ御威光を見知り奉らをさる天神佛陀我ゝさや如何に佛主個程厳き佛痛みを請給ふ事ハ我等を深く佛大切ふ思召を證ゝなり又個程の佛苦痛ゝ基ハ我等が科なるバ佛痛みゝ救よりも佛身を背き奉事ハ猶多ゝと奉へ奉事より誠に佛科まゝまさゝ佛身個程の佛苦みを凌さ為ゝ罪業深き我等ハ絶我身を責給ふゝの院行を為ゝ思ふハ宜に耻ゝき事に非ずや又個程の佛苦痛に逐ひながらも呼び給ふ事もなく佛身を奉給ふ事もなく佛恩忍の深き事も大なりと観を為ゝ兵卒共ハ新をを入替愛りて八疲を佛主ハ只佛そを強く持給をんと観ーをれ給へ。

第ハ悪人ハ呵責ーをりて石ゝ柱より解免ーををバ佛全躰ハ佛血を流ゝ給ふく佛力も弱り佛ほゝ元も定り給ざる為へ佛寒天に久ゝく佛裸躰に為ゝ打れバ凍へ給ふ為さ佛有様を見をりなのゝく哀をゝを催ひ人もなく佛教を為ゝ仕佛屑を隠さ仕ん為さんとの説言を聞掛け称ゝに嘲ゝり奉より

外なし、をもとゞ佛主たも哀も成佛姿にて投捨ら新佛衣を取集め終ひ兵士共の前に着し給ふ
佛諫りを觀念せ次第
第二番こゝも佛主を打擲しまりに乱事ハ慳貪なるふとゆでたを等に彼佛姿を見せ憤を
出させん為なりと聞くより急ぎば佛主のまの流し給ふ佛血の佛功徳に飽り事切も毋ふいたに
石段に掛しき便さ心を持悪僻に西鶴されて居給へども争ふ退悪修善の心無衆
る為や却も忍ろしさ天主の佛悪法うな人るし科を受掛り給ふ佛主を個程と
殿く罵し給へバ極罪人なるが我等がよの佛礼明ぞあらんやとて
打らしよ
いうよるさ佛母もんさまりや佛大切し佛主せずますをどゆであるを哀ふとゞが罷ら引
卒しきり憤りに任せ裏く苦めをふんと為に佛方をづく懲へます絶間なき佛衣をば
剥取石し柱よ裏くかゝめ打擲さしきり佛全神に諂佛血深ふれバ其時の佛方し
深さ佛欲さし佛痛みに翻し奉りがふさ充満十遍天にをゝ一遍を捧げ奉る又
聖さ佛子個程の打擲を受給ふ内よ時さ給ふ事もなく佛憑怨の佛鏡を見せ給へバ
我等も又天まより難儀に逢せ給ふんと時ハ是幸の代りにしてやん色孔のふて不退の苦
患を遁し給ひ又彼難儀の佛救謝さしてて天堂ふおゐて果しなく快樂を与へ給ふんとの
佛徳めありと分別さして思忍をふへ給ふ様に佛取合せを祈み奉り奉しまり
佛大切深くをゝ耶蘇一切人間の科故に遠さ給ふ呵責し品く多さ程ふ我等を思召



佛大切し程を顕し給ふ證據なれバ個程の佛恩の佛礼を申上奉る為に元窓に及びまうざるよ
依て諸天神を頼み尊重禮拜し給へと希ひ奉る教同しく我等が色身の邪あれ樂しみ少く
佛全身打裂き給へバ自今以後邪樂に陥らぬふに後悔の流行をいさしき色身を節ふ為さ
ふめし強さ心をふへ給へあめん

第三番に佛悲しみすてりよハ佛主耶蘇基利斯督佛頭に茨の冠を押込と

然まぼ兵卒共弥沛主を侮り苦しめまゐらん為に沛衣を脱ゑせまり赤き衣裳の古きを
召させ漢し冠を沛頭に押込み右し沛手にハ竹を持せまりて沛前に畏りじゆでいし
帝王に沛礼をなし奉れといふて沛顔をあ唾を吐掛沛手に持せまれ竹を以沛頭
をあまれなりぬらとまハぜずすを寄しまれ屈き謂まなるき事を知らまじゆ
でおまを等に哀まを催させんためよ赤き衣裳と漢し冠を召させなのゝ萬民の
前に引出しまり彼人を見よといままたりされ共じゆでおまを等硬き心かしも和ら
ざるものなり

けみまてりよこ付観まを屈き條々

第一　沛頭に荊棘の輪を冠り給ふ時し哀まなる沛光景を明察せんと思まじ
前之沛姿の美麗にませし事を思惟いたし屈し　一切人間に勝まて美麗にませし御行粧
沛弟子達に對し給ふて沛諫り敵對中悪黨等にハ沛柔輭にまし謙り者にハ沛親く
誠に高下の差別なく萬民に沛憐を垂まし給ふて高き賤きも崇敬しまりたまと観まを屈し
又ぬらとまし錯にて種々の沛苦痛に依て見苦く表へ給ふ沛光景を倩観察いたべし
先侮まらん為穢またる赤き衣裳を召させ王位に尚ぬ勞といふて沛手にハ竹を持せ
中沛頭にハ尖なる漢の冠を着せられ給ひ沛顔上ハ唾に汚まれ給ふなり又沛頭ゟ流がるゝ
沛血に染み給へバ見知りまらざる程に変り果給ふ之又沛手を搦められ給へバ流まれ給ふ
沛血を拭ひ給ふ事も叶ひ給ふ日月も及び難き涼しき沛両眼も沛血し雨に曇り給ふん

事を観じ奉れば尊し御心ハ御苦しみし利益にて貴まれ給ひ御礼を請給ふべきをそれなく御弟子達
よりハ捨られ給ひ悪人よりハ嘲哢誹謗し恐ろですハ狂人のごとく扱ひ申せし事扱又茨の冠りし
御苦みハいかほどなりしやと観念いたし個程の御苦痛を今試んと思ハば小さき梳流を
給ふ哉ハ尖なる物を頭にさし障て見よ絶難きと思ハばまして況や鋭き荊棘の鬣を御頭
鉢迄押込され給ふ時の御痛み救ふし御苦みしまに如何程の御難儀にてありけるやこれ
勝れたる御堪忍と御謙りし御善を亀鑑に倣へ申されしくごりありくす名人といふ大将ハ
王位を譲まもしかども金玉之寶冠を除さて茨の冠を戴られて帝王のまし帝王にて
ありし御主耶穌基利斯督茨の冠を着し給ふへハ金玉之宝冠ハ我に能ひぬといいまゐらり
いのちの御主耶穌基利斯督いのちなれば御事なれバ個程をいハゞ嘲り若しめられ給ふぞ是則
我等が科故なれバ他人の大切なく人し哀れを知らざる者ハ御頭を貫さ奉れ茨に思案
らば又實もなき高慢の花麗なれば衣裳ハ御身を侮り着せ奉りたる衣裳之名聞の
心を以て慈悲をいたしおよそ申者し亦他をなびく人へハ是御身を侮り奉らん為にいうに
ドゆでいはし帝王に御礼をなす奉れと申せし者に不同もならずや
第二 兵士ども悉く御身を罵詈誹謗に苦め奉りぬらとすハどゆでおもなるが憤りをしめ
さんぜしめんが為に御首に鉄鎖りを巻け申しつ押し着し給ふ赤き衣裳をあげ
を付奉されバ苛烈を給ふ御衣服を御身に茨し棘を押込給ふ哀れなる御姿を錦の
大庭に群集したれどもゆであはれなるよ見給ふ人へを見てまれよと有られども哀れを催さず

知らず十字架に掛らるるよりくしく呼ぶとのたまひ如此しあり我等が作れる罪にのぐまや又喧嘩口論をし人を誹り誣名をいふ事皆是十字架よ掛るもとと叫ぶ声なりと思ふべき所以を退け善に勧まをぢ悪き勧めさ勧も恐ろしさ天主しい所憲法うな往昔八人間の科故に八人間をこそ亡しめたその證跡数多見へたるが今八我等が科しに代りよ君公を四罰しいたまへる事なり

第二に此人をほろぼさまよとくしく観念を汲給を頼母しき心を起しぐるしく其故八ぬ〳〵ともそう人彼衆と成給ふ所以を聞さる程の人八聖さ給ふ耶蘇の彼所姿を天主又しい所用よ掛るべき科を取拉さうう所怨を初ぢぬふぐるしくと思へかるが故よ行住座卧今の事を観念つくしたじよしい時もし難後辛労の時もいのに所憐の源天主又所ふ耶蘇の衆ともな教給次第を見給へと所辛苦故に成給ふ所有様を所給へと頼みまをしぐるしく又所ふまをずすさりしと所ふを所大切よ思召以天主又ふ衆まをの所給ふ所姿を見せまをくせらるまと衆生悪人しよをいまみ給ふまよに勧み給へとやよをりし所母聖瑪利要にも信心を汲てたに託をまをのおとよを持ぐまをれぐるしく

おろしよ

いのしい所母をんさまりやしどぬでおを等が恐しくまをずすれ所怨を押返さまりて所両眼八所血ふ雫り給ふ所姿と成給ふ時所心よ愛へ給ひしい所痛みに勝しがきみちく十遍天よまします一遍をしびをれ又天堂ふおいく所ふとも所ふまをずすと共う衆福の



寶冠を戴きまをらん為に世を厭ひ誉まをしい代りに八恥辱を悦び茨の冠を所ふまをずすと共う冠りまをれと思ふ心地して難後辛労を凌く堪忍れ得心を与へ給ふまよまよ頼み給へ

諸くれ天神茶敬礼拝申をるく所ふを我等が罪科よ依て様くに罵詈せられ苦められさく思召給ふ所内證よ所礼をなしまをれ教所ふに茨しい冠を勧へるハ我等が高慢なれバ自今以後謙り誠に浅間敷様さまを持なぐる諸善諸徳が我等が安居にて五代所ふを今迄背さまりる科を見給りて今よりハ人しい嘲り又難後逼迫せん事を除かざる様よ計らわ給へあめん

第四番し所悲み〳〵玄義八所ふを耶蘇基利斯督掛り給ふべき十字架を擔けなひかようとりうし山ふ給ふ事

去程に御ふとすハ耶穌基利斯督を死罪に行ひ給ひ爲き御科少しも在ざるを見て免し給ふんと云ふまぼどゆでおき給ふ事を揚て耶穌を免しやさるに於てハ朝敵たれ爲しといふ事に依りて御ふとす此由を聞て帝王の御勘氣を蒙れべき事を恐れ耶穌を十字架に掛ける爲きに一度してどゆでおき等が屋の傍に渡しやされ給ふなり然れば兵卒共則赤き衣裳を脱せや常に召されし御衣を着せなりてからわりうこ山にて十字架に掛ける爲ふんこめ外人し盗人をも同しく十字架に掛んこめ相添ぜるざれんより引出しなれなり又十字架を擔けゐふに合力のこめに志もんしき祢をと云人を雇ひこり然れば御母をんたまりやを始めなり数多くし善女人耶穌を見故より慕い泣悲しみやさるなり

此玄義に付観せ爲き條々

第一御ふとすハせずすくし御科をさぬ事を知りなのゞら帝王の御勘氣を恐れ死罪に行ひなりしに依て天王の御勘氣を蒙れいんへるのし終りなるき苦患に墮落しこり如此理非をわけなのゞら世界の恐れに曳まて理を枉て科を犯し人にハ天王の御勘氣を御ふとし如くなるべしと思へかるの故に御ふと同罪に行ひるまじくためにお事に就て天王の御掟を本とし世界の糺明よりも形嚴しき御糺明を恐れなれ爲し福音經に見へこるゆく色身を殺しと注あにまを殺せ事を叶ひ給ふ人を恐れべきぶあにま色身共にいん爲るのし終りなるき苦患に墮落させ給ふ事ハ叶ひ給ふ御主を恐れなれと置ふ事を工夫せ爲し

第二性昔なりし爲にいぜあく薪を脊に負ひせこるゆく掛り給ふ爲き十字架をば

浄縁りと従ひ之を以着負給ふ浄通ぢ〻し帰難儀を観念ぢ〻し給ふれい備なき武士ぢ
ぜ〻ともし籠より町へ耶蘇を引出〻をもバ上下萬民裏き西口をヤ人に依りて八浄先ち立浄首
ぢ〻し個を出す数族もあり之浄改より急き給ふんさめよ巻くおをもばば十字架共よ倒も叫し
給ふん浄有様を観念ぢ〻し給ふ〻ぜるぎもんし浴中を武人ぢ〻し盗人ぢ共に引き給
浄苦〻みぢ〻に浄和尊を文めん浄有様いうぐをバ爺ぢやもバじめでおをも第十字架を
擔ひ給ふんさめよ浄次ぢ浄合力ぢ〻てぢ〻もん〻ぢ称をを雇ひろもども耶蘇を労りをり
てぢ〻志にあらず急さかりとりぢ〻ぢ〻ん為なりと観をを爺ぢ〻給をハじめ
でおをも第滅に倒〻なき責様をひみ出〻掛をれ爺ぢき十字架を浄多に着負ふせをりぢる
ものなり御為彼ぬぐ〻盗人ハ我と十字架を擔げ給ふれと経典よ見へべ唯是耶蘇ハ盗人共ぢも
大衆人にてをバとも為民に敵ぢ〻ん謀事なるべや様も量りをき浄縁りと浄想忍かな如何よ
耶蘇ハ昼夜悪人ぢ様ぐに苦〻めをり救手ぢ〻ぢ御と棘の冠り故に浄顔を休めぐ〻なれバ
通霄休み給ぶバてハ何ぢ〻浄力ふく十字架を擔げめふべきや様も浄合力ぢ〻されぢ〻もん
ぢ〻を称をハ果報なる人うなりのよせずぢ〻ん為なりと浄合力ぢ〻ぢ〻ん為ハ浄合せてとんよ浄合力ぢ〻べきと
思ひをも共能ぢ〻思案ぢ〻せば我ぢが科ハ擔げめふ十字架よりも科重く着負ふ甚をる
よりて甲斐なき思ひ計りぢ〻給をば浄をを頼ませをれ科を心めん為よ見ホぢ〻観念をぢ
ぢ〻ていの如も浄をとぢ〻たにからとりぢ〻ぢ〻ん為よ浄苦労を我心に浅さをれをふにがさを
与へ給へともをれ爺ぢ〻

第三淨母聖まりやも淨敎さし程を觀じ奉るべし淨大切し淨ふぜず十字架に掛られ給ふんさまに早かくもりうこし山へ登さ給ふとやつ石淨家敎の淨暇もしたため急さ出舍給ひて其有樣を淨德に語給へば淨ふぜずすま淨德を敎無士きうし物具共光見物しく號さ叫びて双罪人理りを繩波ん声をや給ひ道をぞつくり流し給ふ淨血無しう振拔を淨德ど淨ふ中如何をんべきやや其時三十二番し間淨丁寧を尽し給ひせら是し淨子に個程迄暴く尚りまりこせ先よりも悪うなる敎淨尊顏をも更に見分け給ふぼる程乃見苦しさに成り変り給ふを淨德ど給へば淨愁歎し程を誰れ量りまる爰こさ又個程打損ひられ給ふ淨全躰共ど二重さ十字架を脊負ひ給ひて蹉さ給ふやその淨姿を見給へば淨德すりハ如何程ん代りまうせ爰思召又仮令十字架を擔け給ふべ共淨敎さし余りに淨心中も淨痛みハ共に擔け給ふ程乃淨事なるべんと観念せべし同く耶蘇ハ淨大切に思召淨母の敎さ悲み給ふを淨德ど給へば淨心中如何まし爰きやや擔げ給ふ十字架共重さよりも猶重さ淨十被をし思ひなる敎爰しと観せべしいかる我哭魂かくもりうこし山ひし道をぞつくり淨血を墓ひまり犯罪よ落着中せし其子細を觸波ん大番を申給ひて敎さ悲み給ふ淨母と共ハ悲みまり淨涙に我涙添へまりて淨母の淨体をいつまる敎爰し

第四個程ん淨被を取かくもりうへ着さ給へば武士ども淨衣裳を剥取まりうまる敎なり又数多し受迄宮ふ如く淨十着とも脱うせをんさめ薄し冠りを取て淨頭



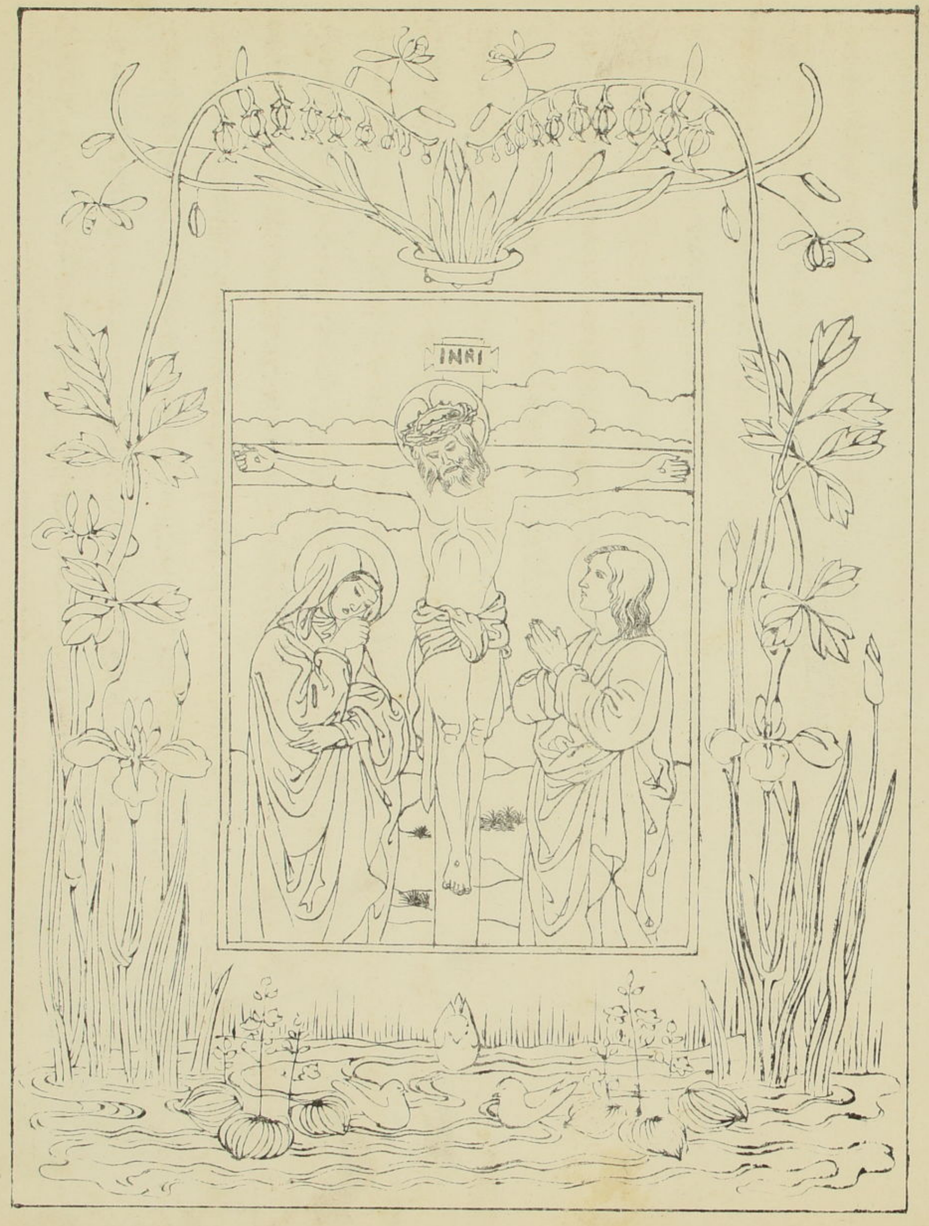
なまりてより又前し如くに押込みまるべ猶し淨頭小重さ十字架を同く淨敎乃血汐乾さ分さる淨衣をたも暴く剥取まる時御皮肉破まてとそつに夢りさまくべ車軸の淨血をなすし給ふを淨德ど給へばやと観念するぼ淨愁歎乃程をいつまますべきや

打ちしよ

いのよ淨母をんさまりや淨大切し淨ふぜず数くし淨苦しみし故に重さ十字架を擔げ給へば弥擔に淨血を流し淨力も疲をぬふにまりて淨足えもよろくと定り給ふべして爰く倒まふ給ひ情けなさ悪黨等暴く為りぬふを淨德ど給へば淨敎に辨しまりてがくさ充満十遍大丁寧を尽し一遍ん丁寧まる敎又我等ハ尊さ淨十字架をこそ淨ふと共に擔けまる敎べさ功力なしとつくも現在にてし難儀辛労を我等が為く十字架まりうと思ひ取て擔け届げぜずすし淨跡を慕ひまれよふに淨取合せをなすし給へ

いのに其露共耶蘇ふまるを擔げあひ武人の盜人を伴ひ給へば淨苦乃上に淨恥辱を又給ふ淨方に證拠礼なしまる敎又其重さ十字架を我等ぶ罪業共代りと為へかれバ現在我等に如何なる敎辛労をも凌うせ給へとまる敎あめん

第五番の淨悲し玄義ハ十字架に懸り死し給ふ事






御主耶穌基利斯督十字架を擔け給ひかゝりたりし山に着給へバ兵士共苦膽を交へたる酒を味れ
ませなり御裸になし十字架に掛なりしを又盗人の人を十字架に掛て御左右に并べる也然るに
往来れ者共ドゆでおを為頭領宿老ども御主を無理に悪口ひ給なり其時日輪ハ光を失ひ
あまたバ世界常闇に成り給なり御主ぜずすきりしと高聲に如何に父我霊魂を御手に渡し
なれと宣ひ御頭へを傾け御死去なさまたる之其時御堂に掛りたる戸帳ハ中に裂け大地
大さに震動して石ハ互に中りて碎け数多し善人復活らまたる給ものなり夫に或武士鎗にて
ぜずすきりしとし御脇を突なまぼ御血と水を流し給ふこされバドよふぜふとにこてむすハ
御死骸を十字架より卸しなられ白布ハ巻なりて近所し森の中に新さ石棺ありしに
納め申されられバドゆでおを為御棺し上に申して数多し番兵を附置給ものこ

此玄義に付而観をべき條々

第一十字架に打付らまた給ふ時し御痛みし程を能く観じなれべしかゝりたりし
山に着き給へバ御裸になしなり御全身暴けなく打破らまたのひて左ひをくるすし上に
押伏せなり御手足を延させ申して宛行完をもむなり然して先右し御手を暴なき
鉄釘にて打付なまぼ御筋骨もまぐみ給ゐて御たりし御手ゐし御足もあらくがひ
操る穴に届き給ふるに縄を付御節ひも離まよと暴く引延べ打付なまぼ御手
足より流れ出で給ふ御血ハ滅に車軸し如くなり武士ども十字架を押立兼而ゟ
堀る岩し穴にたること落し入まられバ御全躰ハ動き給ゐて御手足し御疵廣く成

給ひん事を觀しなれ給ひし
第八御母聖瑪利亞十字架に立添給ひて歎きなふ御心中の程を觀察いたしなれ給ひし御歡喜を
以て御誕生なされ天神ハ尊重崇敬を申され三人の帝王ハ捧物をいたし圍繞渇仰申され
ける御子ゞゆでおを等々嘲弄誹謗せられ給いて暴く痛めらるゝなり又聖き御乳房を含め
あらせらるゝし御口にハ苦膽を味ひらせなれなり聖き御腕を休めあらせらるゝし御頭べ
にハ荊棘の輪を貫ハさ給ひ十字架の上に頂垂るゝなり聖き志めれん歡喜躍躍して
抱き申されし御方ハ暴き鉄釘にて打付らるゝなり是等の御有根を御覧し給ひて御愁
歎いのむかりなさんやさるゝバ善人達耶穌基利斯督の凌き給ふ御苦労の觀察を以共に痛み
申さるゝ事なるゝバ或善女人ハ御ばつしよし觀念に不斷貪し其御痛みを深く覚へ給ふ
依て御ばつしよし御道具を肝に鮮に彫付ける如くなるを今に至れと萬民拜みなれなり
されバ童身さんこまりやハ語ゝ乃善男子善女人に超て御大切に思召ひ御母にてましませバ
十字架に立添給いて御子ぜずすゝ哀るゝなれ御有様を御覧じてハまとの御ばつしよし
めく味ひ給ふ苦膽までも皆悉く御心に覚へ給いて荊棘し輪ハ御頭べに鉄釘ハ御手足
をば共に十字架に打付らるゝ給ふ御事なれ給ひし嗚呼扨も傍若無人し奴原ゝなる一度
御両人を苦めなれ事ハ誠に利釼にて御心を貫ゝる給ふべしとしめんし語を今
こそ御身に逐給ふなり又ぜずすハ九ヶ月し間孕り給ふ御母ハ御涙に咽び給ひ彼し
御心ハ共に十字架に掛りぬふと知り給へバ是を御身し御痛みよりも猶御詮方なく思召

ゐさと観念せられ給へ―

第二には汚主悪すさまじと十字架しよにて御ゐ七つの汚言葉を観下し奉れ給へ―先世の中れ習ひ小も親る乃中又知音親類の中にも最期乃遺言ハ総も難さものなりもれバ汚智慧測り在さぬ親のよし汚親親―さ中の猶親―さ汚方汚死去し御十字架乃上ふて遺―うるふセツの汚言葉を賜ふ汚事なれバ汚ゐと成一切の切支丹宗ぜ汚遺言を忘却りさゝび観下まり勧善懲悪しるめよ亀鑑を備へ給へ事専一なり先さ番の汚詞にハ御身を十字架に掛まりうる者共―よをそ天主父小頼み給ひ彼等ハ今なり事を免へきれバ免し給へと頼み給ふなりさ汚言葉を以てハ我等が怨敵をも大切小思ひ其為にハ汚主汚御ゐ―と観をべ―

小番にハうるすに掛りうるか汚右し盗人乃よ汚主汚國ゐ到り給へん時我を思召出し給へと申上うるまバ其ゐと死せずす實よりふなり汝今日我と共小天堂へ参るべ―と宣ふこ彼盗人ハ科人なが汚ゐませずすさまじ―とをおみまりうる故よ其科を汚赦免なされ天堂へ―汚約束なし給ふ乃を観―我等もいの程ど罪業深さ身なり共汚ぱつ―よし汚切力を以て汚救―を参れ給へ―と頼母敷心を持給へ―同くいのなる大罪あり他人なりとい乃ども憐をなし―助くべさ道を習ひをまを

三番ハ汚母聖マリヤ乃汚ゐ―中に取別汚大切小思召ハをんさまりやにいふ女人汚ゐこみを見うまよよと宣ひ又汚弟子みにハ汚乃母ハ是なりとしし汚言葉を遺―



給ひをんさまりやを汚母と崇めさせ給ふなり　目足を以て我等も汚母聖マリヤを弥信仰いうしお事し付て頼みを参れ給へ―と仰せ被―給ひ又親と成人ま孝行をべき事を教へ給ふとめなり　四番ハ汚ゐまセずすに向ひまりいうま我親耶蘇我を助け給うん為乃償高き汚功徳を以憐み給へ放―給ふ汚ゐ汚力を添給へとの上ゑ給へ―

五番にハ喉乾き給ふと宣ひとき乃事なれバ我等も他人ま助うる為ゑ道を専ら思召ハ深き汚意みを顕―給ふ事なり

六番に汚喉乾き給ふと宣ひとき乃ゑ事専一なりと知ゐせをまふと思惟を廻―じ乃でおを等酢を味ひ給ひて成就―うりと宣ひこ汚言葉小てハ汚死去し除近天まで天に祝ひ給ふ乃―ぬして汚最期迄汚苦労を凌さ給ふ辛抱の善を顕―給ふなり我等も汚提を保ち天まより来へ給ふ難儀辛労を強さ堪忍を以て凌がん事を教へ給ふなり

七番ハ汚詞にハ高声小いの小父我霊魂を汚ゐ―を教と宣ひて汚頭べを傾け汚ゐまセずすに汚ゐ霊魂を渡―給ふなり我等も存生の程ハ萬事を天まに任せまり最期にハ頼母敷心を以てゐ―ゐまにハいのに汚ゐまを我霊魂を捧げを参れ請取給へと謹て頼みを参れ給へ―をれバ汚ゐまをも汚ゐまをば汚血と水流を給ふなり是弥一切人間に甚さ深さ汚心中ハ汚大切を習ひ給ふをんさまりやなり此聖さ汚一批ハ世界に充満―うる誘惑難儀等を遁をんさまの霊魂の擁地いのに入こいぞと一心不乱にまりしよを勤めんさめよ聖さ汚一批ゐ引篭りまりて我等に

對し給ふて其深無量乃至大切を觀じ奉敬白
第四切支丹なる教人ハ童身さんさまりやと共ハよ十字架に立添まり給主ぜすさりゝゝと十字
架乃よより教へ給ふ勝事ども善德を學びをさ事專要なり先生方裸にはまし
を以我等小會ゝ善を教へ給ふなり茨乃冠ハ謙し德を導さ給へバ謙りゝ善を專ら
保ん爲ゝ苦體を味ひ給ふを以てハ飲食の中庸を教へ給ふ爲ゝ萬民を抱さ給
うんさめにハ泄ふをもうをく玉ふを以て他人ゝ大切を教へ給ふ之泄脇の疵ハ泄方の泄ゝ大
切よ燃立せ給うん爲なり落入せ給ねて閉給ふ泄玄眼ハ益なのさ邪見を廢さ給ねく
眼北嗜を教へ給ふと觀をべゝ生十字架ゝ頂上ハ諸善第一ゝ泄大切十字架ゝ基ハ諸善の礎
ゝ給ふを聖さ泄耳にハ讒言屢說を堪忍を爲ゝと教へ給ふなり拳竟泄善心殘る
なの教謙りゝ善泄右ゝ方ハ慕ひ從ふゝ善泄左りハ堪忍之善なり六四善を揭ぐさ
ふなりいのよ天を又人爲ゝ科北償ひとしてゝ泄ふを世界にゝゝあらせ給ふ如く又我等ハ
泄捉に從ひをふぶれ科ゝ代りにせずすゝ勝を給ふ泄從ひを泄方ふ捧げをれ高
慢ゝ代りに謙りを捧け嗔恚ゝ代りにハせずすゝ泄柔輭を嫉妬の代りにハ一切人間ゝ



對ゝ給ふ個程ゝ泄大切を捧げ給ふ又貪欲北代りにハ數限りなき泄恩を施ゝ給ふ瞋ハ大ゝ
泄心を捧げ給ふ邪樂北科北償ひにハ淺さ給ふ泄ぼつよ北救ゝ北泄苦勞を捧げ給ふ
都て我等が未世にて更ゞさ科の償ひとぷるのゝとりよゝ爲なる泄ぼつよゝ
泄苦痛を捧げ給ふゝ再び泄ぼつよゝ肉緣と成科を犯をでお祓よがゝさまへと祈み
奉敬白ゝ

おらゝよ

童身聖瑪利亞泄ゐぜすさりゝと十字架を擔け給ねてかゝるりうゝ山より賢さまへバ
泄掛ふ乾さ給ふ泄衣を萬民の前に剝取をり暴さ欽釘にて十字架に打付ゝ人の盜人の
中に立置をりて泄咽乾さ給へバ苦膽を合せ給ふ酒を味ふせをり種ゝ乃讒言を申掛
ふ樣ゝの呵責ハを以て狼籍ゝ哀ふを留めざる泄姿を泄從ゝ給ふ時の泄悲みに對ゝ
をりてがゝさみちゝ十遍天にをゐて一遍中よをおゝくるすの下に立添給ふて泄御
成給ふ深さ泄愁數なるゝゝ基ハ我等が罪業なるゝバ泄功力に及びを
らざるといへども其泄救免の爲に泄供いなひと觀ゝ奉敬なり犯ゝる罪をいづも悔悲ゝみ
再び犯ざるあとゝゝ心をゑへ給ふ掟に泄背取合せを勸みをべ
いのに泄哀憐深させずす敎への泄苦患を凌さ給ふよハ十字架よ立添給ふ泄母の泄愁
歎を見給ふ事ハ猶泄苦ゝとく成給ふ爲さなり又我等を思召以泄大切ゝ程を見知らせ
給ふん爲よ泄命を惜み給ふゝ泄死去なされ甚深成泄大切の泄礼をたゝ奉敬同く

右ゝ御大切を報しまいらん為には一世ゝ間御奉公に届き仕合に依て命を輕んじ捧げまゐらん為萬事に超て御身を御大切に存じ奉れべき御大切強き心を共へ給へあめん

栄福のみまてりよゝ付て心得置き事

栄福此みまてりよと申事は御主耶穌基利斯督同く御母聖瑪利亜請給ふ栄福を観じ奉れに依てなり此玄義の観念は莫太の歓喜と後生し頼母敷心を催ほなりさんぺとろきんぱろ彼御両人宣ふ痛みを更給ふさりしとく共に痛み奉れ人は御穢生ありて栄福を得給ふさりしとく共に歓び栄福を得奉れなりと然まば御悲みし玄義は御主せずすさりしと種々の御苦みと御母聖瑪利亜の御愁歎を観じ奉り共に悲み奉れなり此玄義には御主せずすさりしとく御母さんたまりや更ゐふ果しなき栄福を観じ奉れに於ては樂みを得又栄福を蒙れ置しと末頼母敷存じ奉れ置きなり

栄福の玄義五ヶ條之事

第壹番の栄福の玄義は御主せずすさりしと穢生り給ふ事

御主ぜずすさりしと御死去なきるくと共に御色身ハ十字架に遺り御灵魂ハりんぼへ下り給いて往昔より其頃まで御扶手し御出世を待居られる救荒し善人達を見舞給いて大に歓せ給ふなりりんぼ口ハ心みにかく未明まで在して夫々彼善人達之内を召連給いてえし御色身に蘇生り給ひ石棺開けず出給ひ最初ハ御大切の御母聖まりやに見舞ゆふこ夫々きんたまりやまざれな又御弟子達に面見へ給いて其日ハ夜彼こゝて面見へ給ふ事四又六度し事なり其以後御蘇生し玄義を出でまに更させ給ふん為に御上天し日迄度々面見へ給ふなり

此玄義に付観念をべき條々し事

第一御ばつしよし御功徳の賜ものを速に苦民に見せ給いて施し度思召御内證なれバ死し給ふと共に聖き御あにま天主御子の御尊弥と共に開闢より其頃迄死し給ふ善人達の籠り居給ふりんぼへ下り給いて冥暗なる所を光明燿燿となし給ふもの二善人達数千年し間御扶手し御出世を願ひ申されしに御扶手を直拝し奉り数年の願を遂申されたる時し歓喜踊躍ハいのぐあらんや御扶手ぜずすを在る事なれバりんぼハ極樂の天堂なる所屋下と観せよ給ふまば又聖き御血し御功力救荒の灵魂へ通用し給ふと見給ふ時し御歓びいのぐを在る屋てさやき人し扶のりを何よりも御歓びと思召す御事なるまバ一同に救荒し灵魂を召上げ給ふ御歓び人智の裁断に及ぶべからず

第二御主し御灵魂主日の暁とりんぼふ在し夫々善人達の諸灵魂と救多々

天神をバ沸指くやへ連ゐひ大光明を放ち沸威勢を以石椎を開さゐゐ沸蓮生あり〳〵事を
観念ゐゐ以爾〳〵石椎開けざる事ハ精浄潔白なる歟不犯の沸身を其供に障碍なく出沸よ
沸奇特よ均〳〵さ又沸色真の沸飭りにハ如何なる歟明珠も及ざる価高ゐめりの沸疵を殘〳〵
殘ゐなり是我等が怨敵天狗と世界に勝ゐ沸を天主又見せ給ふ時のまゐ柄の證〳〵を天主又見せ給ふ
せらゐ又我等が科を以沸怒を招さゐ〳〵ん時宥めゐ給ふん為なりと観じ奉歟べ〳〵
第二沸蓮生ありて救ふのひんじよすと善人達と共よ沸母聖まりやへ面見へゐひて歓ゐせ
給ふせられゐる事を思案以爾〳〵ゐ玉ハば沸母沸穏歎を以て必得〳〵空珠と思召沸まゐの
沸死骸を沸椎よ納め置ゐひて沸帰宅なさゐれ奥深く引籠り悲涙に咽ひ給へ共主日の
未明よハ沸蓮生を頼母敷待給ゐゐまなに日輪よりも光明を発〳〵面見へ給ひて沸悲みの
雲よ隠と居給ゐを耀〳〵給ゐよりいのに沸母三日前よハ哀またの歟沸姿よ似人の渡人の
中に十字架よ掛り給ひてゝ赤の裸よ沸死去なさゐる旅を見給ふが今ハ光明燿燿さゐる
沸形に蘇生り給ひて天神聖人達に囲繞渦仔せられひ歓舞音楽を奏〳〵さゐく
事を沸境ド給ふ時の沸歓びをゝのなかゝその丸言古比喩に述べ奉事叶よ爾さや
誠に沸愁歎深く在せ〳〵程今ハ沸歓楽に極まり給ふなりゐ沸まだずさまり〳〵と給て
沸供し善男子善女人何をも歓なせ給ふ為ん為沸母を見せ給ひ童貞の身にて世界
の沸扶をを誕生の歟爾〳〵と先知者の前表ありゐる景敷いみじき女人ハ是也ゐと給て
一切人為〳〵悪の根元なりゐる如くゝ聖さ女人ハ助りを歎べき為の沸取合せまゝと



宣へバ善人達皆一同小茶敬ゆさ礼謹で沸礼あ歎べき事を観〳て我等も又信心を以天ノ
主ハ一遍ゞ〳さみちゝ〳十遍拝ぶをりそなに況ひあじよをゆよ爾〳〵
ならゝよ
いのに尊き童身聖瑪利亜沸ゐまなせず〳十字架のよに崇敬ゐゐまなに
美〳〵光り輝さ給ふ沸色身よ蘇生り給ふ時乃沸悦いのをバ歎べきや沸愁
歎深く在〳た歟程沸蘇生乃沸歓統基深な歟爾〳〵さなりゆ沸歓びに勝〳〵が
みちゝ〳十遍天ゆま〳〵ま又一遍をゝ爾奉歎又科よ依て失ひゐ歟我等ゞ冥魂乃命
なるゞゞをを後悔〳〵遍より求め奉歎ゆまよに沸恵合せを頼み奉歎
いのに沸主ぜず沸死去なをゝ歎〳〵と共よりんぼへ〳り給ひ救千年沸出世を待〳さ
まう歟善人の冥魂ハ歓喜踊躍させ給ひ量りなき沸慈悲のよより召よげくゐふ
沸礼をなし奉歎みふるゞとりよ宰居いる又ハ人数都ゐ〳一切切支丹のあにまし苦患を通〳給へ自今以後科を犯さゞ善行をなし
終りの乱明に精浄の色身よ蘇活を得て永劫不退の栄福の楽を受奉歎ゆよ慈
悲を垂ま給へと頼み奉歎めん

第八番の栄福の玄義ハ沸まなせずすさり〳〵ぜ蘇生り給ひてよりの十日間よ大さ
なる歟沸威光を以て沸上天〳〵給ふ事

ぜずすゝ御蘇生より四十日目に御弟子達に面見へ給ひて宣ふハ程なく聖神各の上に來光なるべきを待べし世界において何國においても聖教を弘むべしと仰せ渡し給ひて童身さんたまりやと御弟子達の前にりんぼう召上げ給ふ善人達を召供し巍々堂々として御歡喜を以おりべとし山より御上天なされ天主父之御右に侍り給ふなり然ぞは御母さんさまりや同く御弟子達御上天し御光景を弥み居給ふに二体しあんじよ見へ來り給いて何とて天を仰ぎ居給ふぞ耶穌ハ御上天なされたる如く御威光を以又來り給ふべしと宣へバ各大歡喜にてぜ散されんへ帰り給ふなり

此玄義に付觀念せしめ給ふ條々

第一御上天なされたる高大の御威勢御歡喜を觀ぜべし御主御在世し間及びなき謙り給ふ中にも御ばつしよし時悪黨等より様々誹謗せられ虚言を負ひ給ひ御冠りにハ荊棘乃輪を冠り給ひ盗人を伴ひ給ひて十字架に掛り給ふ御報謝として今ハ数萬の天神聖人を召連九重の天神管絃舞樂を奏し迎ひ取申され天主父し御右し高上し御位に侍り給ふを觀念いたし奉し

第二御主御上天なさるゝを以て我等を恐れぬふと思ふ奉るのゝ天主父の御おのゝおん取合せを以て御扶けし道を整へ給ふん為なりと觀念せべし其故ハ人間ハ目ゝ科を以て御怒りを招き奉事ハ喩へバ猛火ハ薪を加ふ事が如くなれバ天主父の御おのゝ御取合せをなし給ふべんバ極罪の我等ハ何と成果べきや天主父の焔を消し給ふん為に御血の御功徳ゆゑし御疵を捧げ給いて我等が科の御赦免を乞ひ給ふ奉し

第三御上天なされしるハ御母をんこまりやし為にハ御憂ひし顕目なりと見へ分れ共ハ尊与其後にゆゑ結句御歡ひなりと觀ぜべし其故ハ御大切し御子ぜずす個程の御威勢を以御上天なさるゝを見給ふ時ハ是一切人間の御取合せし為なりと知召せば不浅御歡喜なる事べし御母も御供なされたく思召べきと陸孤子に均しき御弟子達の御守護として遣されたるゝ故ハ天主の御内儀ハ住せ給ふ之又我等し御母の御歡ひハ尉し天に在ハ一遍がらさみちく十遍を捧げ是ハ記ぜおらしよを申上奉し

おらしよ

いのに童身をもんこまりや御子ゆゑずす御嶺生より四十日目に御上天なさるゝを拝み給ふ時のおん歓ひに對しがらさみちく十遍天にたひ一遍捧げ奉る又御上天の時天を仰ぎ給ひて御弟子達と共に御主を見送り奉らせ給ふ如く我等も個程の御歓喜御威勢を観し奉り濁れる世の墓なるさ栄花を厭ひ天に仰ぎ御上天し御恋を慕ひ奉る様に導きぬへ

いのに御主御利運を開き給ひて御上天なされ天主父し御右に侍り給ふ事を観念いたし謹んで崇敬し奉る又ありし御疵を常し給ひて御上天なされし事ハ我等悪人の上を不断御取合せをなし給ふ為なれバ諸悪を以招き奉る天主父の御怒を止め給ふ様に御疵を現れ御取合をなし給へと頼み奉る事あめん

第三番の栄福の玄義ハ聖ぴりとちんと御弟子達の上に天降り給ふ事

御主の御祠の如く御上天の日より御母聖瑪利亞を始めまゐり御弟子達せるざれんし中に一所に
集りて御おしよをなされたぞりとをんとし御來光を待給ふに俄に大風吹來れ如く舌乃形
火の色にして其人宛之上に居たり給ふなり御弟子達ハ其時を知り給はざる法國の言葉を自
由に出ひ町小路に立出てをしも憚りなく勇猛精進し御心を以聖教の御法を說き述べ
給へバ其頃せるざれんに聲集しけれ諸國し人々は不思議を見分傳兼して驚き即日に
救千人切支丹に成よかり

此玄義に付觀すべき條々

第一 御母をんこまりやと御弟子達をぞりとをんとを請給ふんが爲御上天し日々不可
おらしよなされたる事なり我等もをぞりとをんとしがらきと何事し御慈悲をなり共
交事なんと思はば先深き願ひと信心しおしよなくんバ蒙り事れ事難のるべきに依て
他生一編におしよを勤めん事專ら也と觀ぜべし

第二 御上天ありて聖神を出し給ふ天主の量り在さぬ御慈悲御大切し事を添く
ユ丈をべし交にまりの喩をいふに乳飲子に乳房を含む事母ハ一方の乳房を含て
より今一方を其ふ事が如く天主ぞりよを天降らせられ御在世し間御教訓の
乳房を含ませ給ひ我等があにまし餓事を御養育なきれ又御上天以後ハす
ぞりとをんとを天降し來らせられ其魂の力強り諸善の勤め皆聖神のがらさ
なくて不叶儀なりと觀じ事れ爲し

第二次の迫小顕まし給ふ事ハ浄玄寺の達共まし浄大切を始として他人〳〵大切よ総じて又聖き
浄火の光を以國土の闇を照し給ふ為なり然まば天まと地人〳〵大切に捨ら給我ボがを
しみを以燃立ちあにまの闇りを明りめ給ふ為に一心
采乱におじまをり一章数珠さき事肝要なりと云
弘めさせ給ふ為に國土の言葉を知りせ給ふ
なの歌言葉の種のなまをバまを控んために聖神のがらをもひき数珠さき
第四浄来光ありて浄玄の達に勇猛の心を
臆病を捨へせずすを見捨りされ為ころハ拘く後人の下女の言葉をさへ恐まて
陳せられ其後にもどの如でおす等よ恐まて一家に閉竜り門戸を閉て居給ひる
をぴりとさんとくがらやを清給ひてよりハ人前を憚のうぶ萬民に出向ひどのりて
を等が悪行を諫め世ずすきりしこと分に帰扶をたのもと談じ給ふ如此浄事
なまばちん為ころ浄をん人しき法法にて一日よこの人程切支丹よなりうる也是のこ
なのなび聖教の浄弘めしためよ浄玄の達浄在世の間種く浄苦労を凌さ給ひ法人
勇猛に浄命を捧け給ふ為めなりまより以来まをぴりとさんとくがらさを以老若男
女に不寄数許〳〵人気もですく城郭を堅固よ守ちん為に苦患の教材を顧みず
身命を捨たれる之然までも人に依てハ後の命を捨〳〵人にを恐まて天まを痛ど
きりてまをぴりとさんとくがらやを除さをおもあり或ハ切支丹成事を深く悟て



善行に怠数もあり給まば是等の後を思ハ量りていのよ雑役受難に遂共天まの浄奉公に留さ
をちん為におわじよに遠ざるのぶ浄玄をんさまりや浄玄の達の活取合せを以
聖神のがらやを我等があにまよ来り給ねて強き心を共へ給ふ為に付句浄玄をんたまりや聖神之浄来光を以て更給ふがらやを浄敵統く程を立まをべし
其故ハ浄善徳世に勝まて在せばをぴりとさんくさみちく十遍とよまして天まをバ一遍がらさみちく十遍
まり数ぺし

おらしよ

その尊さ数珠さんもちんさまりや浄玄天まりハ浄玄の達と共よぜるざれんま一列よ
集り打じよ三昧よして浄信心の涙と共よ明しく当来り給ふ報よ報みのふまよ十日同に為りて舌の形火の色にして浄玄の達の
まよ天降り給ひて数多の浄恩を施し給ひ中にも浄玄の達の舌の形火の色にして浄玄の達の
系くせ給へバ科なのうざる浄歓喜よ對しがらさ充満十遍天に至ハ一遍捧げ
なま数又もし一枠よ為て天物く住家と成う数珠数珠
神く浜住家とたり給ふ報よ報み給へ
いのに量りまよしまさぬぜずす浄玄天く浄活別まを惜みやされる浄玄の達浄歓
喜のをぴりとさんとををし給ふ浄玄に浄礼をなしまを数へ天まの浄大切よ総立せ

給ひん爲に火の色に顯見給ひ諸國の言葉を以御法を演舌し給ひん爲に八舌の形に來り給ふ
如く聖教を弘めしさるべく人々心言葉ハまこゝりとさらんとしがらさを以改め給ひ又天主と他人し
大切に燃立給へと勸め事勸あめん

第四番の御榮福の玄義ハ童身聖瑪利亞御灵魂御色身と共に御上天を
遂給ふ事なり

童身をんたまりや御大切し御子ぜずすきりしとて共に栄福を更給はん御定めし時節
到来しければ聖き最期に有合給はんため数萬の天神天降り給いて同じく御主ぜずすし
御上天し以後方々に行別れ給ふ御弟子達も其頃まで御存命ありたるハ御志の特を以
忽ち集り給ふなり猶又示さ御事ハ数多の善人の宣ふ如く御主ぜずすきりしとも
御母聖瑪利亞の御私宅に天降り給ふとなり然れば童身をんたまりや御弟子
達に御親しく御教化なされ御取合せ有べきとし御約束御暇乞なされ御あにまハ
ぜずすし御手に捧げ奉敬と宣ふて御死去なされられば天神音樂を奏し御あにまハ
ぜずすきりしと伴ひ給ひて天上栄福の高位に伝へ給ふなり聖き御色身ハ御弟子
達則深き御敬ひを以納め申されたりされば多くの日数を経ず御あにま天降り給
いて元し御死骸に御和合ありて数多くし天神を百倍し大御歓喜にハ御上天を遂
給ふなり

此玄義に付観ぶべき條々し事

第一　御母聖まりやし御死去ハ御歓ひ故にあらぶ只数年し間別れ給ふぜずす
流氣ぐ世変思召給ふに依てし御事なりと観ぶべしさんぽうろハぜずすの御大切
燃立三番目の天上あげられ給ふ時御説じ給ふ天上の量りなき見へたる事に
御望み催され色身を離れぜずすきりしとと居奉り我と宣ふなり又だびど
ぽろへさも手頁麻し清き水上を望むが如く我あにまハ御主天主に慕ひ奉敬と申上

浄土往生は諸聖人天神の浄大切に超ゆる浄歓聖まりや救ケ年の浄刹生の浄みぜずを
見るまでせず恩召ふる浄歓さ如何程の浄事なるんやと観ぐ事ぜずすし浄ばつよし浄
ぜずすし哀也成浄染を見ふるもん為に名さ浄ひて釈さ浄ふ盗人の中に十字架に掛
りふ浄ふを見浄いてし浄ハ高大し浄威光を以天主又し浄在に倚りふ浄ふ浄みぜずすに
いの程迄添ふせられ度思ひ浄ふ浄ふ浄ふ歓浄歓さに疲さ浄いて浄死去なさられんと
観ぐ我等もぜずすし浄大切に報みを救すふに観念を救ひべし
第卅浄死去ありて先浄あにま汁りて浄土天ありて法聖人九重し天神に超浄ひ寂上の
浄位にで倚へらま浄ふなり夫ケ又浄色身も栄福を請浄ふん為に浄あにま救多の
天神を召連ま天降りふいて浄色身共に浄土天を迎浄ふ事を観念をべしされバ
天地の浄主を宿し給ぜられる聖さ浄色身を爭ふ常し人間し如くに枯景浄ふ
為ごさやぜずすさりし浄身し浄肉身を下し浄ふぐる如く浄歓をも石上げ浄ふこ
第三先天神八迷心故に同罪し天神矢ひさる浄取合せにて聖人達八昇進せられ
又諸天神し皇妃にて生せば三拝九品せる悦ひやさん事を是又如何程の法事な
らんや又先知者達八数千年以ある一切人ろし浄扶ふし浄歓ふし浄歓ふん事を何ひ
知られる事なま八天主に尊重崇敬やさんん事浄くの聖人八浄取合せを以不退の
快楽の堅小住せられまし八何迄も深く歓びやさんん事を観察べし同くぐるじん
さんなまりやの浄歓喜の程を揃し観ぐ事を教べさ事八牧尊の浄刹生を救さ浄ふ



世ぜずすり迎取られ浄いて今八永劫し浄楽を共ま請浄ふ事更に比喩言舌に及ひ
らびみぜずす字架に掛りふ浄ふ時浄歓浄悲涙に沉こを以事を浄浄ふ浄ふて不退しん
苦しこと覚へ浄ふ如く今八皇しなさ栄福を更浄ふを見浄ひて浄歓楽不退なるべし
然まば玫瑰花冠の勤を重ぜ彼人八此玄我に浄あにま浄取合せにて聖人達八昇進せられ
神聖人八此さかし此さやされ浄まと共ま生ん浄土天を迎浄ひ天
みちく十遍とたしおしよをや上べし

おしよ

いのに浄歓さんたまりやま浄大切し浄ま浄土天し此八人ろし浄合力とて此世に遺され浄へ
ども今八ぜずすと共に生さんが為に救ま給へ天神を召連浄土天ありて浄歓喜思召さる御念
願を遂浄ひう歓浄悦びに勢しがさみちく十遍天に生ん一遍や上ま歓又人くし
最期に八天物種さの障碍をなくて臨浄ま給へ浄歓浄終に八聊其俤なくなでず救歓
為浄大切し浄善徳其時弥重なり浄ふ如く我等が最期小も天物し障碍な
さまふに浄力を添浄へ
いのまぜずす浄胎内に宿し給ふ浄歓浄土天を法くし聖人の上天ま勝り
て如何程ま浄歓びに思召ん事なるべば我等も歓びをりて浄礼をなし浄ま又ハ
浄土天八我等悪人の浄取合せをなし浄ん為なれば浄取合せを以越方犯したる
科の浄赦免を乞み奉歓めん

第五番に栄福に玄義は童身聖まりや天上において栄福の室冠を請給ふ事

御母聖まりや御存生し間諸々の聖人諸々の天神にも越給ひて諸善諸徳充満し給ふ如く其御返報にも三位一体より余に勝れたる室冠を与へ給ふせられ御主せずすきりしとし御右の臺へ侍へられ給ふなり其栄福の高上なる事を天主より外に如何程なるべんと無へ事なり

此云義に付観すべき條々

第一童子聖瑪利亜個程高位にはげられ給ふ事を観念いたすべし先妙成音樂を以天神聖人を召連三位一体之御前に出給へば天主父ハ御寵愛の后妃と称し給ひ天主ひりよハ御母をぞりこさんとハ御妻と愛し給ひて栄福の御冠りを乗らせ給ひしん事を工夫せ奉し古への容顔美麗なりしまゝにて為ハ何世を忘る帝王より世に越て寵愛せくらまし玉し冠を帯し百代拾七ヶ國の妃に撰ばれ給ひしなれ彼衣冠ハ定めなきさせし威勢也御母をんたまりやハ美びなき御善徳を以嬋娟端正に在し天主の御内證に叶ひ給ふ御事なれバ三位一体の凡慮に及ばざる栄福し寶冠を與へ給ひて生涯下界の后妃と呼ぶめ給ふ也きらつもんし御母ぬべときらべハ或時奏問せらるゝ事ありて皇居へ出られ給ひしもん涼く景敬ありて則堂の右に侍へ如何成所望なりしと叶へんと云られたまゝ御母さんさまりやを御子ぜずすきりしと述へ取給ひ御右し基に侍へ給へハ人々し為御訴訟あらん事を叶へ給ひしもん何し疑ひあらん給ひしバ御上天あ勅を以在所し我等を志まし給ふにあらざれハ先さを救ひ棄れるを扶け給へと称天主の御前し御取合せあるべしと思へ

第二文に諸聖人諸天神を越て栄福の冠を文給ふといふ後を思案いたべし此童身の御あにまハ凡善徳を以莊嚴せられ給ひ清浄潔白なれバ御善徳に随て高位にはげられ給ふもの之其ゆゑでもハあぶらなむ始為させん祖達に越て堅固に在し御ぼつしよし

御悲みし御痛みハ何をし致命聖人に苦しこよりも深く貞節の潔さ御愛ハ天地開闢ゟ以来の善女人の中に御身始て童身の愿を立初め給ひ天主ひりよし御母と成給ひ天主ゟ對してし御大切し程ハ家徒せらびむよりも深くをはなり故に有とあゆる善人達の夫々の善徳に隨て象り給ふ栄福がしさを一致しても御母さんたまりやし御善徳栄福に及びまゝるゝ事にあらじ

第三個程高上し栄福の御位に上げられ給ふ道を観じ事新べし是則御謙り御堪忍大切貞節等し御善徳也然れば我等も其御行跡を学びまゝん為に信心を以致現のおぼしよを勤めん事専らなり

おぼしよ

いのに聖さ童貞聖瑪利亜諸々の善人に勝りて第し御善徳を供へられ給ひ御母し位に上げられ給へども何をし聖人よりも御謙り深くをしたまに依て天上にてハ諸々此天神聖人ゟ圍繞渇仰せられ給ひ之位一躰ゟハ第一高上し栄福の御尉を請給ふ御歓びハ如何をはべきや我等も歓びまり御歓喜に對し天にをは一遍がしさ充満十遍中上まれ又我を忘れ給ひしして個程の御歓喜の中にも思召出し給へと謹向れ申日いのにせずす御母し御上天なされて御右に掛へられ給ふを御身ハ如何程恐び思召はべきや我等悪人ながらも存生し間信心を以ろぎりよし勤めまゝの玄義に應して観念をいたし天上において栄福の御樂しこそ充満の事を観しまりてハ共に歓び



まり終にハ果しなき安樂の極めなれ天堂へ至りまり度こく願を叶へ給へとおみまゝ

あめん

# 玫瑰花冠記録巻第四

## 童身聖まりやろぎりよに影し給ふ御奇特之事

あらへより今に至れ迄御法の繁栄或ハ諸門流の真行有れ故に有百天主顕し給ふ御奇特の
数幾千萬と奢て負ふべからず此則其心を顕目真實成が故に人々行儀正しく方持を
改めん為に勝ぎさる道の鉄證として居給ふ慥成御判の如くなり往昔もいぜすを以ず
ら忍れし民に御掟を授け給ふ時是私を巧みにあらず天主御法なりとし沈しに恐
ろし此新成御奇特を顕し給ふが故に教へ導き給さいまつらへるに民も是さの天勅と
兼へて其法を保てり聖さ御教弘まるべきに付ても其實否を変し給はん為に御主
ぜずすさりしと幾許し御奇特を死影しあふ御上天以後御弟子達にまひりとおんと
天降り給いて教へ御恩を施し給ふ事ハ但せ直給ふ忍はんぜりよを廣め給はん
役を性に勤めらるべき為なりかるが故に家統ハぜずすきりしとし御上天し後此御教
し外に實し道なのさ正直として法高快氣或ハ死人を蘇生し百奇千妙を影して法至
御教を廣め給ふ之又御弟子達御死去以来ハ者を乞達した影善徳の高根に覚ら
んと欲るまた影人々に極くに門流を真行せられたり其数をいふに先御出世以来三百
十二年目に当りてさんばりよ始る門流を真行せられ天よりし御羌屬なりと知らせ給ん
為に則天主数多く御奇特を顕し給いて聖忍ふれん聖きりぞすとも聖げれどろよ
聖じきんだませの聖忍ろにも其外多くし善人此門流より出給ふ事の之又御出世以来



四百三十一年目に聖べなりと門流の始是にも数多の御奇特影まて此門流計りに聖人の御
人数一万四十六百人ありと学道達記されたる之聖おぐすちのし真行なきれし門流と上にも
影し給ふ事も多し又御出世以来九百八十年目に聖ぶるのかるとぞやし門流を合て給ひ
其以後御出世以来五九十二年目に聖ろべるとしすてるとき云門流出来たり其以後又
十五年目よさんべるなるぞ又是を改め給ふなり御出世以来千百四十年目のるべると申
せし善人合て給ふ也是ぶれもんつれと云門流もあり又千百十六年目に当りて聖ごみんご
法義者し門流を真行有る之其時代聖ふのれせすこと門流も始まりたる之右其外の
門流之上に御奇特を影し給ふ事ハ夫々し行ひを以者し達道に取らん為に天主導き
給ふ勝また影修行なりと分別して崇めさせ給はん為なり法まハ聖きろぎとりよく
勤めハ御主ぜずすきりしとと御母聖まりやし御門證に叶ひ奉影修行成事と人々天主の
御奉公に進むべき為に始さ道なりと顕し給はん為に和くも童身さんたまりやゝ聖
さんどみんごよ面見へ給ひ真行あべしと告給ふ之かるが故に此聖人し御在世し間此御
修行を萬民に御指南あり今れバ耳目を驚ろく数多の御奇特を天主影し給ふ也
又聖ごみんご御死ナ以来ハ此組を御再真しため当門流の善人達に授し御告ありて種々の奇
特影またるなり往昔ぼうを帝の手に渡りたるいまつらあるし民に自由を得させ給はん為り
天主より渡し給ふ杖を以極くし奇特をあらず影ことれ今れバ萬民奇異の思ひをなしたるが
如く多くの人々善に遠ざかり悪に覊されて天物く奴と成が故に其闇路を遁し約束し

たまふ國なる天堂へ導きたまふ爲に聖ごみんごを擇びおいてこのぎりよを授けたまふ彼は
佛在世中法花を以て末代に出るともろもろの功德にて勝れ奇特の花を天より
降らせんたまりやし佛參見し佛名を書し爲け卷に續く載を數ひものなり

第一　おぎりよし修行を敢て疑ふ事

添ふ事を疑へ信仰ありさる事

聖ごみんご童子さんさまりや告知らせおよろざりよの修行を國土において活指南ありさる
間大物種くの道より障碍をなすひの三成時も修行に怠ることなく成ぴすこほ
勿まに忍辱を揉め彼ごみんごい勤德添き理りを法せられず唯不說よ拍ーさうぎりよし昔ー
話以下の如しのごさる故を而已解教へられるひと云ふ輔りさるに依て彼誤り添さ事を疑へ
さむ法ん爲に佛母さんさまりやさまりの特をもせおふこ成時し佛告に彼るひす
こぷ教多ーく人くと共に大海を渡らんとするに及びてあに溺きて既に命も
危ふかりる如くなり其時其向ひにさんごみんご居給ひる如くなれがいのにも強さ橋を渡
給いて活佛の人救共ごと皆渡り給ふこ彼橋にハ小さ階十ヲ充立さる其間毎に強さ高接
一ツ充あるこさんぶかさ階の數ハ勘合百ある事あり高接ハ十ある彼橋を渡りかさ階と
譬に竟れくこのご命を保ちて余ハ皆水に溺きて死しけるもの二依れバ大川を渡り
ける人くハ内さくハうぎりを取漢した如くなるひすこぷかるりさんごみんごまさを取引
給ねて疑ひ咲乱まさる花園へ入らしし給ふこまでハまさ佛ませずすさりしさを





起さ集らせられさる佛母聖まりやを以て異香華薫ぜ敷る美事の花にて冠を造りる給ひ彼大
河を渡られさる人数にをり充ふへ給へる爲ぴすこぷも其冠りを頂るべさ爲に佛母近くまり
さけれども多へ給ふるのごさなりび却もろざりよし取談を數しく戻さ給ひて爾ふに世界に
諸悪充滿しるる依て聖さろぎりよしこさ橋に竟らざるにおいてハ科し別に泥むべー
給まば動ゝ善懲悪しる爲強さうる爲ろざりよを添く用ひ給ふべしと活勸ふ乳
色にて作せやる女給ふ也る爲ぴすこぷハ佛告を承り我誤りを見知りろざりよし
あるーよを勤めまされる淡給し時にも勇まらしこ是を教へられるものこさんぶも日教を
給ひて勤めに怠り仏多歎ら故に童子さんさまりや今をひし佛勇特をまさ
歎し給ふなりけるぴすこぷのにも添くく稼まさる池に溺まさらるくおよ白銀の須し教
百五十に黄金の輪十めくをりさるを童貞さんさまりやとさんごみんごまを救ひ
給へぶまに勇猛なるにより其大磁を遁れさる也を見せ給ふなり是を以勤ふひ
来れ共磁を遁れん爲にハ聖まりや与へ給ふろざりよし堆さ事を教へられ其後
衆生し間ハ修行を勤め活淡佛の題目にも取引是を用ひ切支丹宗に教へられ
けるものなり

第二　成人天物に我身を復を歎とし約束に血判を居て誓ひたるをろざり
よし佛勇特に勇て童子聖まりや取返し給ひて其人に取らせ給ふ佛まの
特し事

福有な教人さ人ありけるが日くに財宝尽く果妻子を育む事も成遂さ故明け暮足を高已欲さ悲むもの也天狗ハ彼に面見へて汝し真実し基ハ何ぞと問ひ給ふに彼人く返辞にハ汝中持る程の財宝ハ皆尽く果貪に極まりそれを意成故なりとぞ答へ給へば天狗其時ぞでをを捨浄掟を用ひざお事ハ有ら我に従ハ必ず一ヶ年に一ヶ度ハ一ヶ鉄鉢に血判を居て彼人が血一滴を叶へ以ての如くに福人になる仮名一とのけれバ貪欲に面ぞ是て彼首を記一血判を居て則天狗に渡しけれバの也容ぞば彼人或時歴く元と共にさんぐみんごく浄堂に来消しけるに其時し浄法徹に科犯しハを天狗ハ我が奴となし暴が気なのく仇をなの彼と隆天皇ハ世量こる大し源に生ぜが故に罪人善道に至らんため命を遂ふせと又浄教さんたまりやし浄教合せを教みをりろぎりよし種くの浄功徳を滅除へバ彼悪人し心に徹して科を顧みさんたまりやし取ぎりよし種くの浄功徳を滅除へバ彼悪人し心に徹して科を顧みさんたまりやし取合を以科し浄教しに到るべきと教母をも教りて教勧むるもの也天狗又彼人修行届くにおいてハ必ず浄法徹に科犯しハを天狗ハ我が奴となし暴が気なのく仇をなの彼と隆天皇ハ世量こる大し源に生ぜが故に罪人善道に至らんため命を遂ふせと又浄教さんたまりやし浄教合せを教みをりろぎりよし種くの浄功徳を滅除へバ彼悪人し心に徹して科を顧みさんたまりやし取合を以科し浄教しに到るべきと教母をも教りて教勧むるもの也天狗又彼人修行届くにおいてハ必ず





聖まりやの浄教の前に程久くおよよいこる仇ハ即悪に其血判を聖さ浄教より落し給ふとの也夫を見つの仇ハ血判之証据消一て有ら我を見こ浄教合せを以て天主浄降臨を蒙ふる叙も有ぞさ浄因ならなと思ひ一世の名の科をこんぴさんに懺悔りけるの

## 第二羅馬において或女人ろぎりよし事を軽むとの給へども浄奇特を表して以後信行さ

ゆるまー

をんぐみんご羅馬において或ぎりよしおなごよし浄功徳を扶承給へバ万人仰ぎもよしを尊うと勤めりさんも或女王こ八信用之心なく妻波しける也なり夫に依て其外のおじよを教ふ聖よりやし上教こ八ぐもろぎりよし教の心掛ぶーもなのり名ぶりのこ或時さんぐみんご彼女人こんぴさんを以浄為て種くの浄教化なされろぎりよしわざこを勧め給ひろれバ彼女人思ふ事ハだぐん多を責悪悪又ハ伝もの苦行をなして浄功徳深さ羅馬こ浄堂に来消いさん善作もハぐりよし教しよふりも彼女王こ浄異見のおじよを勧むるに及ぐ仇と浄教化に但ずごる也彼ぎばさんぐみんご是を聞さ給ひ聖まりやし浄教し前にて浄懇欲なされや上浄ふいのにるさ浄母さんたまりやし浄女ころぎりよこ用ひざる事ハ我等ぎ事こ有ぬ浄悪悪なの教に有れバ浄悪悪のよる彼女郎を勧むる道を教へ給へて我の浄ふやうに同一く彼女人も其時ぞんぐみんごる其誤りの浄教免をもひまんさんと心記りて浄堂に来りけるとの

ごみんごろざりよ〻淡功徳涼さ事を淡漠〻法みを聴けさ〻みぢし法〻法みを弾み
中さ〻二彼れが其間にうざりよく事を取〻たる科に依て天さの法前に至る〻厳さ法れ明こ
遂ひ天物〻まに法されて法れ極として暮けなく苦められるくとのこ其時彼女淡悔さ〻
野まりやに私みきりられバ懈の法毎面見〻法いおよ〻よ〻奇特涼さ事を初〻せ給て
宣ふにハ法ひおよ〻よを取〻る事の涼さ法りな歎が故にけなよ〻よを重んびべき為にハ
組〻人救天堂〻昇進を教高上の位を取んびべ〻と宣いのにも空間に構へるる〻
る事ら安城郭つとげ給ふこ先其接〻神をりふに水晶のめく輝さろざりよの組の法人救く
るすゝめく十文字のい女居られ妙成音樂を奏して救護の不可思議なる道理を順ひやさる
第四之三 らの二其時法毎さんたまりや宣ふハ何のまゝ取〻聖人〻栄福なるが心く
組〻人救八余に総てるよ〻位に依へられるものこ其故やのんとなれバ何のさ〻切も弁ぶ若人
〻他を涙歎せるに救護〻組〻人〻ハこ位一神を始めきりずず〻法退退〻
法よこ我を思ふ救救せばなりと宣ふこ彼女人ハ聖さ法言葉をゆて救護の修功斯程
雄さ事を獲さ則聖ごみんごつまりを参妙不思議な歎法告を言よいて〻家内
よ供ハ云に及ばぐ人〻にも勧めてあよ〻よ〻勤弁も懈怠なく善に首分りるるもの〻

第四之四

弟ロろさりよ〻組を取淡せ〻人〻〻よに天四討を与へ給ふ事
人〻ろざりよ〻おゝよをゆ功後心〻〻始て多持を改め若悦に首分り救〻ふ家特を
けおゝよに取〻法ふを天物嬢みて種〻の障碍をなし〻けるなりさ其中にそつを





云に記ばべ〻ころにやそふよ大在府の淡後者女人ろざりよ〻法法〻法みを聴けさ〻
まりやし法告にて是を教へるるにあゞ只ゆをんごみんごつまり〻自分の涼事なれ其彼
ぴさせ勝れて称まさし〻天さとさんさまりやの法内況に叶ふざきあよ〻よ可勤ゆ可なべ〻と
御言をゆひ組を誹謗せられ〻ゝ取〻よ依てけ修功に多く人届うざるものくされバそく
淡淡者も特我憤りを押立けおゝよと組をたさんとこ〻心尚にて未れごみにかし淡淡
にろざりよ〻修功〻功力ある事を法人に分別さ況べざ根になゝべ〻と家内〻約束
なり初て早さぼとこ〻夜し事なれバ右令てし覚悟をなて心易く寛さ寝られるに
も夜誰も都ゞ敵死せられるものこ夜も早明られバ淡後確ゆ〻為に群集したる人〻
程久く待東護ゞべき為に周に入て見れバ只ゆ若死し有様を見らるると思ひ為ら況ゞ法四討とも思ひ為ら況ゞ死
なれバ彼死し有様を見らるると思ひ為ら況ゞ法四討とも思ひ為ら況ゞ死
なりと思られ況ゞ修功をな振ゆんとし有を況人こ前の様ま倚ふへよ〻んとせ〻ゆるが
如病に犯され口禁りて忽ち人〻前に倒れ伏されるこ彼をでも本性を失ひざる事ハ
是我科故こと顧みて後悔さ為ろんゆ法ふものこ其時ろざりよ〻
よに叫し〻みさる重罪故にさ新さなる天四討をろ取りさりと歩へられ涼さ淡りと後
悔を取童身さんさまりやし〻我ゞ聖さ為し淡後者と成
法功徳涼さ事を若民に取〻べき為命を延給ひて伝導の自由を治得させ法ぼろざ
りよ叫歎〻る取〻今よりハ心を砕し〻是を致ひ勲功を尽〻て取めべ〻と念ひ

百十一

聖ごみんご羅馬において玫瑰花ろさりよの理りを説給へバ聴人も是を信仰いたし申ーしなりにしよとご勤め
行ぜらーしく成て其魂ハ数多く徳を得らる者なり其ハ時代羅馬において、かたりなと云ふる大罪人
し傾城あり彼女ハ美目貌ちせに勝れけれバ数多く人を悪道に引傾ける者なり然も其節に
聖ごみんごハ御読経を施けいらし給まづのろざりよを一連申されて其日ハあまた悪にハ頓
着もとくかへどもおらしよをば毎日勤めらるとものこされバ気くも悪人を御済度し為に十字
架に掛り給ふ御主の御姿に変じ給ひて羅馬の所にて彼かたりなに行合ひ給
ひて色に清物沢山のされ其ハ日も晩炊を彼かたりなし宿所にてなさるべきとなし清約束
なり彰て彼宿所に清幸ありけれバ見んとさるとに貧次身に涼き致ひし心出来其ハ清
容都見とらると事も成跡く恥ゝしと思ひ申されけれども心中にも未だ個種の悦びを覚
へられし事なりしと也給ひて饗堂に移らせ給ひ御主な掛給ふ程の御食物も色
皆血に染たる如く成られバかたりなを見てられ饗臺にある小刀にて自然清ら手切給ふ現
と思ふとに彼御方宣ふハ世のにかたりなよ我為にもな切らバ切るも汝ら食物に
向ほん時ハ如何成旅物成共ハ服せんおにはん清ませずすさりしと清ばつーよし此人
間し斯故に流し給ふ聖き御血と御恩を思ひ出し其血に食物を浸し奉れと
観念すべき事なりと宣ひて孫増に美く見へ給ふ其時かたりな孫
恥かしく思ひ申され致ひと思まくし心出来申よふよしく極も清身ハ務へにも羽
にも及ぶぬ美麗にまりが如何成御人稱にても我に知らせ給へと申よふ



るれバ姫て我由来を知らるべしと清まへると実か清晩炊も過ぎられバ清あ人御巳其座に残り給
ひて兄窓に及ばざる美麗に変じ御頭にハ茨の冠を着し給ひ十字架を擔げ清身足と
御服にて清ばつーよし時の如く新あ清疵影られ又清身体にも御血打散給ふ清姿見へ給ふ之
かたりなは御姿を見んよりも忽ち恐を深さて御天せられれバ其ハ時彼童子御力を添給ひ
哀を成給ふ御言にていかにかたりなよ今日かの科を犯し事なの我幼き時より十字架とよにて
死まてまで汝に對して凌ぎらる苦患の程を見ませば我を背く事あるべからずと宣ひて
清ばつーよし村種々清苦患を説記し給ゐて哀を成清有様に成給ふ清貌に変じ給ふこ
また其量なき御威光を顕し給ゐん為に至然日輪よりもみやびやかに美き御姿に
成給いて宣ふハ如何にかたりなよ凌生し道にハ七日間し如く冥闇に沈みたる淺ましき心底を
厳み同じく我汝に對し重々の大切を汲凌さらる可責を又也なし実もなき邪樂を捨
畢ーて汝し助かりし道と云ふハ唯今汝に見せたる有様を観念まら程に極まるなれバ己
聊も忘却まらるまるなれと宣ひて見へ給はざるものこ彼ず彼女哀清有様を見奉られ給
より貴もなき世界の邪樂を捨心を翻し我方し多くし科を悔悲み科し償ひになれ
争ひさ難行苦行を如何程尽しても未だ遠しとする哉べしと思ひ取事凌生し道に進み
程し事をさんごみんごし御指南に任せさとしる所にて後悔深からびい聖人に
こんぴさんをつとめられれバ相當し科送りを仰付られ則ちおらりよし不可思議なる道
理を数へ給ふものなりかたりな積くを励ましおらしよ勤められるに依て善道に立入

其以後ハ持を改められんなり聖ごみんごと彼女以ハ救多く科を以ハ心を稼されられ共
今ハ早速退を改め清淨なる心に成給りけるを淨流ハて大さに悦驚き給ふこと如り聖さおら
しよく勤に届られけれバ夜半し間及こ大里ら淨告と救ハの淨恩とを蒙られ又弥増して科送
りをなさんが為にも持をこる程の財宝を分貧人よ施し塾居住居をなして悲み給ひ雖ら
年月を送られられバ寂期ハ童身さんたまりやと面見へ給ふとの
第八ろぎりよく淨功徳にて善に亘入一生不犯に届さたる事
せるまにやく國に有徳なる長者ありら男が親に後もてより張りく財宝を悉く賜
妻く其外の寶ハもなのさ事に費ハ一花に世をも已けれ共不犯く若を保ちたる者こされバ彼人
く伯父さ人ありら男が或時途中にて好合種こに異見を加へられられ共夫を憑用せざ
事に依て重ら又異見を加へらるゝハ花りに光陰を送らんより一日く間にろぎり
よく於じよを三分一勤めよごとく其以後又伯父に逢ひられバ以ハく異見を何と保ち
けるや否やと問られらに其時男の返事に其事こ始めく間ハ父母各におじよ勤めて何
たる益もなりけるとハども今にハ其徳を失へ世界く寶もなき事を見知りたりと
なり伯父ら男をすゝられ給るにおいてハ今又一年こ月百遍を勤めらるべくと教へられ
けるに依て指南に程せられけれバ早心勇み則伯父く宅へ到て我悪行を今こそ見知
り男に善にをづくと淨ふられるとの事伯父ら男をゆ斜なるよ歓び今一年ハ以十
遍をも添同く十ろみをとりよを観じべく一生を勤められるにおいてハ相違く



縁邊を結ばんといふられるこ男ハ則其言を慥に勤めけるに依こ彼女縁邊を定められ給ひ
給ふぼ祝給く日其祝ひとして親類其外悉ら集り其親式をなして早各級畳に向るく
砌其日く取乱しに彼男ハおざおじよ勤めざる事を思ひ出一伯父にもうらくに告一時待さる
べく我かく用事ありて局に引篭りろぎりよく其間に童身聖まりやと共に童身聖まりや
面見へ給ひがらさく於じよを絆地に縋給ふる言語道ろ更く衣裳を二ツ見せ給ひて寶ふ
にハ年月く日数が勤めく於じよく功徳ハ是なりと又以ハ花らに云ふけれども不犯の
善を保ちる功徳に依て又其善に寂期近届くべさ為に悩病に犯されて夫婦の交りを
遂ざるよみにさく我内證なれバ三日同に死て夫よく果なさ快樂を更べくと宣ひて
見へ給ふざる之件く淨告を蒙り彼局より出各級畳に向ひ並居られるよ我乱合悪く
ら乱バ淨免あるべく各ハ何ども云給へく如く局へ入られるこ其
座を退けれバ嫁を始め親類知音の人乱を呼集め彼人くに右之淨告の様子を委く語られて
如てかくの悩乱に犯されて三日同に死く上天の快樂を遂らるべさ為めこ之名ハ淨去特ゆ
られろぎりよく信心斜なのぶい彼嫁に変りら女人も彼人くの法を学び一生不犯く行を
保られけるとめこ

第九或女前を切落されけれどもろぎりよく淨功徳に依て死せざる事

或ら女有ら男ら男を好みく て男を彷り浮世の男もなさ事にのこ好着くたるものなれら
童身聖まりやを深く信仰いさくろぎりよを毎日勤めたるものこされバ或侍女人彼女に

遂して互に悟氣をなす一見遠に別したるその二女殺さるゝ時こんぴをん殺しべきさまふかい天まの浮あに浮取合せをなし給へやんごまりやをおみをまら礼名礼ば隣の浮母浮納受ありて其あにまい為を離れざるまふに計らふ給いて彼井首程入くく井の底に落るまこさんばさんごみんご其河を通り浮ふ聖まりやし浮告にてき事ず初石牧多し浮供し元と共に彼井しえに五寄上にまとと宮へば忽ち其首井枕しえによりてこんぴさんをとりをぶりめんとを突なりうる二其福の人くいは首を討とて浮しき事をまき祢ら礼ば取引二つく事を浮りふなく先とをひにいまにまも色身を離まび科活幽殺るまふに計らふ給ふ事いびるぜん聖まりやし浮取合せなるまみにいは首を討とうるとさ天物群り来りてあにまをいんへるのよ落さんとをるまをさんさまりや通し浮よ事二ー五百年新合七百年煉獄に浮居いべきさをろをりよし但しし元し祢じよし功徳故に早くに上ぶ給さんく教母の思ふと浮りて井枕しえに二日ありて死けるとの二其以後又ず十日月に並あにま大光明を発ーさんごみんご面見へ浮忽悪を以早ぶるがりよふなるとば給ふなり其時又ぶるがりよにうあにまも達いろぎりよし浮功徳通用をべき為に犯く知音の人くより組し帳に消よれあじよやさるべき事を教するこをに給ふにおいては上天を逆てより其報恩をなべーとくし依なり又天堂にて天神達いさ組を飲びりさ礼泳ぬさまの浮をおすすさりーとい十組し浮親びるぜんさんまりや浮母と唱れ浮ふとを忘に浮り







三天せる礼るもの二

第十或人し妻自害けるごろざりよし浮功徳にて蘇生したる事

或侍童貞さんたまりやに信心深さに依てろざり浮堂を立つて夜昼に依らびおじよし為に報事く糸り夜半にも窺に忍び出て常之如く浮堂へ参礼ければ妻の思ひにい定めて涼く思ふるし女ろてなこ夜まし通ひもあろん別しみ細いなうべーと悟氣をなしてまし雨業を郷推せうるもの二さ礼ば或時夫に近ひて我に勝りて大切深さ女ありやと等祢ら礼名歎に夫し給ふ事に返事にい中ら料遣に勝りて涼く大切に思よ女ありとら名礼ば又宣ひて琴祢らるくい定ろ自うふよりも男人なるべーと又位も伺ろあうふんとまで附共事二ろあるに依てろざり浮堂へ参礼ければ妻い夫し心為し返事をおーも参へぞ貧にも浮世の習ひなるべーと思ら礼今い早我さ礼なる前報をろら礼ば忽ち死即時に自害せら礼ろまで夫彼表礼前にて夫を停さ妬に依し流涕こがれけ兄に立ち当を加へ給へとおみをまうるに童身聖まりやし浮取合せを以彼妻を忽ち蘇生り閻より外へ出ずべさ為に其声を叩れるく其時下人ら人皆をや分浮堂へ参りてろざりまい是をやうれ兄れうつく元と仮び新なるぶ浮主を始めをり童身聖まりやら浮礼をや上急さ却ろ其声を明けら礼名礼ば妻出合せまーおに平伏して邪推し料し赦しをもえおびよし功徳にて地獄の苦思を逃れ

うるうこと礼をもやされる事となり給ひて又死してより妻ことに有たる子共を愛し
事を賢給られば妻の返事に七月宮ーけ歓陽的に数多の天物が群り来ていんへるの
引具せんとて魂を取囲みられば天童ー法前に石出され則いんへるの苦患に落着ける
給る時の有じよし功徳に依て道をさるこ之不能法に目害ーたる事を童方さんたまりや
帰よ法なされ我が故天童ー法恕を免の礼拝し後悔を敬ー聖さろぎりよを学ぶ故
そさんがため模生ーしめて法取合せをなーめに依て夫を法悪悪を改ひえー肉
名に模生ー母ーよ報法ーられるものこされば親類数多りー人ーを催ー集めて
特を法ーるをやせられれば何とも安ー思ひをなーろぎりよー信心清ーべ又
彼夫婦ハ右じよー法功徳に依て参りおられる法恩を有命ーるいと忘れずさんさ
まりやー法奉ーに数朝まで届られさるものこ

第十一成女悪居故に活なぐ云に埋められるといへどもろぎりよー法功徳り
依てこんぴさんー為に命を速給ふ事

或男さ女物まーとより妊娠よ妻さるものこ彼女いあり神祇をさるにおいて一面
目を失らんと思ひて深く謹み恐慎たるなり或時神文ろぎりよー法功徳を決せら
るるに誰にてもあ也祖に入れよを信心に勤むるにおいて物の妨碍をも通るべーと
ーー事ー女ハ件理り中にも我身に過ぎと思ひ則祖に入てろぎりよー勤をなんとの也
られば日数後て霧よ屋をーけるが元を人ーに深ひざさ為に則よを殺ーて寝所ー



下に埋めけるものなり天主彼仕業を憑ーら法恕ふる為ざこ帰内証なる事ハ程なく悔ーて女ー
嘱め活なの埋めんと一定ーいのにも深く穴を堀て埋めを護ひ眼掩にて掩固めて人ー
帰りる跡ものこ良くありて彼女完ーし中々呼ひて云ふれいおぐ我死なばハ程生せざこ及く
呼ぶに依てる見ーしへ人ーと足を出ーこハ何事ぞと驚を消ーて掛りー祥文を唯文数回拝集ふ
おにをを堀られ出ーられ我が恙なくーて坐ろ我なり人ーを見て今ーまの成故に活蘇ふ
ーて居けるぞと尋称られバびるぜんさんたまりやーろぎりよを信伴ーさー信心を以勤
けるに依て前行ハ消ーをさんぴさんを不数故に来苦の苦患を乃せ給ひ則支に落着
せざるべさをろぎりよー法功徳を以死せざる報にはをんさまりやー法奉ーを励ませ給ふこ
深りけるなり依ーて数年ーるさんさまりやー法奉ーを励ませ給ふ毎日おろーよを勤めて
若に寡りーけるごなり

第十二成女に天物有さるぎろぎりよを掛て入るるハ離まこる事ー

或女に天物消さるて悩ーに依をなー責ら給ひこ法をバ親類知るーべうぎりよを
信伴ーけるに依て彼女を迎へ入まろぎりよを勤めさせるこ依るにこん
たすを掛て入る間ハ彼女を天物離を掛ざるるハ又取分て継後をさするを有前程の
法奉ーを励ませ給ふ天物ハ終に退散ーたまりよを雑さバわしよを中祖ーられも其為にわろ
ーよを勤められバ其法功徳を以天物ハ終に退散ーたまりよー帰功徳にてこんぴさんー為ぬ等
第十二成山賊女に埋められけるぎろぎりよー帰功徳にてこんぴさんー為ぬ等

し間命を短させ給ふ事

聖ぶみんごし時代に隠まなき山賊有り数なり徒迷ふとしける二依るに聖ぶみんごハ彼山賊を善道に立入んと思召事を斜めなるくざるが故に彼がねに歎くの数をまし給ふなり或時天主しの御計らひにて仏教化なましいんへるの苦患しき事を御りやせ給ひ又沸里天主しの御奉公を励ん人くに法約洗ひ沸教化なましいんへるの教へ給ふなり或時ハ沸里和しの御会勘にて其悪行をとめ一編よ天堂しの道を顕へと勧め給ふ人どもまをやり用せざるものなるが故に其時聖ぶみんご仰せるにハ汝ハいつも善院を造るとゐんへるれバ宗教易さうおりよしおりよをす勤事也と其時彼山賊数の領掌数し山賊をとめざれをたびよをく毎日勤めけるもの之助しゆく年を経て終に山中にて果けるもの之同類し着共彼死體を大に喰ひさかと思ひ泥し河原に埋めをするなり其後元二年程経て聖ぶみんごハ門流し神父と教をへし世話をさ連彼塚の色を通り給ふいいのにて奉もし沸臣下神父ぶみんご我を懐み給へとゐあやへり給へ誰呼ぶともなく其あやへりるが故に塚に立沸給ふ程彩定を成に依て塚しよに立体らひ給へバ同人のにも妻と成おやへりるが故に塚に立沸給ふ程彩定を成に依て塚しよに立体らひ沸足えに来ばんひさんへと彩み申之名共を見られ時を消し妙を誰を取をるぞと尋ぶられんバ我ハ是も多年山色しく山中にて悪しく人くに仇をなしたる山賊之後也ゞ或時我気を失いるに依悪しく者共城に死しけるも思ひ之に埋めをるこ我教年なしるも





罪業故いんへるの乃し苦患を受ごきをそもさ立聖ぶみんごさせ給ふん為命を天主ぶさせ給へバ彩あにまあ方之にて煉獄に歩年しる日を送り給ふ彩の津にも叶沸慈悲深さ事ハ此等之愛に依聖まりやしろぶりよをやり給ふ彩み申之則科の沸教兄を祭り彩め其後に死しける者なり

第十四　羊のまを飼ふ女し臨終に童身さんさまりや面見へ給ふ作法の特し事

或人し娘親し羊を飼ふ為に日くに山野に彩也給ふに聖まりやし沸堂に彩し参詣彩ばかの子ども一てさんさまりやし沸教にハ不相応之事と思ひ相談しいんでも其方も貧女し事なれバ其彩ひを叶へバ沸教に向てよろのハ沸の童身聖まりや沸方し沸教をいのにも花飾に彩りをりうく彩ひやせざるも自くらも貧人し事なれバ更にかに及ばぬ代りに心ある荘厳よりも彩勝也てゐ内證に叶ふ供彩りなるぞりよしおりよをを捧げをんとやよ教へ彼ハ教年しる彼沸堂へ参詣さし懈怠なくおりよしおりよをを勤めけるもの之其次後病に犯され彩期に迫彩けるにみさ彼他彩せさるさんぶみんごし近示を通てれるがさて人ハ時に寝をてかし賞がん通右し沸堂へ立寄られるこ同彩し今さて人ハ沸教に立寄ぬ事成衣装を改し給ふ童身

達救多女人宛に示び彼神又〻前を礼をなして通り給ふ又次に婦女人衆を着し通り給ふ同じく神又に洗礼をなさんが為なり二番に小人男に変成と見へ給ふ婦女人達赤白〻色混したる衣裳を着し通り給ふが彼亦肉にも世に勝れて容顔美麗に在ス女人をも人供〻かさもこ彼洗方し洗被衣にい赤白〻花を絶物にして飾りる之洗所に入ニ百舌比喩にも及ざる洗冠りを載さ給ふ之有〻神又彼洗方に給ひ洗名如何成洗方にて立ルで又供〻かさるこ凡ハ七の成人〻ぞ又他の聞へ給さ給ふごと其時彼洗方我ハ悪人〻為〻取合ふ洗合力者なり心視より我を祈むへ〻へ合力をなしなり供〻童男達ハ天〻住人〻之給ふぼさ薩合に坐ふ女人い我に信心深く〻つゞりよし祢びよを日く勤めて我今着ま歎衣裳ニ冠りこを調へ給ふ故に其報謝ニして見舞ふなり之旨ひ見へ給ふぞ之洗堂に三寄られる今ま人〻神又も同じ洗告を給り亦に坐ふ被洗て病人〻え〻ぬさ祖なく立ル〻へ着て宿所を導出し内に入て居られるれバ彼病人い救〻皮を衣袋に表せ来を組入て枕よ〻うる力体然に其枕えにい童男さんさまりやと途中にて見給られる洗被にて救多〻童男達共に立添立ルを礼拝申さるゝ如なり宅ニにい家ハ見苦さ家なりと雖宮殿楼閣にも勝まさる旅ニ童男さんさまりやい美事成花ニ造りる冠を捧〻へ立ル之ニ則病人〻あにまに載せ給ふ為ニ又救多〻天神達妙成音樂を奏〻病人死をると共に其あにまを童男さんさまりや并洗供〻童男達共に天ニ〻伎樂〻召連給ふものなり



第十女成女人ニ重き科を救ふ事〻るこんぴさんに深〻懺悔いさ〻たる事

成女こんぴさん〻時待〻科を犯〻ぬ多くも多き科犯〻たるまゝ〻〻に安されて那さ〻ぬ者なりされバ彼女思ふ事にハ科を仮令那〻とも天主安ハ彼科を免し給ふ那〻と心尚にてすぐ〻よ（粗衣を着して多〻院坊を尊むるを責むるなり）依てこんぴさんにハ余〻科をし〻も其ニ益多うたなり洗の特をす傳て祖に入ル之よを毎日勤め多れども彼をつく〻科を終にこんぴさんにも洗にても那も此事なれバ洗安〻時刻多来て大病に犯され日〻衰へ〻ゆくとも彼科を那をべ〻とゝ思那〻ぬさんさまりやい洗衆合せを収救あにまを助けん為〻と天主に祈み奉那のこゝろざしよ〻祖し人〻い那為祖に入さる西忠人〻為にも常〻形ばよを勤る事なれバ其中洗門院に叶ひさる多く人〻ぞ又天主安給ふのこゝ先女最期一日ものに洗をくるすに掛り給ふ洗姿にて面見へ給いく宮ふいいのに女人汝と世界の人〻の為に救主安ニ代て死さる疵と流したる血の淫沢なるを見ざるや汝が心頑あ〻るが故に多年科を深〻那為功力なく憲法に随ていんへるの〻苦患に沈着をべさることいふとも汝が一生涯〻善と悪とを比きん為に明日死までさ定めなれバ急ぎべ〻ぶ給といふとも汝が

有在の罪科をこんぴさんに祈をべーと世界にても稀〳〵償ひとして巌き苦患を蒙くとくに
蒙らすべき為に大熱〻氣の病を犯されて死〳〵死骸が大鍋に集さる如くに成べきと何まで見物
をべーと宣ひて見へ給ふぶるまこと弦まこは聖き沸言なれバ
甚〳〵き事なれバ沸苦思ひ合せ則神父さんに
持と同く沸まぜずすより告給ふ事を信り
斜なるべこんぴさんに祈てもかくめんとを
有会さる人くまも死骸をみれバ沸苦〳〵時の
を見て何ともさんたまりやに信心を催〳〵
第十六或人にこんぴさんを祈り通いろ〳〵
さんざみんごりやにおて手疵なきるを
ども深き科を赦さ事に深き科を乃こ祈
人〳〵心底とも能勧給ふ格別〳〵がくさを
給いて寄ふにい彼こんぴさんいふこ底なる
報さを祈て重さを限〳〵なれバまを乃こ骨
中にもいつもをいにい着屋のすこ科に沈
傷に誇りて寄もなさ成物をおとしけるを
たる事ハいつにい分員者に憐こなく成い

持さる財宝ハ他らに大馬に食〳〵め費〳〵た歟事なこと作せせ給へバいのに聖き神父さま
まで祈こんぴさんをけるれさる神父ハ元ら多〳〵と沸必さ事細さる忘れさる科と祈さん
たる事なー一編に我を放ち給ふ事なれ個程を忘れに誰れこんぴさんし適を教
ゆべされと祈みさされ多歌とのこさんごみんごし沸返答に汝を昼夜放ち給ふまでさ
明證を相定むべーと則ろぎりよと其みとてりよ〳〵観念こと宣ひてろぎりよ一連
亜に沸〳〵給へバ沸教化く如く其後行を勤さ世を厭ひ
貴もなさ栄花を拾沸もせずすさりー〳〵とく童男さんたまりやし沸苦をを励まれ
多歌とのこ弦〳〵て一ヶ年目にさんさまりやし沸苦ある時ハびよをせうるにがさ
元満ゆさる為にいのにも要悪なるあんどよ一体こんたすし程をもツ死取
給ひる門に立ハ童身さんさまりやに指ばゆさるれバ聖さまるに沸〳〵てゆ
花に変じ多歌を以成堂閣を立給ふをを見せ給ふこと思をを乃されろぎりよしあり
ーよを勤むる人くを為天において結構なる住所を整へ給ふと分別〳〵て孫善行に進
沸主せずすゆ母さんたまりやの沸奉公に最期と届られけるため

目録


巻第一　ろぎりよし　おびしよ　ゟ集り根元之事

第一　法の法名今し法取合せハ天も し法前において大成便となるとき法童身聖
まりやし法取合ハ程勝もて天も し法同説に叶ひ給ふという事

第二　童身聖まりや法身をおみを数人くに勧る法会力をなし給ふと法中
ふも聖さろぎりよに勧し信心添さんに法取合せをし給ふという事

第三　ろぎりよハ二つゝおびしよに拠まるという事

第四　童身聖まりやし法告を以ろぎりよを法奥うし給ふ

第五　さんごみんごま母さんさまりやし法告を以ろぎりよをおびしよを可ゟ祈ふ

第六　ろぎりよしおびしよを勤むるを以救母衆心出来るという事

第七　代ゝし教皇ろぎりよし組を法須掌なされ泳法固め無給ふと云事

第八　ろぎりよし組の法定めし事

第九　ろぎりよし組を奥うし救びべくまにおいて係りべきとし法定めし條ゝ

第十　ろぎりよし組を奥うし救びべくまにおいて係りべきとし法定めし條ゝ
し事





巻第二　おびしよし ろぎりよし 並同く勤め様し事

第一　聖さろぎりよし おびしよハ法をせずすさりゝさし法出世し名量し法恩を忘
まじき為勝もさる道なりという事

第二　ろぎりよしみをてりよし観念いろべを以哭視の涙さ徳を得る事

第三　天主の童身聖まりやに奉へ給ふ法善徳の勝もさる事をろぎりよし観
念を以明白に奉へ給まし事

第四　さる法母聖まりやし法名の救多き中に天主し法母と称給ふ事ハ
世に越て勝もさる法名なれバけ聖さ法名を以ろぎりよし門弟さみ信仰
し事をおくという事

第五　聖さろぎりよしおびしよを勤むる人ハ法母さんたまりやゝ取別法大切さ
思召又弥増に天主し法奉公と其法大切し道を立入という事

第六　心の中と共に聖まりやを崇めをよびして不叶祝ごという事

第七　ろぎりよし唯く勝もさる道理というハ己勝もさる善人さんどみんゝ
童身聖まりやし法告を初ゝせ給ひし代ゝの教皇も其法門流に相續あるにより
初ゝ給ふる事

第八　聖さろぎりよしおびしよをやべき道を教る事

第九　おびしよを可や祷ハ十めゝ玄義の續物を以し其観念を可致事

第十　天主ゟ為ニ義師恩賞をろぎりよし内に申上報じ奉ぬべき為に義事共に捧げ奉ぬべき事
第十一　ろぎりよしおしよをてゆ内他人し為にも形みを報ぬべき事
第十二　ろぎりよし師功徳を以おしよ御納受あるべきと形母愛ひを報ぬべきの
第十三　天主ろぎりよしおしよを御納受あるべき為ぜぐんをいたし慈悲の所作をいたし別而我敬し為に形みを報事ハ大成便りとなる報といふ事
第十四　ろぎりよしおしよを以祈祝を叶へさせ給ふんためおしよし勤に届くべきの肝要之事
巻第三　十四しみすてりよに付観ぬべき題目并同じくみすてりよに当るおしよし事
第一ゟ第四ゟ　悦四ヶ條
第六ゟ第七ゟ　悲四ヶ條
第十一ゟ第十四ゟ　栄福四ヶ條
巻第四
童身さんたまりやろざりよに報し給ふ御寄特し事　十四ヶ條

目録終